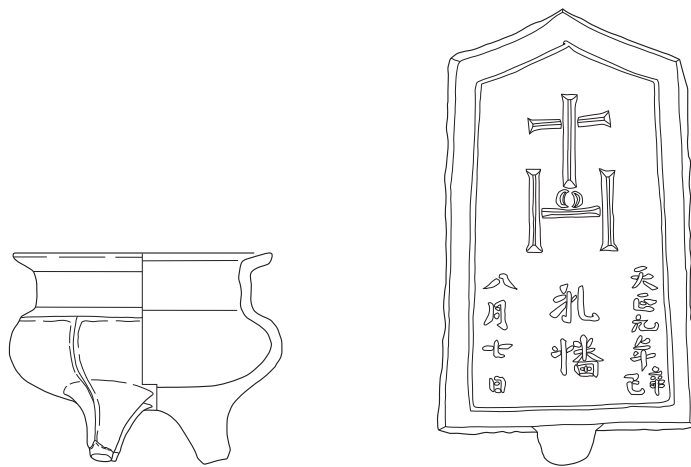


四條畷市文化財調査年報

第10号

寺口遺跡・千光寺跡



令和5（2023）年3月

四條畷市教育委員会

巻頭写真図版 1



1. 寺口遺跡・千光寺跡 遠景（南から・平成6年）



2. 千光寺跡 全景（南から・TG1994-1）

卷頭写真図版 2



104

1. キリシタン墓碑 (TG2001-1)



1

2

3

85

2. 陶磁器 (TG1994-1)



36

37

38

39

33

3. 青銅製品 (TG1994-1)



86

4. 白磁皿 (TG1994-1)



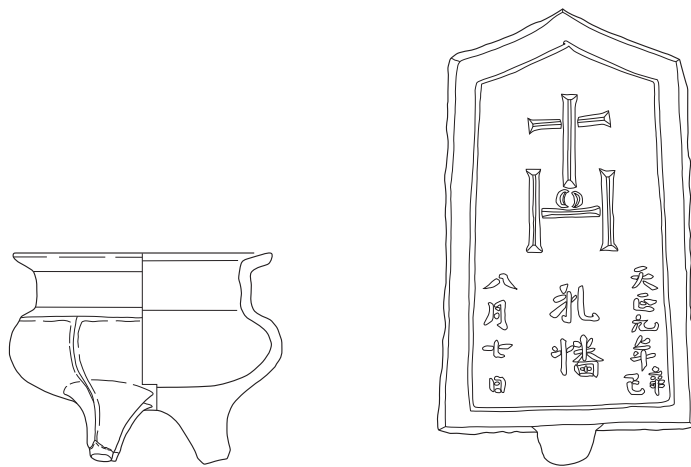
101

5. 永正13年銘五輪塔地輪 (TG1994-1)

四條畷市文化財調査年報

第10号

寺口遺跡・千光寺跡



令和5（2023）年3月

四條畷市教育委員会

例 言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第10号であり、四條畷市文化財調査報告の第62集である。本書には、平成6（1994）年4月から8月にかけて宅地造成に伴い（TG 1994-1）、平成11（1999）年11月に道路建設工事に伴い（TG 1999-1）、また平成14（2002）年2月に駐車場造成に伴い（TG 2001-1）、寺口遺跡・千光寺跡（調査当時の包蔵地名は寺口遺跡）で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。
2. 寺口遺跡・千光寺跡（TG 1994-1）の発掘調査は、住宅・都市整備公団より委託を受け、寺口遺跡・千光寺跡（TG 1999-1・2001-1）の発掘調査は、医療法人和幸会阪奈サナトリウムからの依頼を受け、いずれも四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 寺口遺跡・千光寺跡（TG 1994-1）の発掘調査は、四條畷市教育委員会歴史民俗資料館主任 野島稔の指導のもと、技術職員 村上始を担当者、大塚小百合を調査補助員として、寺口遺跡・千光寺跡（TG 1999-1）の発掘調査は、四條畷市教育委員会生涯学習推進室主任 野島稔を担当者として、寺口遺跡・千光寺跡（TG 2001-1）の発掘調査は、四條畷市教育委員会生涯学習課主任 野島の指導のもと、村上を担当者として実施した。（肩書はいずれも当時）
4. 発掘調査実施にあたっては、住宅・都市整備公団、医療法人和幸会阪奈サナトリウム、地元自治会、月泉寺、森川組、東海アナス株式会社、株式会社パスコから多大なる御配慮・御協力を得た。また遺構の移築保存にあたっては、住宅・都市整備公団、株式会社近畿ウレタン工事、株式会社バーンズ、株式会社宮崎建設に御協力いただいた。記して厚く感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人）、山口博氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国語大学教授）、藤澤典彦氏（元大阪大谷大学教授）、吉原忠雄氏（元大阪大谷大学教授）、手塚直樹氏（元青山学院大学教授）、佐久間貴士氏（元大阪樟蔭女子大学教授）、堀内明博氏（元京都府立大学特任教授）、南健太郎氏（京都橘大学准教授）、山崎信二氏（元奈良文化財研究所）、馬淵和雄氏（日本考古学協会理事）、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）、奥田尚氏（奈良県立橿原考古学研究所）、赤澤徳明氏（福井県埋蔵文化財調査センター）、岡本広義氏（元興寺文化財研究所）、小林義孝氏（元大阪府教育委員会）、橋本久和氏（元高槻市教育委員会）、森村健一氏（元堺市文化財課）、虎間秀喜氏（元岸和田市教育委員会）、三俣俊二氏（京都聖母女学院短期大学名誉教授）、久米雅雄氏（大阪芸術大学客員教授）、村瀬 陸氏（奈良市埋蔵文化財調査センター）、野島 稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同。敬称略。所属は現在もしくは当時）
6. 出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課上席主幹兼主任 村上 始、主任 實盛良彦、事務職員 田中香里が、会計年度任用職員 田伏美智代の協力を得て行った。
7. 本書は、村上・實盛・田中が、分担して執筆・編集を行った。明治六年廃寺取調書の翻刻は、四條畷市文化財保護審議会委員・四條畷市史編さん委員の山中浩之氏が行った。文責者は各文末に記載している。
8. 発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2. 土色の色調は、1994年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 報告図面の表示方位は、平成6年度1次調査については当時標準であった（旧）日本測地系の国土座標（第Ⅵ座標系）に基づく座標北である。それ以外の調査は磁北である。

本 文 目 次

卷頭写真図版

例 言・凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	7
第1節 遺跡の位置	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 調査の経過	10
第1節 既往の調査	
第2節 調査の経過	
第3章 調査の成果	12
第1節 1994-1次調査	
第2節 1999-1次調査	
第3節 2001-1次調査	
第4節 出土遺物	
第4章 千光寺跡とキリシタン墓碑	43
第1節 千光寺跡と田原城主	
第2節 田原城主レイマンのキリシタン墓碑	
参 考 文 献	52
出土遺物観察表	53
付編 『廃寺取調書』(明治六年) 翻刻	62
写 真 図 版	
報 告 書 抄 録	

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	8
第2図	調査地区位置図	11
第3図	調査地区平面図 (TG 1994-1)	13
第4図	調査地区断面図 (TG 1994-1)	14
第5図	1号・2号墓平面図・断面図 (TG 1994-1)	15
第6図	3号墓平面図・遺物出土状況図・断面図 (TG 1994-1)	15
第7図	墓域平面図・立面図 (4・11～27号墓 TG 1994-1)	16
第8図	墓域平面図・遺物出土状況図・断面図 (6～10・32～34号墓 TG 1994-1)	17
第9図	墓域平面図・立面図・青磁香炉出土状況図 (28～31号墓 TG 1994-1)	19
第10図	墓域平面図・立面図 (35～38号墓 TG 1994-1)	20
第11図	土塀平面図・立面図 (TG 1994-1)	21
第12図	溝3遺物出土状況図・断面図 (TG 1994-1)	22
第13図	落込みA上層瓦だまり出土状況図・断面図 (TG 1994-1)	23
第14図	落込みB遺物出土状況図 (TG 1994-1)	24
第15図	39号墓・土坑100遺物出土状況図・断面図 (TG 1994-1)	25
第16図	調査地区平面図・断面図 (TG 1999-1)	27
第17図	調査地区平面図・断面図・遺物出土状況図 (TG 2001-1)	29
第18図	出土遺物 (遺構① TG 1994-1)	31
第19図	出土遺物 (遺構② TG 1994-1)	32
第20図	出土遺物 (包含層① TG 1994-1)	33
第21図	出土遺物 (包含層② TG 1994-1)	34
第22図	出土遺物 (五輪塔地輪 TG 1994-1)	35
第23図	出土遺物 (TG 2001-1)	35
第24図	千光寺跡出土軒瓦の分類と変遷	36
第25図	出土瓦 (軒丸瓦 TG 1994-1)	38
第26図	出土瓦 (刻印 TG 1994-1)	38
第27図	出土瓦 (軒平瓦 TG 1994-1)	39
第28図	出土瓦 (鳥伏間瓦・丸瓦・平瓦 TG 1994-1)	40
第29図	出土瓦 (平瓦・雁振瓦 TG 1994-1)	41
第30図	出土瓦 (道具瓦 TG 1994-1)	42
第31図	出土瓦 (TG 1999-1・2001-1)	42
第32図	千光寺跡調査地区合成図	45
第33図	土塀移築作業の様子	50
第34図	平成13年12月1日 千光寺跡移築広場オープンイベント	50
第35図	千光寺跡移築広場 (平成13年12月)	51

写 真 図 版 目 次

- 巻頭写真図版 1 1. 寺口遺跡・千光寺跡 遠景（南から・平成6年）
2. 千光寺跡 全景（南から・TG 1994-1）
- 巻頭写真図版 2 1. キリシタン墓碑（TG 2001-1）
2. 陶磁器（TG 1994-1）
3. 青銅製品（TG 1994-1）
4. 白磁皿（TG 1994-1）
5. 永正13年銘五輪塔地輪（TG 1994-1）
- 写真図版 1 1. 旧月泉寺墓地（平成4年10月2日撮影）
2. 寺口遺跡・千光寺跡 調査前全景（西から・平成6年）
- 写真図版 2 1. TG 1994-1 調査地区全景（左が北）
2. TG 1994-1 寺域・墓域全景（南西から）
- 写真図版 3 1. TG 1994-1 墓域全景（西から）
2. TG 1994-1 墓域全景（東から）
- 写真図版 4 1. TG 1994-1 墓域近景（南西から）
2. TG 1994-1 1・2・3号墓全景（西から）
- 写真図版 5 1. TG 1994-1 3号墓1・2号土坑検出状況（東から）
2. TG 1994-1 3号墓1・2号土坑調査状況（南東から）
- 写真図版 6 1. TG 1994-1 6号墓 検出状況（南から）
2. TG 1994-1 6号墓 常滑大甕出土状況（東から）
- 写真図版 7 1. TG 1994-1 8号墓 人骨出土状況（北から）
2. TG 1994-1 12～27・37号墓 五輪塔群（東から）
- 写真図版 8 1. TG 1994-1 青磁袴腰香炉出土状況（北から）
2. TG 1994-1 寺域全景（西から）
- 写真図版 9 1. TG 1994-1 土塀全景（南西から）
2. TG 1994-1 土塀排水施設（北から）
- 写真図版 10 1. TG 1994-1 土塀版築状況（西から）
2. TG 1999-1 調査地区全景（左が北）
- 写真図版 11 1. TG 2001-1 調査地区全景（北から）
2. TG 2001-1 土塀・墓碑検出状況（東から）
3. TG 2001-1 キリシタン墓碑出土状況（東から）
- 写真図版 12 1. TG 1994-1 出土遺物（遺構①）
2. TG 1994-1 出土遺物（遺構②）
- 写真図版 13 1. TG 1994-1 出土遺物（遺構③）
2. TG 1994-1 出土遺物（石製品）

- 写真図版 14 1. T G 1994-1 出土遺物 (包含層①)
 2. T G 1994-1 出土遺物 (包含層②)
- 写真図版 15 1. T G 1994-1 出土遺物 (包含層③)
 2. T G 1994-1 出土遺物 (包含層④)
- 写真図版 16 1. T G 1994-1 出土遺物 (包含層⑤)
 2. T G 1994-1 出土瓦 (刻印)
- 写真図版 17 1. T G 1994-1 出土瓦 (軒丸瓦)
 2. T G 1994-1 出土瓦 (軒平瓦)
- 写真図版 18 1. T G 1994-1 出土瓦 (鳥伏間瓦)
 2. T G 1994-1 出土瓦 (丸瓦)
- 写真図版 19 1. T G 1994-1 出土瓦 (「千光寺」刻印瓦)
 2. T G 1994-1 出土瓦 (平瓦)
- 写真図版 20 1. T G 1994-1 出土瓦 (雁振瓦・道具瓦)
 2. T G 1999-1・2001-1 出土瓦

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。東は奈良県生駒市・西は大阪府寝屋川市・南は大東市・北は交野市と寝屋川市に接している。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地域に分けている。平野地域には、東西方向に一級河川清滝川に沿って清滝街道、南北方向に河内街道と東高野街道が通じている。清滝街道を東進し清滝峠を越えると田原盆地に入り、街道はそのまま田原盆地を東西に横切る。一級河川天野川に沿って南北方向には磐船街道が、南側には、ほぼ東西方向に古堤街道が通じている。

今回報告する寺口遺跡・千光寺跡は、四條畷市の東部、生駒山系の北東部の山裾に位置する南北約2km・東西約0.8kmの範囲の田原地域に所在し、その東端は、北流する天野川を府県境として奈良県生駒市と接している。その地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。遺跡は、生駒山にその源を発し田原盆地を南北に横切りながら北流し、交野市、枚方市を経て淀川へ流入している天野川左岸の丘陵上に立地する遺跡である。

(村上 始・實盛良彦)

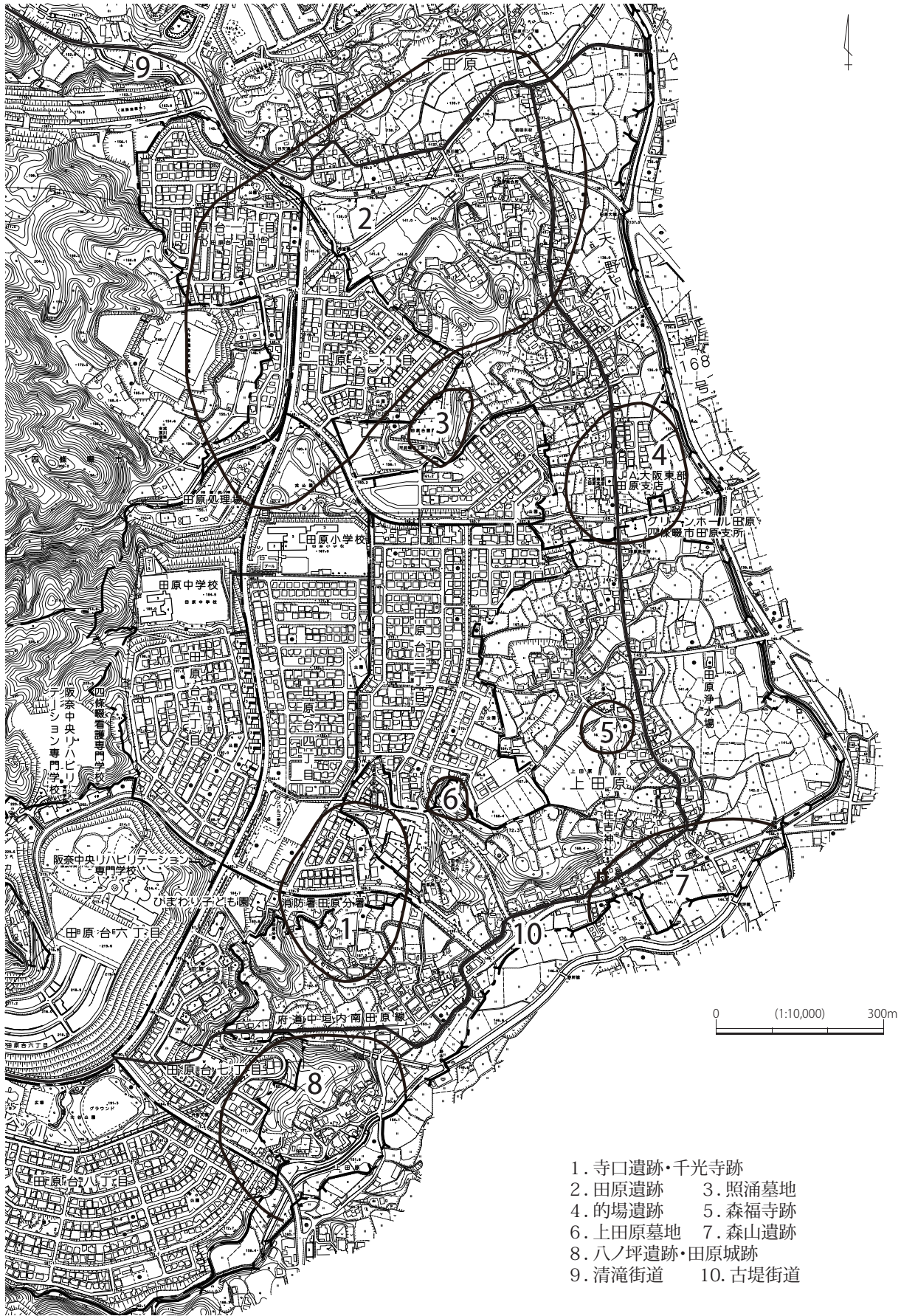
第2節 周辺の歴史的環境

田原地域に関する文献記録の古いものとしては、田原鑄銭司についてのものがある。田原鑄銭司は、奈良市東部の田原地域とする説もあるが(岩橋1969)、四條畷市および生駒市にまたがる田原地域に所在したとされる(栄原1972、1993、中村1972、仁藤2018)。『続日本紀』神護景雲元年(767)十二月乙酉条と、同神護景雲三年(769)三月戊寅条に「田原鑄銭長官」の任官記事がみえ、平城宮跡第133次調査では宮の南面西門にあたる位置の調査で二条大路北側溝にあたるSD1250から「田原錢五千文」の付札が出土した(奈良国立文化財研究所1982)。存続期間には諸説あるが、これらの資料に裏付けられるように奈良時代に錢貨の製造を担っていた。

こののち、田原についての記事は保延5年(1139)の『小松寺奉加帳』に「田原郷」とみえ、久安元年(1145)の近衛天皇綸旨に「田原西郷」・「同東郷」と記されるが、その内容には検討を要する。確実なものとしては、安貞2年(1228)の『修明門院処分状案』(四條畷市史編さん委員会編2016)に「河内国田原庄」が現れる。そして、生駒市の長福寺で近年発見された永仁6年(1298)の『長福寺料田目録』には、河内国として「交野郡田原西郷」「同郡田原東郷」があげられる(山下・吉川2017)。この史料から、四條畷市および生駒市にまたがる田原地域は当時いずれも河内国交野郡に属していたことが判明した(吉川2020)。

また、上田原の住吉神社に伝わった湯釜の銘文には「河州交野郡田原西荘」とあり、文禄五年(1596)八月と記載され(平尾1931)、このころまで田原は交野郡であったとみられる。これらの記述にみられる中世以前の古代についても、天野川流域を河内国交野郡、生駒川流域を大和国平群郡、富雄川流域を同国添下郡として区分されたとみられることから、田原は古代以来中世にかけて交野郡であった可能性が高いという(吉川2020)。

近世になり慶長10年(1605)ごろの大和国慶長郷帳に添下郡東田原村が載り、正保2年(1645)の『河内国郷帳』で讚良郡に田原村があることから、17世紀初頭に田原は交野郡から、生駒市側が大和国添下郡に、四條畷市側が河内国讚良郡に分かれ属したようである(吉川2020)。四條畷市側は片田・滝寺・野田・照涌・佐水・森山・中番・八ノ坪の地区が一村を形成して「西田原村」と呼ばれた。文禄3年(1594)に速見甲斐守により検地が行われ、江戸時代には幕府の直轄領となった。慶安2年(1649)に大坂町奉行曾我丹波守の再検地を受けて、西田原村は六百石の村高となった。慶安4年(1651)には上・下田原村に分村し、それぞれ村方三役をおく独立村落となった。明治22年の町村制



第1図 周辺遺跡分布図

施行により、上・下田原村は合併し田原村と称するようになり、昭和 36 年に田原村は四條畷町と合併し四條畷町となり、昭和 45 年 7 月に四條畷市となった。

田原地域の遺跡としては、昭和 50 年頃から始まった住宅公団の開発に伴う発掘調査により、旧石器時代、縄文時代早期、後期、弥生時代前期、中世の集落跡であることが判明した田原遺跡がある（野島・櫻井 1980、野島 1981）。加えて、平安時代の社寺跡である森福寺跡、鎌倉時代の集落跡である的場遺跡、縄文時代、古墳時代、中世、近世の集落跡である森山遺跡（奥編 1993、村上・實盛 2020）、中世の寺跡、墓地である寺口遺跡・千光寺跡（村上 1999、2012、本書）、南北朝時代から戦国時代の集落跡、城館跡である八ノ坪遺跡・田原城跡（野島 1981、1986、村上 2001）があげられる。

また、田原地域の上田原と下田原のそれぞれの地域には、両墓制の埋め墓（埋葬地）と詣り墓の墓地が現存しており、下田原地区の片田墓地は滝寺・片田地区のオバカ（埋め墓）であり、小谷にタチバカ（詣り墓）がある。周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている中世から近世の両墓制墓地としては、上田原墓地、照涌墓地があげられる。その他の文化財としては、住吉神社の石槽（大阪府指定有形文化財）や市内に 7 基現存している石造十三仏のうちの 2 基などがあげられる。

田原城跡は、戦国大名である三好長慶が永禄 3 年（1560）に居城とした飯盛城から東へ延びる標高 178.6 m の尾根上にある。遺跡としての飯盛城跡は標高約 314 m の飯盛山の山頂に構えられた山城で、近年四條畷・大東の両市で調査を進め、東西 400 m、南北 700 m の城域に配置される曲輪群、永禄期にさかのぼるとみられる石垣群の確認や、建物跡、城道の検出、普請の状況など多くの成果をあげている（李編 2020）。田原城跡の本郭は 南北約 26 m・東西約 7 m の削平地で、周囲との比高差は約 30 m 高くなっている。この北には清滝街道が、東には古堤街道がはしり、河内と大和を結ぶ要所の地に築かれており、飯盛城の弱点である大和方面からの攻撃を防ぐための支城としての役割を奈良県生駒市に所在する北田原城とともに担っていたと考えられる（實盛 2013）。この田原城のある八ノ坪には現在でも城郭に関連する地名「城の下」「門口」「土居の内」「矢の石」などが残っている。北西の尾根は飯盛城に続き城内に直進できるようになっており、その両脇に深さ 7 m の V 字形の空堀を発掘調査で確認した。「殿様屋敷」伝承地の調査では掘立柱建物跡や石組井戸を確認し、城に付随する居館の存在を確認した。これまでの調査から城の構築年代は 14 世紀中葉とみられ、その後 16 世紀後半まで城として機能したとみられる（野島 1986）。

田原地域を走る街道のうち、清滝街道については市内で発掘調査を行った箇所がある。平成 5 年度から 26 年度にかけて、一般国道 163 号清滝トンネルの西で淀川水系清滝川溪流保全工事に伴い調査を行い、発掘調査を行った全調査地区で清滝街道の遺構を確認した（村上・實盛 2017）。平成 10 年度の調査では江戸後期以降の街道遺構を検出し、小石により舗装されていた部分があるのを確認した。これは坂道に対応した整備であろう。一方、隣接した平成 5 年度調査ではルートが少し平行にずれる別の街道遺構を検出しており、街道の構築土内より出土した土器から中世の街道遺構と考えられる。この街道の脇にあたる位置の谷状遺構などからは石仏や和鏡が出土した。平成 22 年には清滝峠の東側（清滝トンネル南側）の地点で清滝街道の調査を行った（村上・實盛 2011）。調査地区は、大阪側から清滝峠を越え、下り始めた田原盆地の入り口地点にあたる。この調査地区付近に関しては、大阪府教育委員会が発行した『奈良街道』（大阪府教育委員会編 1989）に取り上げられているのみで、ここでは国道 163 号が旧清滝街道であるとされていた。この調査で検出した街道は、南側の山裾を削平し道路面を成形しており、南側にのみ側溝が掘られ、それが後世に広げられていて道路部分の幅がやや狭められていたが、側溝と道路部分を合わせると幅が約 2.5～3 m あり、明治時代の文献に記されている清滝街道の幅「八尺」とほぼ一致しており、この遺構が本来の清滝街道であると判断できた。清滝街道は遅くとも中世から街道として機能しており、明治時代初頭までは利用され、その後、国道 163 号が開通したためこの街道は利用されなくなり、現在に至ったのではないかと考えられる。

（村上・實盛）

第2章 調査の経過

第1節 既往の調査

寺口遺跡・千光寺跡は、四條畷市田原台四丁目（旧・大字上田原小字寺口）に所在する。住宅・都市整備公団が造成工事を行なうにあたって平成6年（1994）に新たに発見した遺跡である。この田原地域においては、住宅・都市整備公団による開発事業に伴い周辺の改良工事や造成工事が実施されていた。当地には、明治11年に寝屋（寝屋川市）から移ってきた曹洞宗月泉寺が管理する墓地があり、その中央には田原城主田原対馬守の墓と伝えられてきた五輪塔が建っていた。月泉寺が寝屋から移ってくる以前、当地には千光寺という真言宗の寺が存在していたという口伝があり、「千光寺谷」と呼ばれていた。小字名としても「寺口」という名が残っていた。その月泉寺墓地周辺が開発されることになり、墓地にある田原対馬守の墓と伝えられる五輪塔が平成4年（1992）10月2日に約50m北側に移転された。それを契機に、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局長市ヶ谷隆信の依頼により平成6年（1994）3月28日から4日間の予定で遺跡の有無を確認するために7箇所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、約12m四方であった墓地が南側にも拡がることが判明した。この結果をもとに、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局長市ヶ谷隆信から四條畷市教育委員会を經由し文化庁長官へ平成6年6月7日付で文化財保護法第57条の5第1項（当時）の規定に基づく遺跡発見の届出を行った。

その後の既往の調査としては、既報告のものとして平成10年度のもものがあげられる（TG 1998-1）。調査は今回報告する一連の千光寺跡検出地の南側で行なったもので、861㎡を調査し、中世～近世の溝・土坑・Pit・石垣などの遺構群を検出した（村上1999）。

（村上・實盛）

第2節 調査の経過

平成6年度第1次の発掘調査（TG 1994-1）については、四條畷市田原台四丁目8付近において住宅・都市整備公団により宅地造成工事が計画され、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局長市ヶ谷隆信の依頼により平成6年（1994）3月28日から4日間の予定で遺跡の有無を確認するために7箇所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果をもとに、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局長市ヶ谷隆信から四條畷市教育委員会を經由し文化庁長官へ平成6年6月7日付で文化財保護法第57条の5第1項（当時）の規定に基づく遺跡発見の届出を行った。その返書として発掘調査が必要との通知があった。本市教育委員会は、住宅・都市整備公団と協議を行なった結果、工事によって遺跡が破壊される約4250㎡について、平成6（1994）年4月1日から同年8月10日まで、その記録保存のため発掘調査を実施した。調査は試掘調査の結果から、表土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計291箱であった。

調査の結果中世の寺院跡および付随する墓地を検出し、中世の国人領主層の研究をしていく上で、遺構と遺物の点から第一級のものと考えられた。そこで現地での保存方法などを検討したが、開発計画の変更が不可能となったため、住宅・都市整備公団の御理解・御協力で、特に重要と考えられる遺構については近隣に移築し、平成13（2001）年12月1日から千光寺跡移築広場として広く一般公開するに至った。

平成11年度第1次の発掘調査（TG 1999-1）については、四條畷市大字上田原677-2・686・695において医療法人和幸会阪奈サナトリウムにより院内道路建設工事が計画され、平成11年8月17日に医療法人和幸会阪奈サナトリウム理事長栗岡博良から四條畷市教育委員会を經由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。その返書として発掘調査が必要との通知があった。予定地の西側に隣接している場所においては、平成6年

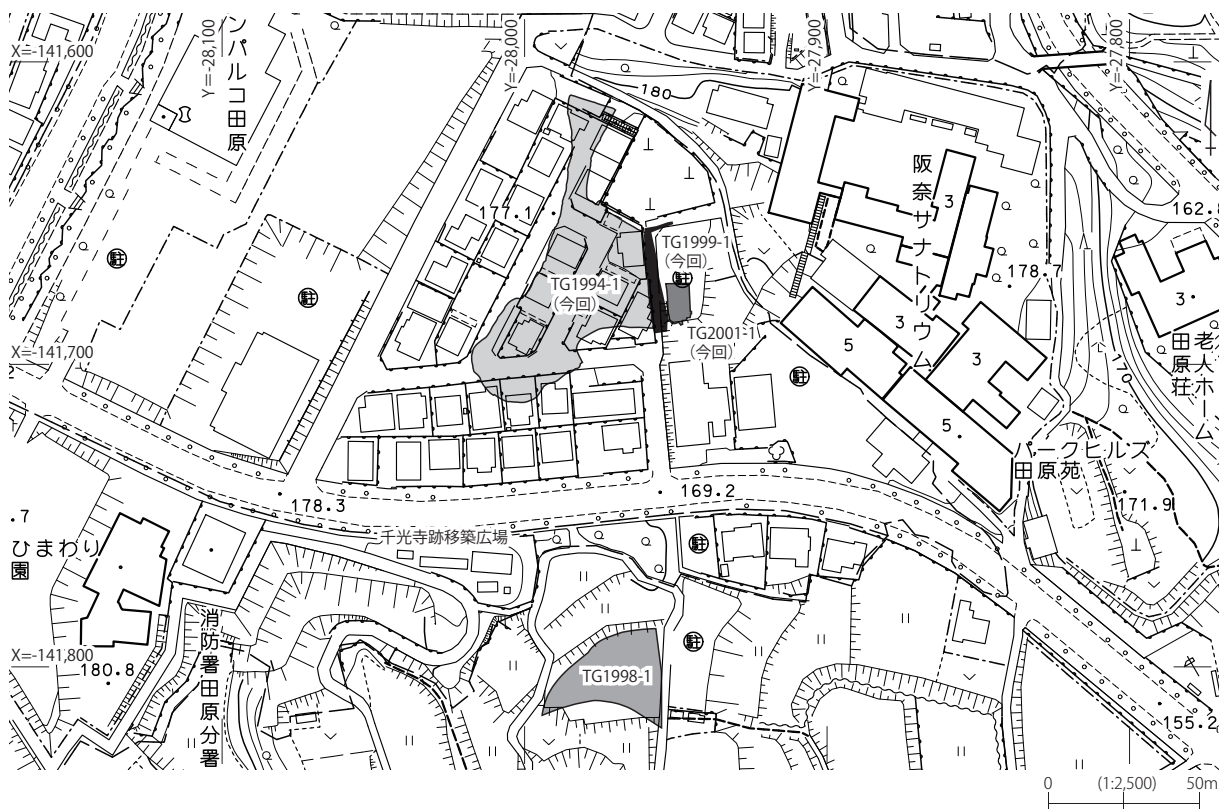
度に発掘調査を行ない、千光寺跡に伴う遺構面を確認している状況から、今回の建設予定地においても遺構の存在が十分に考えられたため、本市教育委員会は、事業者と協議を行なった結果、工事によって遺跡が破壊される約185㎡について、平成11(1999)年11月15日から18日まで、その記録保存のため発掘調査を実施した。調査は既往調査の結果から、表土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成12年3月10日付曝生第122号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年3月13日に第2906号で受理された。大阪府教育委員会には同年3月10日付曝生第132号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計3箱であった。

平成13年度第1次の発掘調査(TG2001-1)については、四條畷市田原台4丁目8-6において医療法人和幸会阪奈サナトリウムにより駐車場造成が計画され、平成14年1月24日に医療法人和幸会阪奈サナトリウム理事長栗岡博良から四條畷市教育委員会を經由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の2第1項(当時)の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。返書として発掘調査が必要と通知があった。予定地の西側に隣接している場所では、平成6年度と11年度に発掘調査を行ない、千光寺跡に伴う遺構面を確認している状況から、今回の建設予定地においても遺構の存在が十分に考えられたため、本市教育委員会は、事業者と協議を行った結果、遺跡が工事によって破壊される駐車場造成予定地を記録保存のため発掘調査を実施することとなった。同年2月8日付第7号で、文化財保護法第58条の2第1項(当時)の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約225㎡で、調査期間は平成14年2月12日から20日までであった。調査は既往調査の結果から、表土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力で掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成14年2月22日付曝社生第183号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年2月27日に第2939号で受理された。大阪府教育委員会には同年2月22日付曝社生第184号で埋蔵文化財保管証を提出した。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計3箱であった。

(村上・實盛)



第2図 調査地区位置図(座標は世界測地系)

第3章 調査の成果

第1節 1994-1次調査

1. 基本層序

調査地区の調査前現況は、旧月泉寺墓地および雑木林・竹藪であった。墓地中央には田原城主田原対馬守の墓と伝えられてきた五輪塔などが建っていたが、平成4年（1992）10月2日に約50m北側に移転された。表土は約0.1～0.4mで、その下層に約0.2～0.9mの遺物包含層が堆積し、その下面で中世～近世の寺跡および墓地を検出した。その下層は明黄褐色系の砂質土で、遺物を包含せず地山であった（第4図）。断面図30層は寺院建設前の表土、27～29層は土塀・参道構築に向けた盛土と考える。

2. 検出遺構

寺域および墓域と考える遺構群を確認した。千光寺跡は生駒山系から東へ派生する尾根の先端部分を削平した場所に位置しており、敷地のほぼ中央に西側から舌状に延びる緩斜面とその先に造られた池（落込みB）を挟んで、南側の墓域と北側の寺域に大きく分けられる。

【墓域】

平地の部分とその西側斜面上が墓域にあたる。平地からは、25基以上の五輪塔と、花崗岩の自然石を配置したものを2基（4・11号墓）、加工した花崗岩を正方形に2段に組んだ基壇1基（6号墓）、土坑墓5基（5・7・8・9・10号墓）、斜面上からは、花崗岩の自然石を長方形に並べたもの1基（3号墓）、花崗岩の自然石を円形に並べたもの2基（1・2号墓）を検出した。

1号墓（第3・5図）

墓域調査地区西側斜面上の西端で検出した。他の墓と比べると斜面上の高い位置に造られており、2号墓と隣接する。長さ約0.5m×0.4m、深さ約0.3mの隅丸方形土坑の周辺に10～30cmの花崗岩の自然石を並べている。主体部に伴う石はほとんどが崩落したが、第5図中の4点はほぼ原位置を保っていると思われる。遺物が出土しなかったことから遺構の時期は不明であるが、斜面上に位置していることから3号墓と同時期のものと考えられる。

2号墓（第3・5図）

墓域調査地区西側斜面上の西端で検出した。前述のとおり、他の墓と比べると斜面上の高い位置に造られており、1号墓と隣接する。長さ約1.5m×1.0m、深さ約0.5mの楕円形土坑で、周縁に10～35cmの花崗岩の自然石を並べている。遺物が出土しなかったことから遺構の時期は不明であるが、1号墓と同様に斜面上に位置していることから3号墓と同時期のものと考えられる。

3号墓（第3・6図）

墓域調査地区西側斜面上の西側で検出した。斜面を削って平坦部を造り、そこに15～30cm大の花崗岩の自然石を長さ約5.3m、幅約2.5m（復元）の長方形に並べたもので、その東側は崩落していた。この墓は長方形の区画の内側に残っている石の配置から、一辺約1.5mの正方形の区画をつないで造ったものと考えられる。その区画の内部には、中央部に2基（1・2号土坑）、北側に1基（3号土坑）の計3基の埋葬施設を検出した。

1号土坑：3号墓内の中央部で検出した。直径約0.7m、深さ約0.4mの円形の掘形の南側（2号土坑との切り合い部分）に、20cm前後の花崗岩の自然石が壁面に添って3個並べられており、内部には、砕いた火葬骨を入れた古瀬戸の水注（第18図-1）を底部に穿孔のある東播磨の魚住窯産の甕（第18図-7）に納め、東播磨系の鉢（第18図-4・5）で蓋をしたものが埋納されていた。また蓋の上には、30cm大の花崗岩をのせていた。出土遺物から土坑の時期は13世紀代と考える。

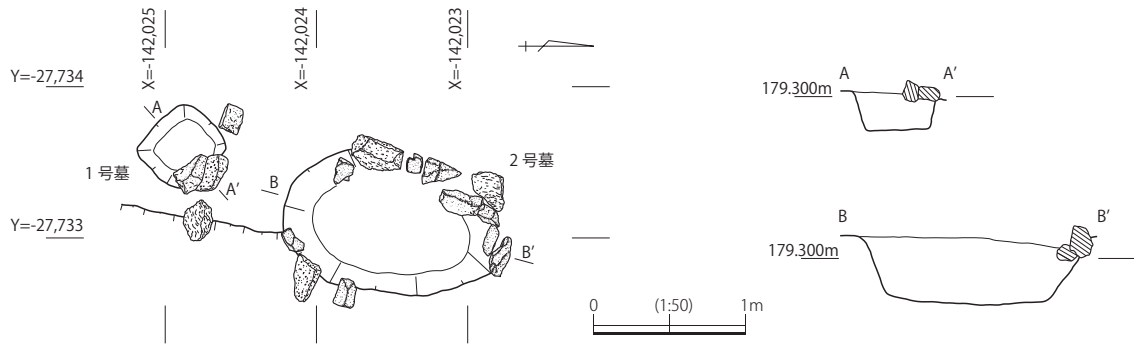
2号土坑：3号墓内の中央部やや南、1号土坑に接して検出した。掘形の規模は、直径約0.65m、深さ約0.25mの円形である。底に20cm前後の花崗岩の自然石を敷き、東播磨系の甕（第18図-6）を納めていた。この甕は1号土坑の甕のように須恵質に焼成されておらず、軟質のやや焼成不良と考えられるものであった。甕の横から古瀬戸の把手付水注（第18図-2）が出土した。出土遺物から土



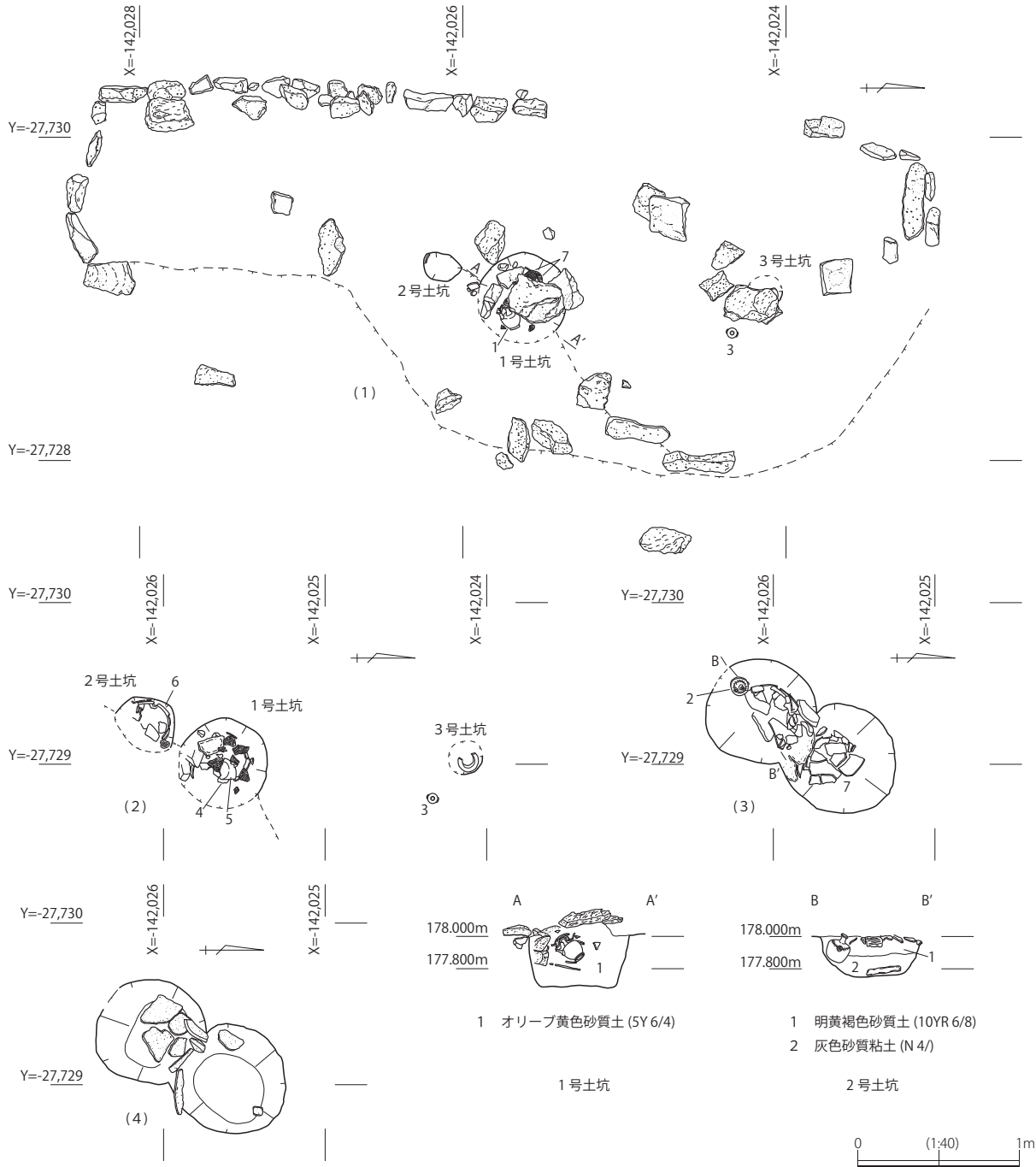
第3図 調査地区平面図 (TG1994-1) ()は世界測地系



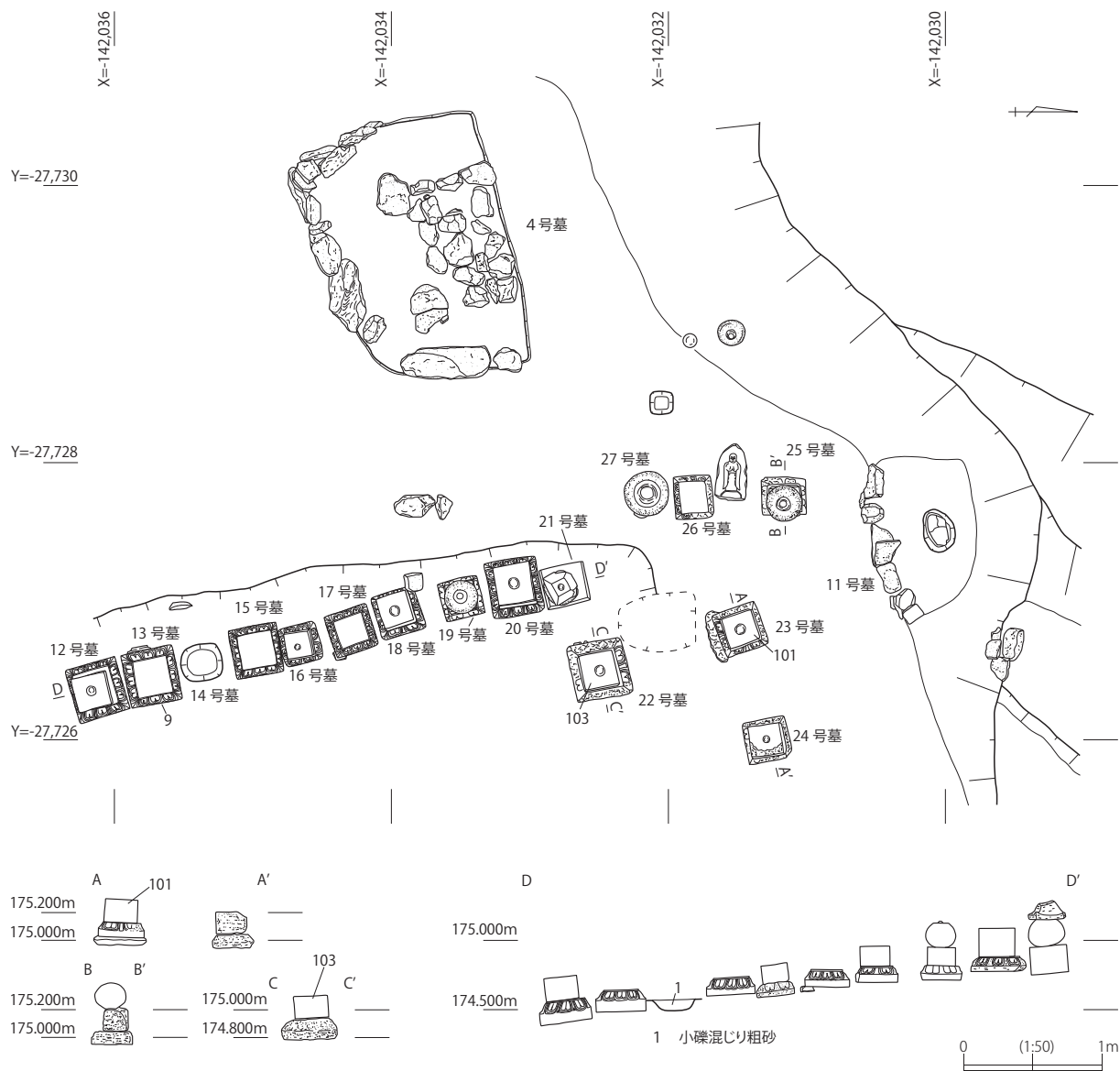
第4図 調査地区断面図(TG1994-1)



第5图 1号・2号墓平面图・断面图(TG1994-1)



第6图 3号墓平面图・遺物出土状況图・断面图(TG1994-1)



第7図 墓域平面図・立面図(4・11～27号墓 TG1994-1)

坑の時期は13世紀代と考える。1号土坑と違い水注内に火葬骨が入られていなかったことから、甕の中に直接納めていたと考える。

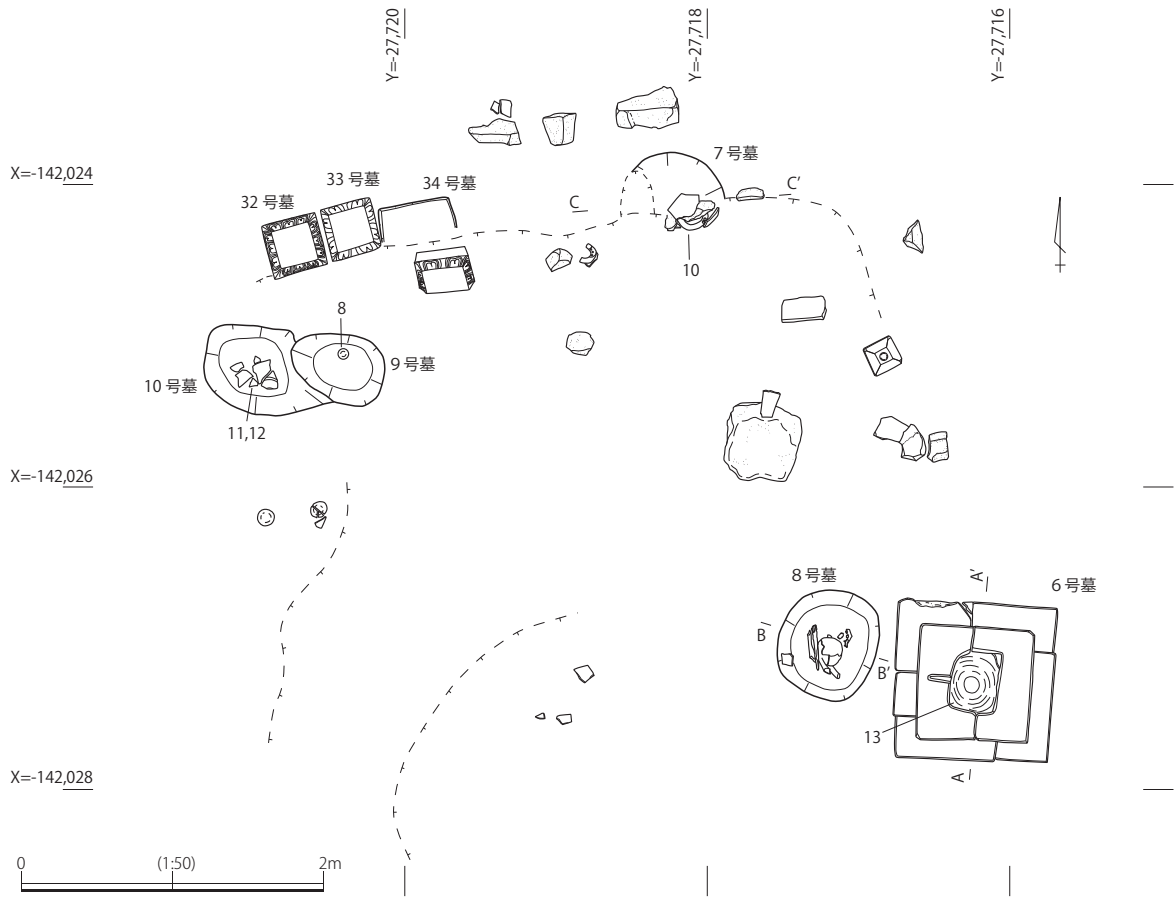
3号土坑：3号墓内の北側で検出した。直径約0.2mの円形の土坑に土師質の土器を納めている。この土器は保存状態が非常に悪く詳細は不明である。区画内の状況からは1・2号土坑とは別の時期に掘られた可能性がある。この土坑の横からは、輸入磁器青白磁脚付小壺(第18図-3)が出土した。この小壺から、土坑の時期は13～14世紀中葉と考える。

4号墓(第3・7図)

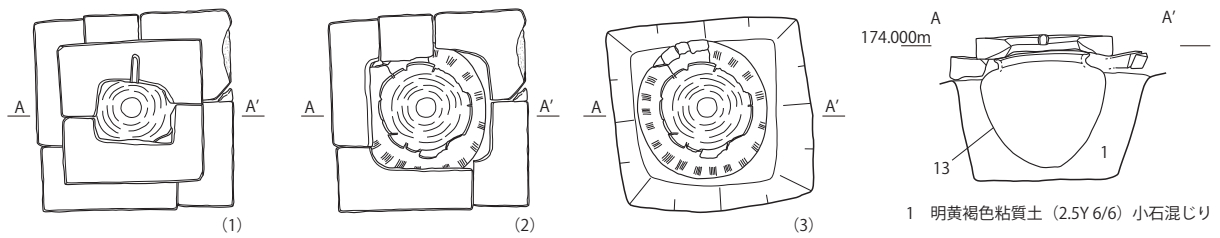
墓域調査地区平地部の西側斜面縁辺部で検出した。長辺約1.9m、短辺約1.4mの規模で基壇のようにコの字状に花崗岩の自然石を配置し、その内部の北寄り中央に、さらに15～65cmの花崗岩の自然石を敷き並べて配置している。中央の石敷きの下部を確認したが、埋納骨などは確認できず、五輪塔などを設置するための基壇状の施設の可能性がある。出土遺物は無く、遺構の時期は不明である。

5号墓(第3図)

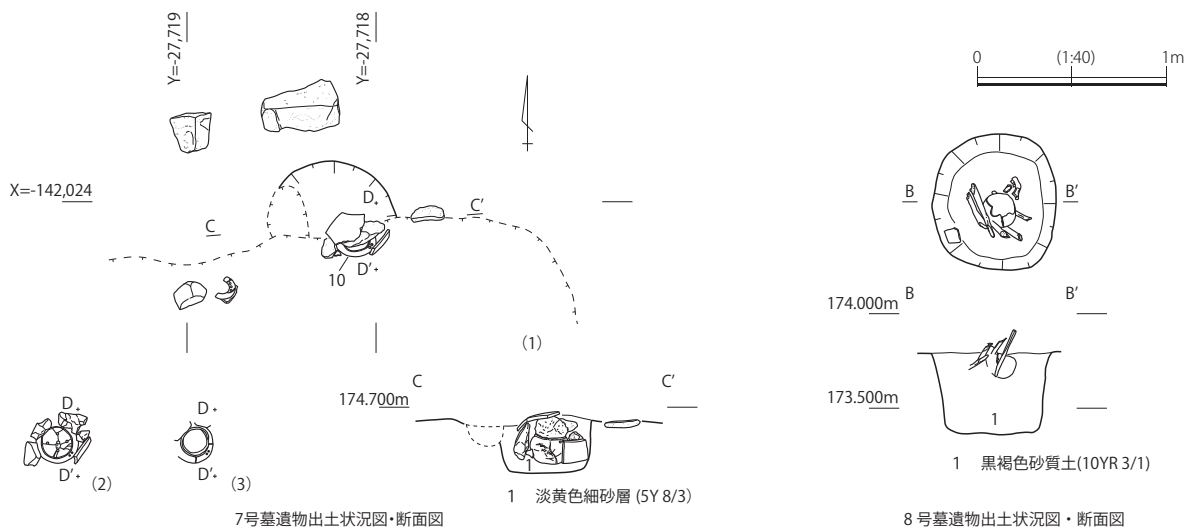
墓域調査地区平地部の南側から検出した。遺構の南と西の一部は攪乱により失われている。検出できた規模は、長さ約0.6×0.4m、深さ約0.3mで、円形もしくは楕円形の土坑であると考え。本遺



墓地平面図



6号墓遺物出土状況図・断面図



7号墓遺物出土状況図・断面図

8号墓遺物出土状況図・断面図

第8図 墓域平面図・遺物出土状況図・断面図(6~10・32~34号墓 TG1994-1)

構のみ、他の土坑墓とは異なり出土遺物から近代以降のものとみられる。

6号墓（第3・8図）

墓域調査地区平地部の東寄りで検出した7点の加工した花崗岩を正方形に2段に組んだ基壇である。下段は、L字状に加工した4個の花崗岩と長方形に加工した1個の花崗岩を用いて口の字状に配置している。その一辺は約1mである。上段は下段の中央部に、コの字状に加工した2点の花崗岩を用いて口の字状に積み上げている。その一辺は約0.75mである。この上下2段の積み方から、上段中央には約45×35cmの長方形の孔が開いた状態となっている。また、この基壇の下部に一辺約1.0m・深さ約0.53mの正方形の土坑を掘り、その内部に常滑焼の大甕（第18図-13）を埋納していた。大甕内から骨などの出土遺物はなかった。

この上段の西側に配置したコの字状花崗岩の中央部には、幅約5cm、長さ約15cm、深さ約0.5cmの浅い溝（納骨溝）が彫られており、下部に埋納した大甕に骨を落とし込める構造となっている。これは総供養塔と考えられるもので、本来は基壇の上に五輪塔が据えられていたと考える。出土遺物から12世紀末～13世紀前葉の遺構と考える。

7号墓（第3・8図）

墓域調査地区平地部の東寄りで検出した。直径約0.5m、深さ約0.3mの円形（復元）土坑内部の周囲に、こぶし大の自然石と瓦を使って納骨施設をつくり、その中に土師質土器鉢（第18図-10）が納められており、それには蓋がかぶせられていた。この蓋には十字に孔があげられており、身のほうの孔は、口縁部下に2個を1対としたものが2カ所、高台部には2個を1対としたものが2カ所と1個のものが2カ所あげられている。内面に煤の付着が見られることから火鉢のような暖房具を蔵骨器に転用したものと思われる。出土遺物から16世紀後半～17世紀の遺構と考える。

8号墓（第3・8図）

墓域調査地区平地部の東寄りで検出し、6号墓と隣接している。直径約0.7m、深さ約0.43mの円形の土坑墓である。内部からは頭蓋骨などの人骨と瓦小片が出土した。今回の調査で確認した唯一の土葬墓である。出土遺物から詳細は不明であるが、近世の遺構と考える。

9号墓（第3・8図）

墓域調査地区平地部の北寄りで検出した。長さ約0.5×0.7mの楕円形の土坑墓である。内部からは多くの炭化物に混じって火葬骨が出土した。副葬品として、肥前陶器鉄釉小碗（第18図-8）と寛永通宝6枚（第19図-36～38）が納められていた。いわゆる六文銭である。出土遺物から17世紀中～後半の遺構と考える。

10号墓（第3・8図）

墓域調査地区平地部の北寄りで検出した。遺構東側は9号墓によって切られている。一辺約0.6mの隅丸方形の土坑墓である。少量の骨片とともに信楽焼壺（第18図-11・12）が出土した。出土遺物から16世紀の遺構と考える。

11号墓（第3・7図）

墓域調査地区平地部の北側斜面縁部で検出した。北側の傾斜部を掘り窪め、その南側斜面端の周縁上に自然石と瓦で区画を設けている。区画内を長さ約1.2×0.7m、深さ約0.2mの土坑状に掘り窪め、その内部に長さ約0.3×0.2m、深さ約0.1mの楕円形土坑を掘り、その中に長さ約0.2～0.3の自然石を据えている。遺物が出土しなかったことから遺構の時期は不明である。五輪塔などを設置するための基壇状の施設の可能性がある。

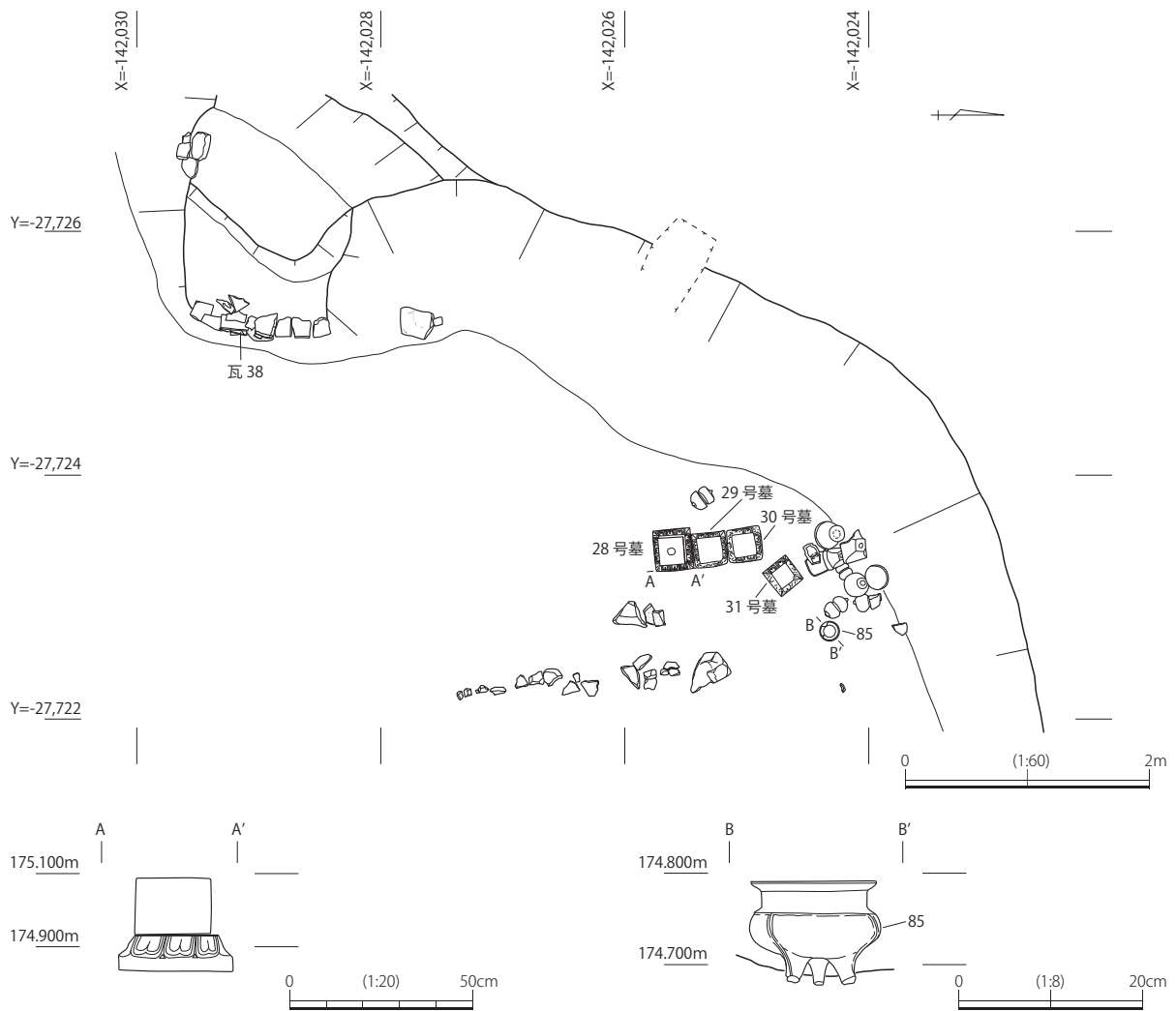
五輪塔群（第3・7～10図）

墓域調査地区の全域において五輪塔を確認したが、完全な状態で確認できたものは存在しなかった。また、倒壊した五輪塔を墓地の隅に寄せ集めた状態のものも確認した。

その中で、風化が著しいものも含めて五輪塔の一部が原位置を保っていると考えられるものに関しては、以下の通りであった。

①複弁蓮華文を刻んだ五輪塔の台座のみが残っていたもの。

15号墓・17号墓・26号墓・29号墓・30号墓・31号墓・32号墓・33号墓・34号墓・36号墓・37号墓



第9図 墓域平面図・立面図・青磁香炉出土状況図(28～31号墓 TG1994-1)

13号墓：台座の下部に一石五輪塔の一部が敷かれていた（第18図-9）。

34号墓：深さが約8cmで平面長方形の窪みが残っており、そのすぐ南で、滑り落ちた状態の五輪塔台座を検出した。窪みは台座の設置痕跡とみられる。

②複弁蓮華文を刻んだ五輪塔の台座と五輪塔の地輪が残っていたもの。

12号墓・16号墓・18号墓・20号墓・24号墓・28号墓

22号墓：地輪に「妙音」と刻まれていた（第23図-103）。

23号墓：地輪に「永正十三年子 妙祐禅定尼 四月廿二日」と刻まれていた（第23図-101）。

35号墓：参道沿いに設けられたL字状の石積みが埋まった後に、その西端の一部を利用して新たにコの字状に自然石を並べて方形の区画を設け、その内部に五輪塔を設置していた。

地輪に「寛永十年八月十八日 地 光雲當囀禅定門 施主 田原源右衛門忠臣」と刻まれていた（第23図-102）。

③複弁蓮華文を刻んだ五輪塔の台座と五輪塔の地輪・水輪が残っていたもの。

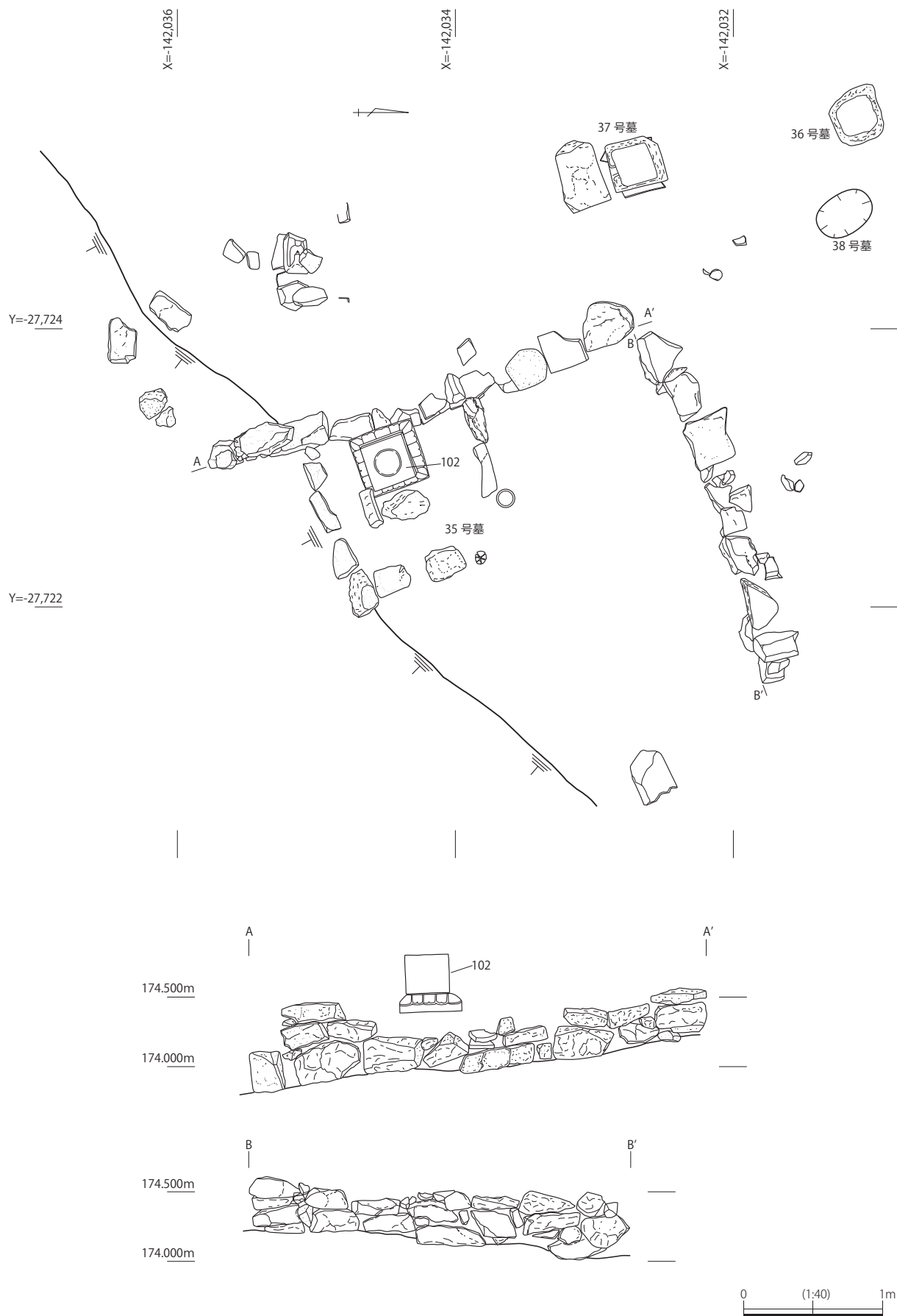
19号墓・25号墓

④複弁蓮華文を刻んだ五輪塔の台座と地輪・水輪・火輪が残っていたもの。

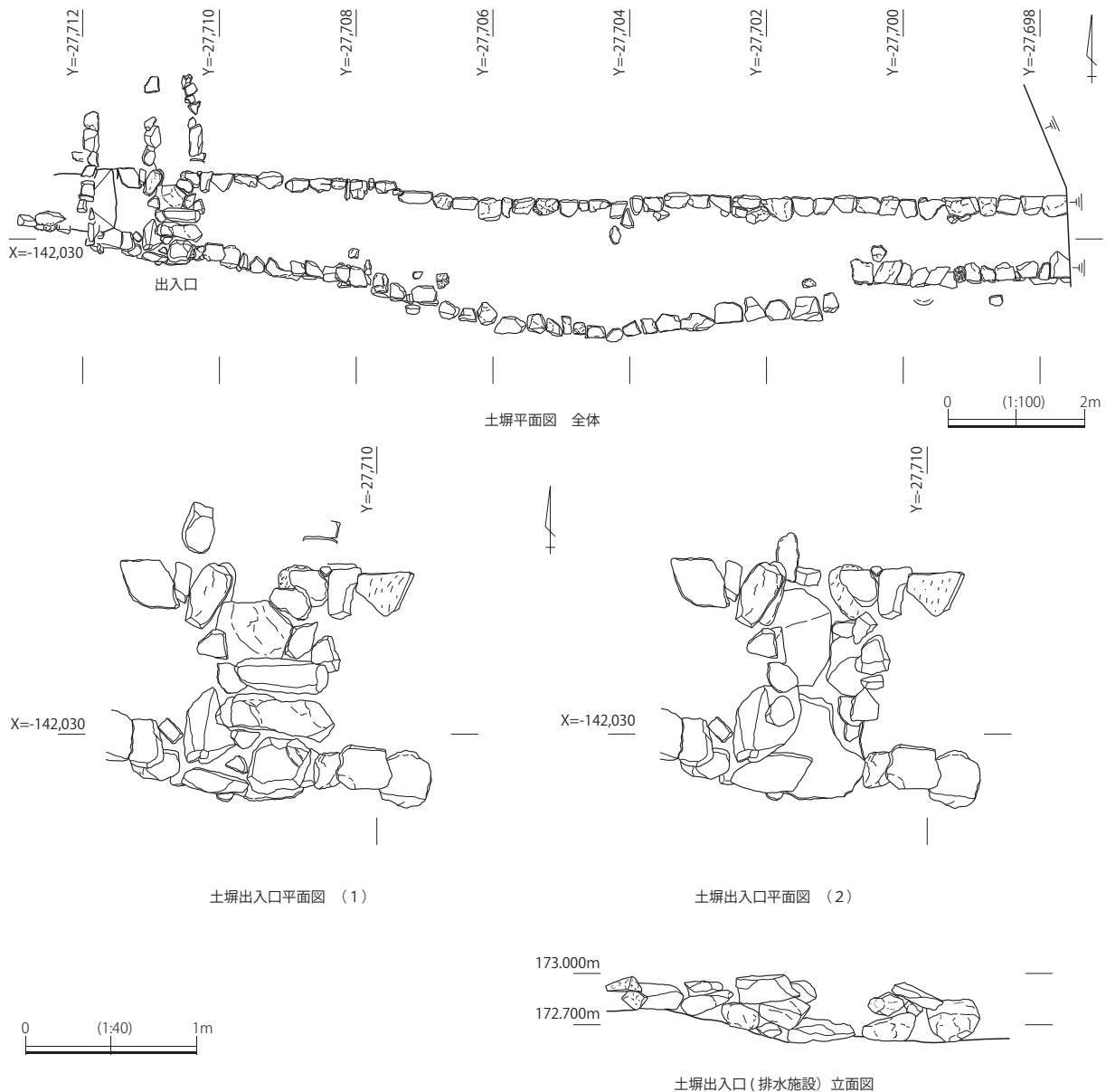
21号墓

⑤五輪塔の水輪のみのもの。

27号墓



第 10 图 墓域平面图·立面图 (35 ~ 38 号墓 TG1994-1)



第11図 土塀平面図・立面図(TG1994-1)

⑥石造物が残っていなかったもの。

14号墓：長さ約0.3×0.25m、深さ約0.1mの隅丸方形の土坑である。

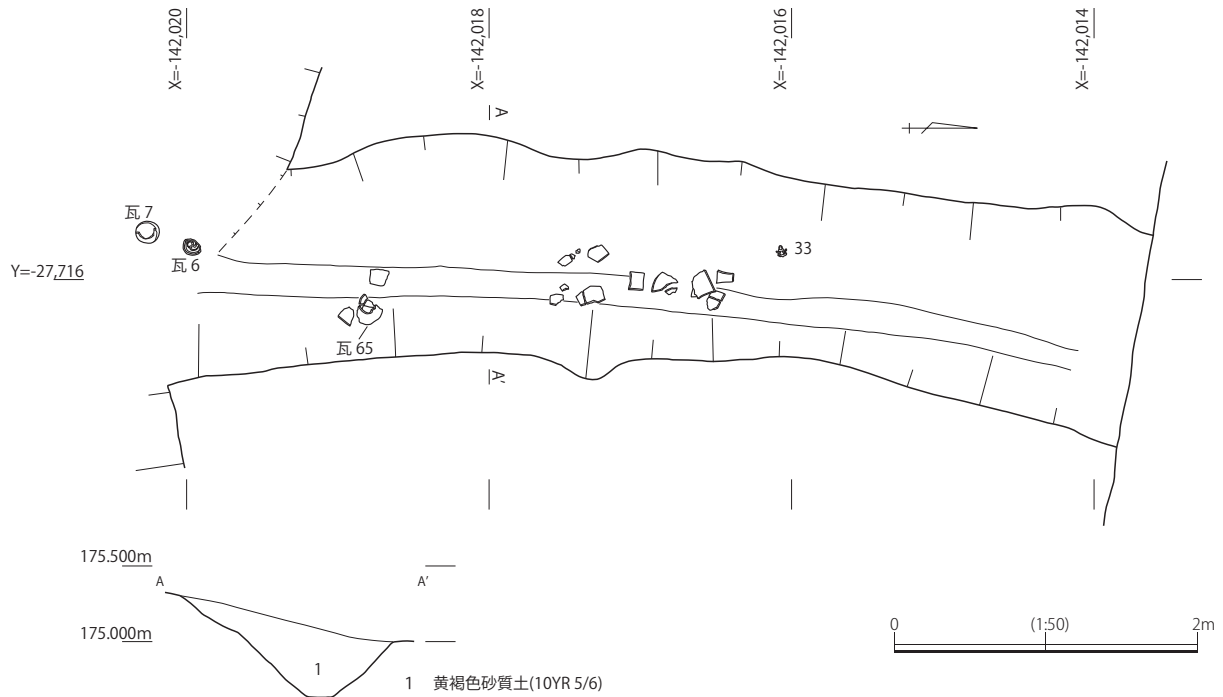
38号墓：長さ約0.4×0.3m、深さ0.2mの楕円形土坑。内部から骨片と思われるものが出土した。

以上のように、倒れていたものも含めて五輪塔は地輪25基を検出した。それらの中には、永正十三年(1516年)の銘を刻まれたもの(23号墓)と寛永十年(1633年)の銘を刻まれたもの(35号墓)があった。今回確認した五輪塔は35号墓を除いて、その形状から15～16世紀代のものとする。すべての五輪塔の下部を確認したが、明確に埋葬状況が判明できたものはなかった。

またこれらの五輪塔のほかにも、田原対馬守のものと同様の五輪塔を移築する際に、その土台に使われていた多くの五輪塔が現在の月泉寺墓地に運ばれている。それらの中には「天正」(16世紀後半)の年号があるものもみられた。これらの五輪塔をあわせると、同時期ではないものの100基以上の五輪塔が存在していたと推察する。

【寺域】

この場所は「寺口」、「千光寺谷」と呼ばれていた所で、「真言宗山城国八幡元杉本坊末 千光寺」と



第12図 溝3遺物出土状況図・断面図 (TG1994-1)

記された明治時代の廃寺帳が現存しているが(本書62頁参照)、その所在地など詳細については不明のまま現在に至っていた。しかし今回の調査で、「千光寺」と刻印された瓦が3点出土したことから(第28図-瓦72、第29図-瓦78~79)、この地が寺跡であることが判明した。

土塀(第3・11図)

調査地区の南東側で、東西に伸びる2列の花崗岩の石列を検出した。その規模は、長さ約15.5m、幅約1.2mであった。この石列については、調査地区東端の土層断面を観察したところ、2個の石の間に粘土と砂利を混ぜた土を版築工法で積み上げている土壁の痕跡を確認したことから、土塀の基礎であることが判明した。またこの土塀跡の南側斜面から大量の瓦が出土していることから、瓦葺の土塀であったと考えている。この土塀は、東側から約13mの地点で一旦途切れており、そこが寺への出入口の一つであった。この出入口の下部は、上部を石で蓋をした排水施設になっていた。

溝3(第3・12図)

調査地区のほぼ中央に西側から舌状に延びる緩斜面上で検出した。長さ約6m、幅約1.4m、深さ約0.5mの南北方向の溝である。溝内からは、瓦とともに青銅製懸仏(第19図-33)、砥石(第19図-32)が出土した。この溝は、寺域と墓域との境界を示したものと考えられる。

溝4(第3図)

寺域調査地区北端の西側上段で検出した。南北へ延びる不整形な溝であり、南端は斜面に沿うように途切れ、北端は東に曲り調査地区外へと延びている。検出できた規模は長さ約4.2m、幅約1.1m、深さ約0.2mである。青磁碗(第19図-22)や青磁盤(第19図-23)、瀬戸灰釉皿(第19図-24)、硯(第19図-30)、瓦質土管(第19図-27)が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

溝101(第3図)

寺域調査地区ほぼ中央で検出。長さ約3.4m、幅約0.2m、深さ約0.1mで、東西方向の直線的な溝である。瓦質土器播鉢(第19図-25)のほか、軒丸瓦と軒平瓦が出土した。中世の遺構と考える。

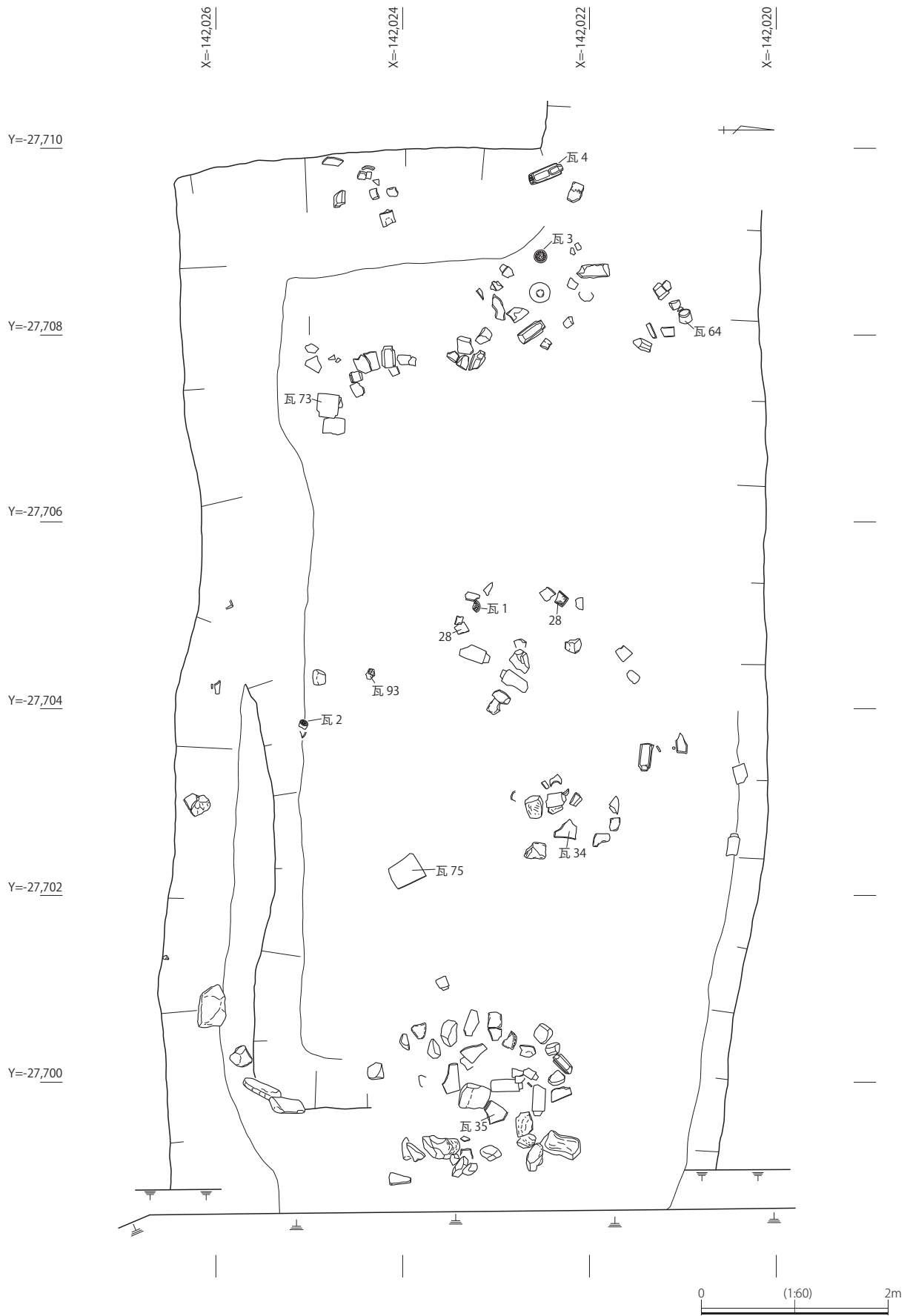


第13図 落込みA上層瓦だまり出土状況図・断面図(TG1994-1)

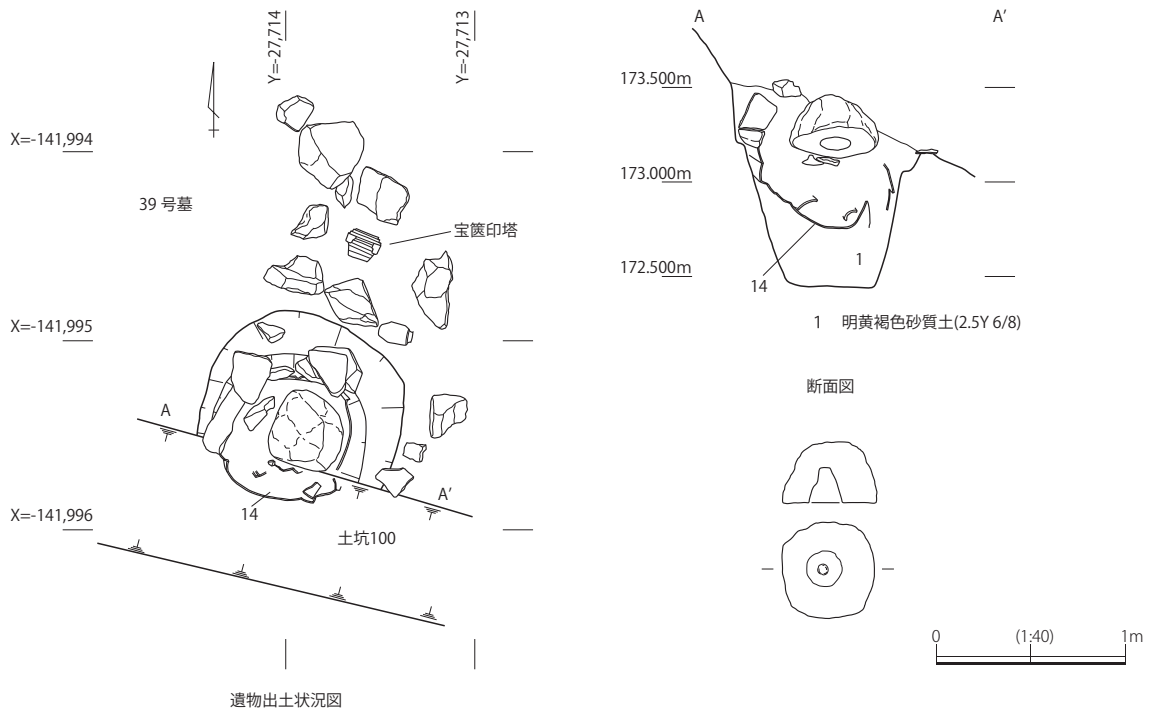
落込みA (第3・13図)

調査地区中央部で検出した。西から東へと向いた直線的な溝で、規模は長さ約3.5m、幅約1.1m、深さ(最深)約1mである。上層で多量の瓦が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

東側には池と考えられる落込みBを検出しており、その池に流れ込む溝として機能したと思われる。



第 14 図 落込み B 遺物出土状況図 (TG1994-1)



第15図 39号墓・土坑100遺物出土状況図・断面図(TG1994-1)

落込みB (第3・14図)

土堀の出入口を入り、寺側へ向かう東側で検出した。規模は、長さ約11.3m、幅約6.4m、深さ約1.3mであった。落込みBからは大量の瓦と須恵器(第19図-17)、青磁盤(第19図-18)、瓦質土器練鉢(第19図-26)、瓦質四足獣埴(第19図-28)、石製茶臼(第19図-34・35)が出土した。この遺構は、寺に付随している池であると思われる。先述のとおり西側で落込みAを検出しており、池へ流れ込む溝として機能していたと思われる。出土遺物から中世の遺構と考える。

39号墓(第3・15図)

寺域調査地区北端で検出。掘り込みはなく、0.2~0.3mの自然石を方形に並べる。中央部で宝篋印塔の笠部が、南東では丸瓦と下部から銅銭(錆により銭種不明)が出土した。中世の遺構と考える。

土坑100(第3・15図)

寺域調査地区北端で検出した。長さ約0.5×0.5m、深さ約1.1mの隅丸方形土坑である。軒丸瓦、瓦質土器大甕(第19図-14)、土坑掘形から青磁香炉(第19図-15)、甕内部から肥前磁器碗(第19図-16)と軒丸瓦が出土した。出土断面図をみると、瓦質土器大甕の口縁部が内側に落ち込んでいる。これは、大甕を土坑に設置した際に内部が空洞であったためとみられる。この土坑の西側斜面では水脈からしみ出した湧水がみられることから、水溜施設のための大甕であった可能性と、蔵骨器であった可能性とが有ると考える。出土遺物から中世から近世初期の遺構と考える。

土坑101(第3図)

寺域調査地区北端で検出した。南北約1.6m、東西約1.8m、深さ約0.3mの楕円形土坑である。肥前陶器皿(第19図-19・20)、土師質土器甕(第19図-21)、瓦質土器播鉢(第19図-25)が出土した。出土遺物から16世紀後半~17世紀前半の遺構と考える。

このほか寺域からは、80数基の土坑や柱穴・溝などを検出した。これらの遺構群は寺跡に伴うものとみられるが、明確な建物跡を検出するには至らなかった。寺院の帰属時期から掘立柱建物ではなく礎石建の建物であるが、古代寺院のような大型の礎石を用いなかった可能性が考えられることから、礎石の移動等により検出困難であった可能性を考える。(村上・實盛・田中香里)

第2節 1999-1次調査

1. 基本層序

調査地区の調査前現況は荒無地であった。表土はおよそ0.2mであった。表土の下層に0.2mほど中～近世の遺物包含層が堆積し、その下面で中世～近世のものと思われる寺跡の土塀基礎を検出した。その下層は明黄褐色系の砂質土で、遺物を包含せず地山であった（第16図）。

2. 検出遺構（第16図）

この調査においては、平成6年度1次調査で確認した土塀の続きを調査し、寺域の広さを確認するのが目的のひとつであった。予測どおり土塀の基礎の石列を確認し、千光寺の寺域がさらに広がっていることが判明した。

土塀（第16図）

調査地区の南側で、東西に伸びる2列の花崗岩の石列を検出した。その規模は、長さ約6.2m・幅約1.2mであった。石列の標高は東端部分の北側上端がT.P. + 172.840m、南側上端はT.P. + 172.808mで、中央部分の北側上端はT.P. + 172.788m、南側上端がT.P. + 172.752m、西端部分の北側上端がT.P. + 172.822m、南側上端はT.P. + 172.528mであった。この石列は、平成6年度1次調査で検出した土塀に続く遺構とみられる。

また、遺構北側で石組遺構を検出した。これは先述の平成6年度1次調査で検出した寺の出入口下部にある排水施設と同じような機能を有する遺構であると考えられる。

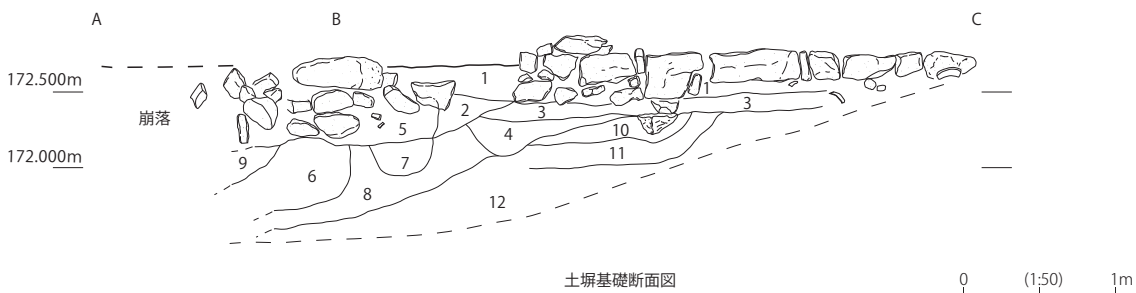
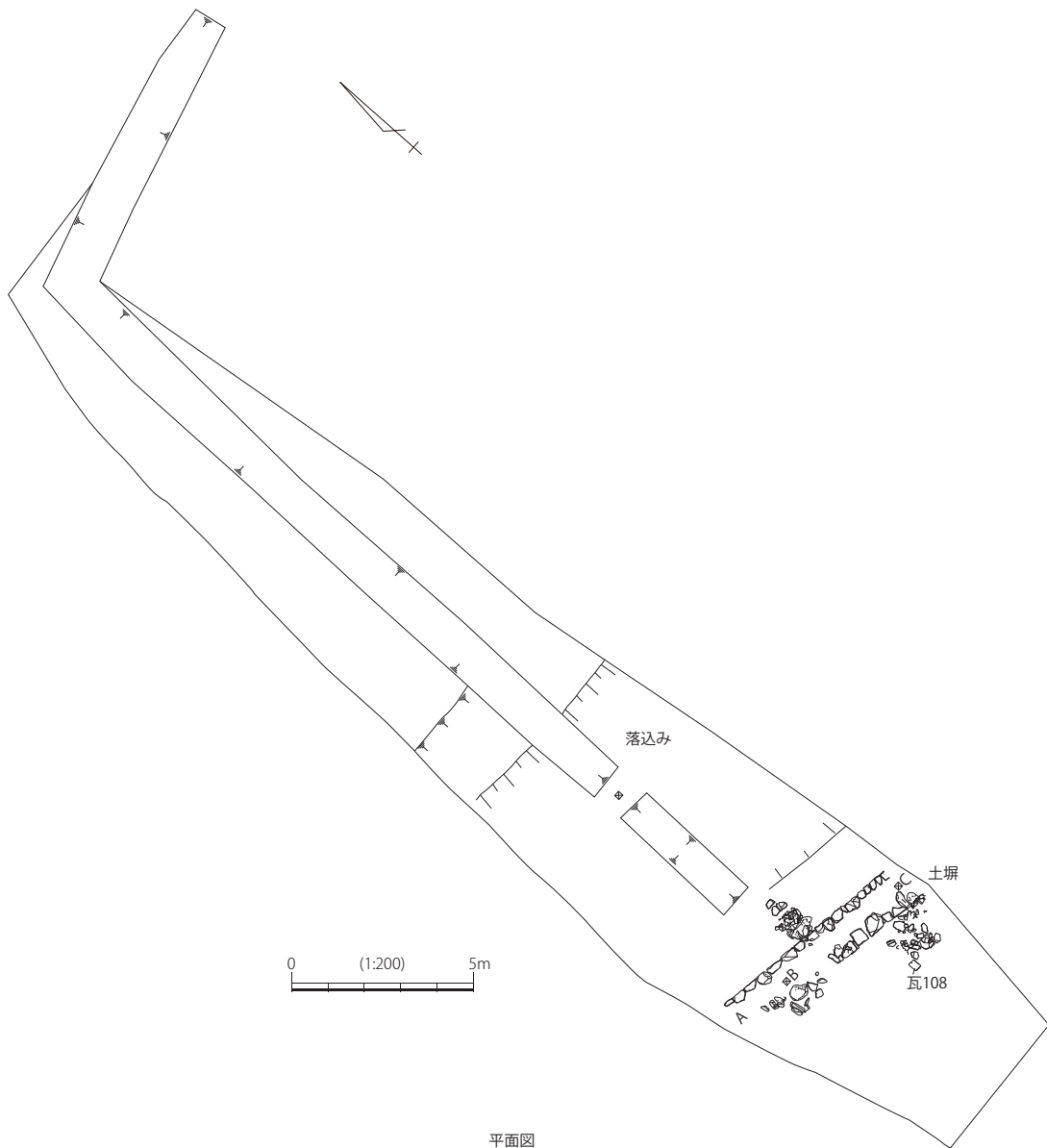
落込み（第16図）

調査地区の南側中央寄りで、南北に落込みの肩を検出した。東西の端は調査地区外であり、検出できた規模は東西で6.6mであった。

ただし、南の肩は別の溝のものとみられ、本来の落ち込みの肩はこれより北にあった可能性が高いが、落込み内のトレンチでは明確に検出ができなかった。

本遺構は、平成6年度1次調査で検出した落込みB（池）と同一遺構と考えられる。

（實盛・田中）



- 1 黄色砂質土(2.5Y 8/6)
- 2 明黄褐色砂質土(2.5Y 7/6)
- 3 にぶい黄橙色砂質土(10YR 7/4) 炭化物混入 粘性あり
- 4 2層に灰白色粘質土(5Y 8/2)ブロック混入 粘性あり
- 5 橙色砂質土(7.5YR 6/8) 粘性あり
- 6 8層に灰白色粘質土(5Y 8/2)ブロック・瓦・炭化物混入 粘性あり
- 7 5層に灰白色粘質土(5Y 8/2)ブロック混入 粘性あり
- 8 明黄褐色砂質土(2.5Y 6/6) 粘性あり
- 9 淡黄色砂質土(5Y 8/3) 粘性あり
- 10 明黄褐色砂質土(10YR 7/6) 灰白色粘質土(5Y 8/2)ブロック混入 粘性あり
- 11 黄橙色砂質土(7.5YR 7/8) 灰白色粘質土(5Y 8/2)ブロック混入 粘性あり
- 12 黄橙色砂質土(10YR 8/6) 粘性あり

第16図 調査地区平面図・断面図(TG1999-1)

第3節 2001-1 次調査

1. 基本層序

調査地区の調査前現況は竹藪・雑木林であった。表土はおよそ0.2 mであった。表土の下層に0.1 mほど中～近世の遺物包含層が堆積し、その下面で中世～近世のものと思われる寺跡を検出した。その下層は明黄褐色系の砂質土で、遺物を包含せず地山であった（第17図）。

断面観察から、C-D断面第14・15層の上面が旧来の地山面で、千光寺建設に向けて土地を平坦にするため11～13層を盛土して造成し、その後さらに6・7・10層で整地したものとする。また、A-B断面4層は寺院存続中の整地土で、上面が生活面と考える。この場合、土塀石列は土に埋まり視認できない状態で土塀が機能していた可能性があるが、後述の墓碑出土土坑の埋納状況から、そのように認識する。

2. 検出遺構

この調査においては、平成6年度1次調査および平成11年度1次調査で確認した土塀の続きを調査し、寺域の広さを確認するのが目的のひとつであった。予測どおり土塀の基礎の石列を確認し、千光寺の寺域が飯盛山から東へ舌状に伸びた丘陵の先端部まで広がっていることが判明した。

土塀（第17図）

調査地区の南西端で、東西に伸びる2列の花崗岩の石列を検出した。その規模は、長さ約8.0 m、幅約1.3 mであった。石列はその大半が攪乱により失われていたが、残存した石列を図面上で復元することにより、石列の延伸方向を確認することができた。石列の標高は東端部分の北側上端がT.P. + 172.785 m、南側上端はT.P. + 172.970 mで、中央部分の北側上端はT.P. + 172.839 m、南側上端がT.P. + 172.815 m、西端部分の北側上端がT.P. + 172.755 m、南側上端はT.P. + 172.959 mであった。この石列は、平成6年度1次調査および平成11年度1次調査で検出した土塀に続く遺構と考える。

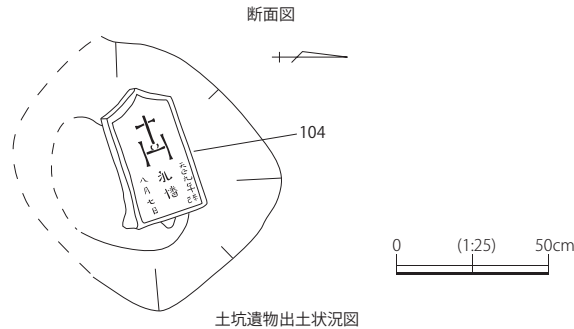
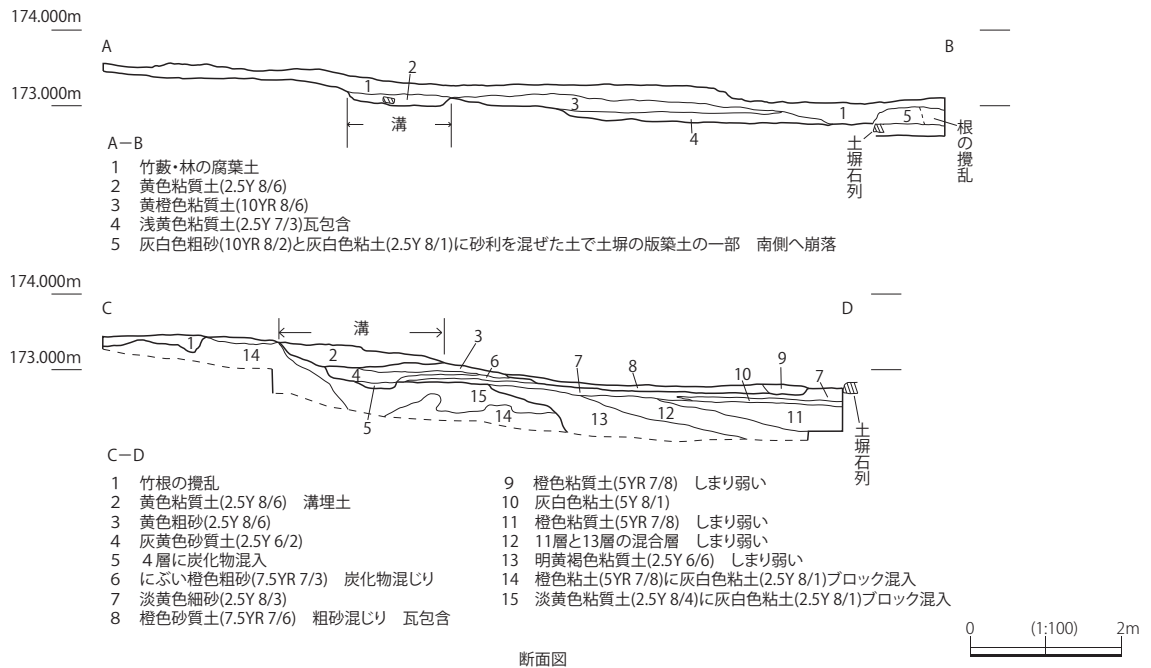
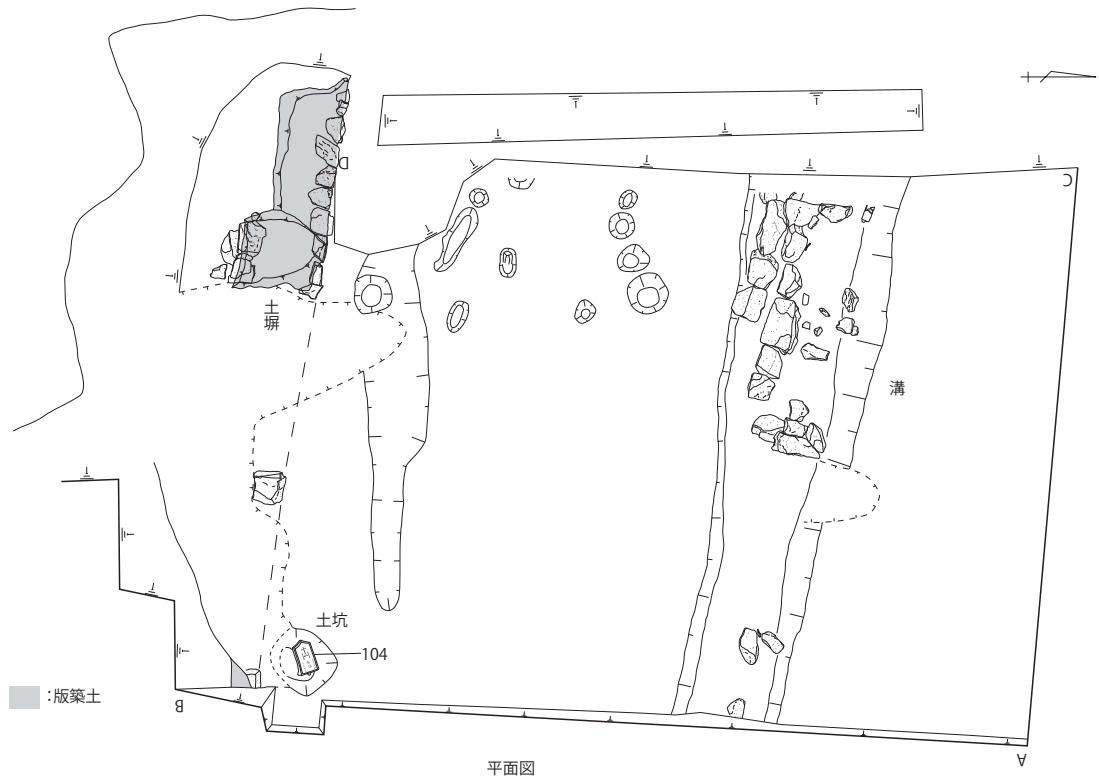
土坑（第17図）

検出した土塀の最も東側にあたる基礎石の北側、つまり土塀の内側（寺域内）において、一辺0.63 m、深さ0.21 mの隅丸方形の土坑（その南半分は後世の削平を受けている）を確認した。上端の標高はT.P. + 172.758 m、底部はT.P. + 172.579 mであった。その内部から文字面を上に向けて置いたような状態でキリシタン墓碑（第23図-104）が出土した。出土標高はT.P. + 172.679 mであった。遺骨や副葬品などは出土しなかった。検出したのは地山面であるが、仮に地山層上面からの掘り込みであれば、墓碑はごく浅い部分に埋まっていたこととなるため、本来はA-B断面4層の上面から掘り込まれた遺構と考える。

溝（第17図）

調査地区の北側で東西に伸びる直線的な溝を検出した。東西の両端は調査区外へ延びている。その規模は長さ7.2 m、幅2.1 m、深さ0.43 mであった。上端の標高はT.P. + 173.371 m、底部はT.P. + 173.037 mで、西から東にやや傾斜している。溝内には10～65 cmの自然石が列状に並んでおり、一部の石は表面が赤変していることから、被熱を受けていると考えられる。出土遺物としては丸瓦や平瓦が出土している。西側に平成6年度1次調査および平成11年度1次調査で池とみられる落込みBとそれに続く落込みを検出しており、本遺構は池の排水施設の可能性がある。

（村上・實盛・田中）



第17図 調査地区平面図・断面図・遺物出土状況図(TG2001-1)

第4節 出土遺物

一連の調査では、数多くの遺物が出土した。ここでは各遺物のうち主要なものの概要を述べることにし、詳細は巻末の遺物観察表（53頁～58頁）を参照されたい。掲載は当初整理に従い土器・土製品・石製品・金属製品を調査ごとに先に述べ、そののち瓦類を調査ごとに報告することとした。遺物番号は土器・土製品・石製品・金属製品と、瓦類とでそれぞれ調査回数にかかわらず連番とし、瓦類には弁別のため頭に「瓦」を付して番号を付与することとした。

1. 1994-1次調査 土器・土製品・石製品・金属製品

第18図-1～第22図-103は1994-1次調査出土の土器・土製品・石製品・金属製品である。1～7は3号墓出土で、1・4・5・7は1号土坑出土、2・6は2号土坑出土、3は3号土坑付近出土である。1・2は古瀬戸の水注で、2には把手がつく。1の方が古く13世紀前半、2はそれに続く13世紀後半とみられる。3は青白磁脚付小壺で、13世紀～14世紀中ごろのものとみられる。4～6は東播系のもので、6のみ焼成不良で軟質、他は須恵質である。7は体部に綾杉文のタタキがみられ、底部に穿孔がある。8は9号墓出土の肥前陶器鉄釉小碗である。9は13号墓五輪塔台座の下部より出土した一石五輪塔の空風輪部分である。10は土師質土器蓋付火鉢で、内面に煤の付着がみられることから火鉢のような暖房具を蔵骨器に転用したものと思われる。蓋には十文字に孔があけられており、身のほうの孔は、口縁部下に2個を1対としたものが2カ所、高台部には2個を1対としたものが2カ所と1個のものが2カ所あけられている。16世紀後半～17世紀のものとみられる。11と12は10号墓出土の信楽壺で、接合しないが同一個体とみられる。13は6号墓出土の常滑大甕で、12世紀末～13世紀前葉のものとみられる。14は土坑100出土の瓦質土器大甕である。15はその掘形から、16は大甕内部から出土した。17・18・26・28・34は落込みB出土、19～21は土坑101出土、22・23・24・27・30は溝4出土、25は溝101出土である。

29～32・34・35は石製品である。31は裏面に文字の線刻がみられる。33・36～39は金属製品である。33は溝3出土の青銅製懸仏で、六本腕で結跏趺坐し蓮華座に座す明王もしくは菩薩をあらわす。36～38は9号墓出土の銅銭で、銭文が確認できたものはいずれも寛永通宝であり、37は古寛永、36・38は新寛永である。36は2枚、37は3枚が錆着し、合計六枚のいわゆる「六文銭」とみられる。

40～67は土師質土器皿で、59と61以外は包含層出土である。68～72は土師質土器羽釜である。そのほとんどは16世紀に属するものである。73～76は瓦質土器で、77は古代の須恵器坏である。78は瓦質土器の火燈蓋で、孔周辺内面に煤が付着している。16世紀前半のものとみられる。79は瓦質土器灯籠で、吊下用とみられる孔がある。

落込みB出土の28と包含層出土の82は瓦質の四足獣埴で、いずれも狛犬の台座と考える。

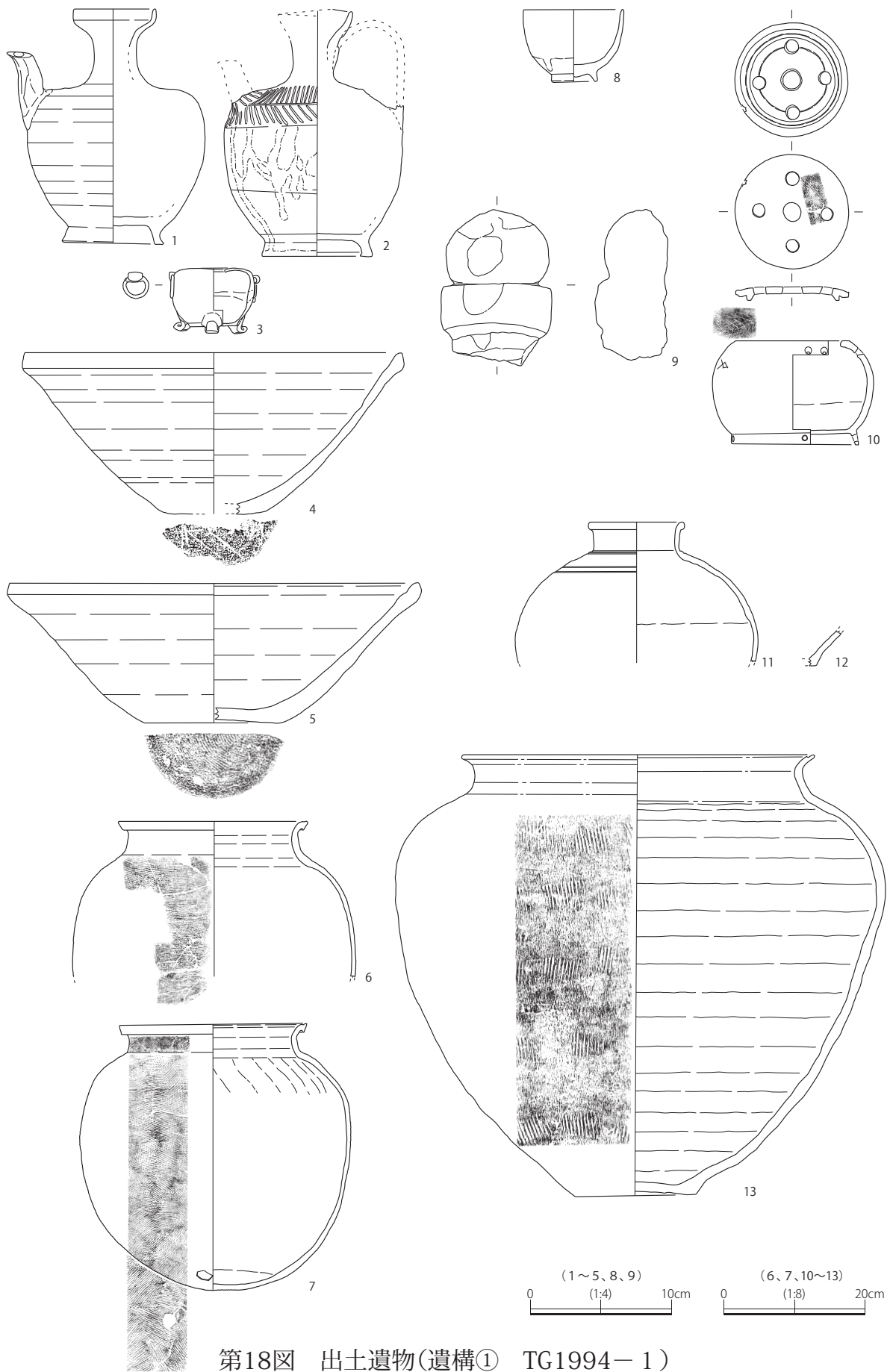
83～100は包含層出土の陶磁器類で、84は龍泉窯製青磁鎬文酒会壺蓋、85は完形の龍泉窯製青磁袴腰香炉である。

101～103は五輪塔地輪のうち銘文を現地を確認できたもので、101は23号墓出土で永正13年(1516)、102は35号墓出土で寛永10年(1633)の紀年銘がある。また、102には施主として「田原源右衛門忠圀」の名が刻まれている。

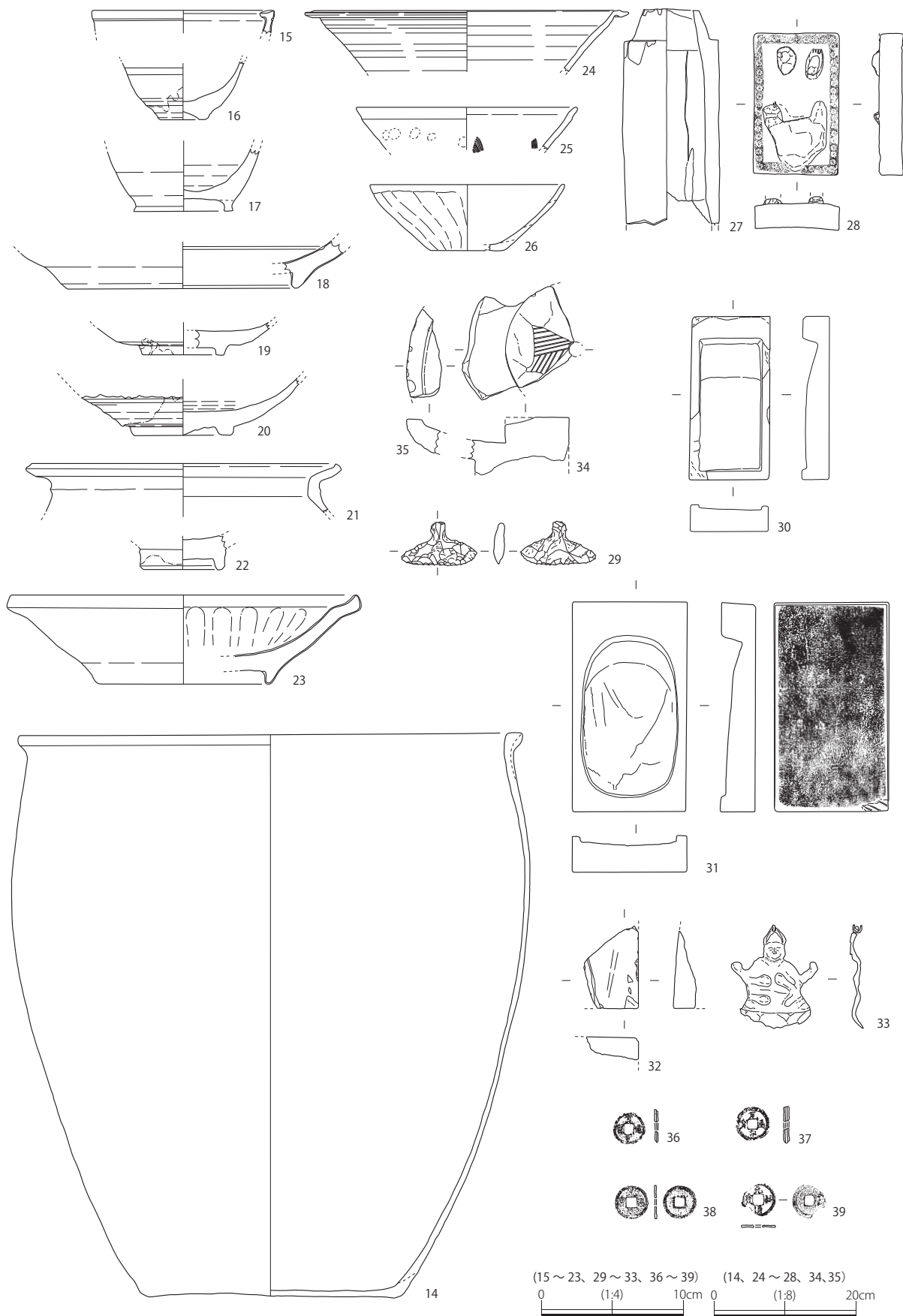
2. 2001-1次調査 石製品

第23図-104は、2001-1次調査で出土したキリシタン墓碑である。墓碑の法量は、最大の長さ約43.5cm・最大の幅約26cm・最小の幅約24cm・上部の厚み約8cm・基底部の厚み約13cm・重さ約24.7kgで、形態は将棋の駒に似た五角形をしており、基底部の中央付近に約4.5cmの突起が付いている。この突起があることから、本来は台座のようなものに据えつけられていた立牌形であると考えられる。奥田尚氏の鑑定によると、材質は片麻状柘榴石黒雲母花崗岩である。

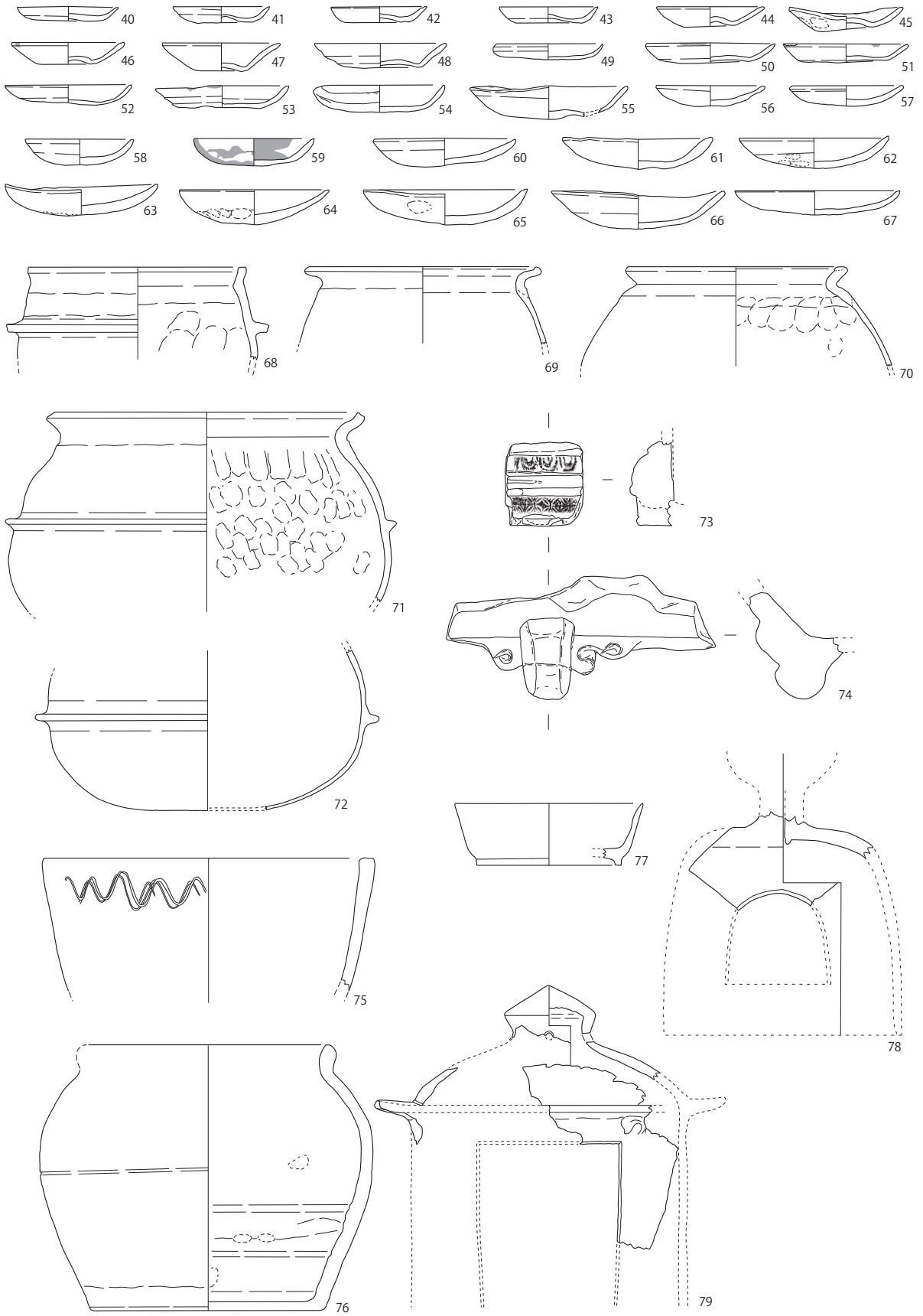
墓碑の表面には、上半部の中央に『IHS』の一部と考えられる『H』の文字とその横線の中央に意図不明の『()』、その上部に十字架が刻まれており、下半部には3列の縦書きで右から順番に『天正九年 辛巳』・『礼幡』・『八月七日』と刻まれている。



第18図 出土遺物(遺構① TG1994-1)

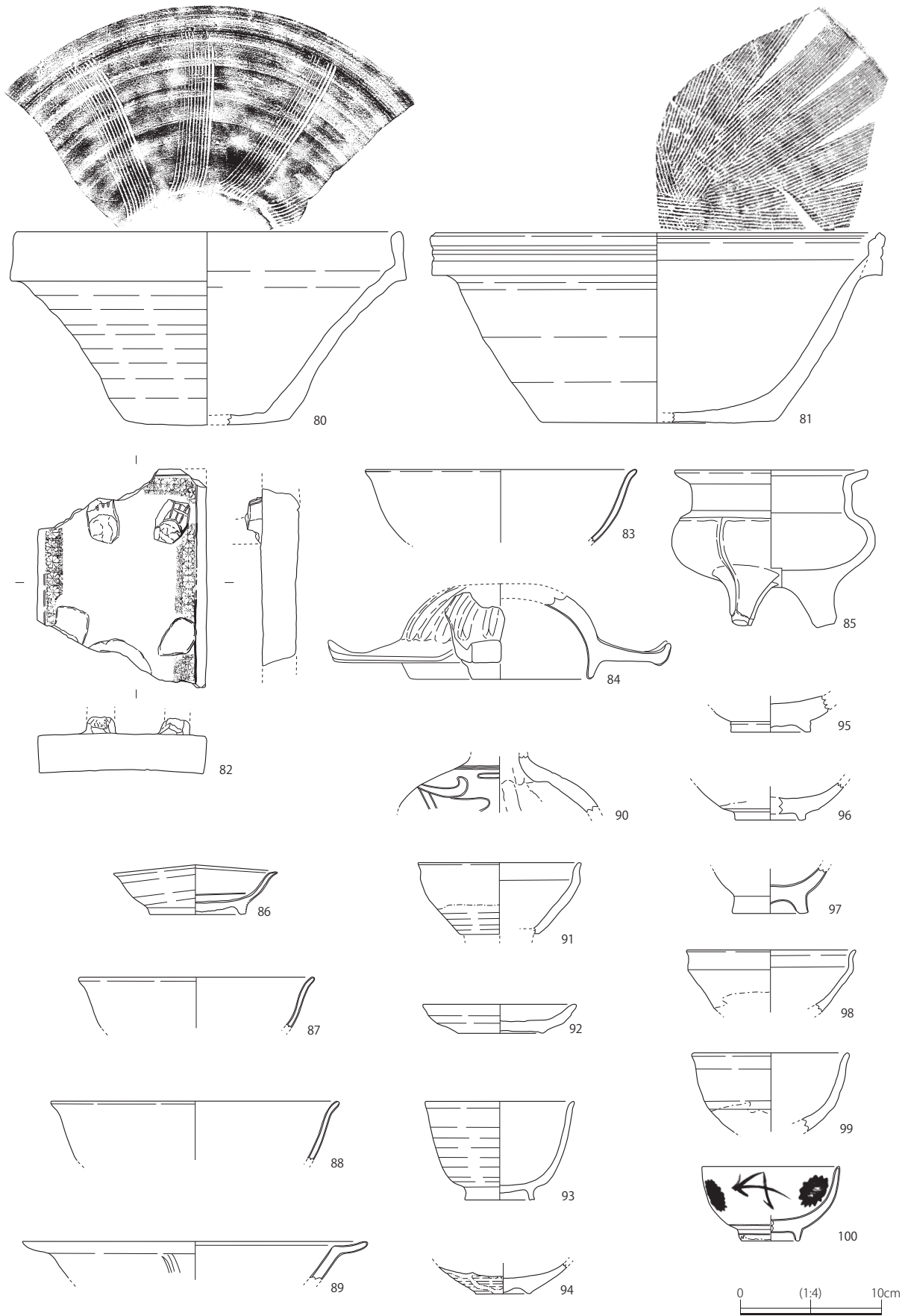


第19図 出土遺物(遺構② TG1994-1)

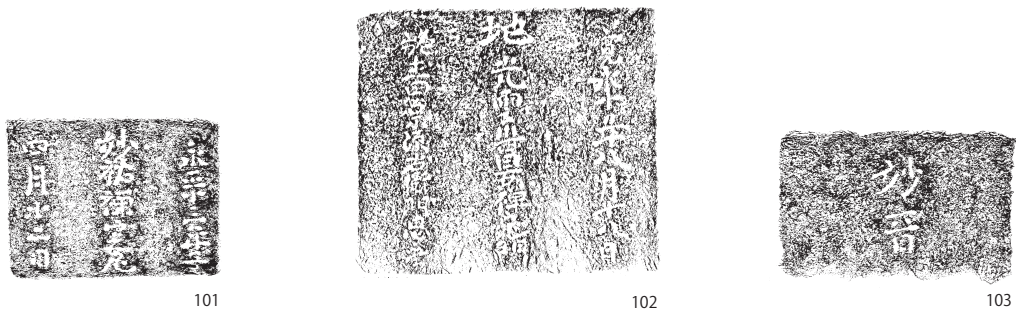


第20図 出土遺物(包含層① TG1994-1)

0 (1:4) 10cm



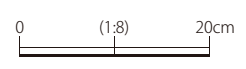
第21図 出土遺物(包含層② TG1994-1)



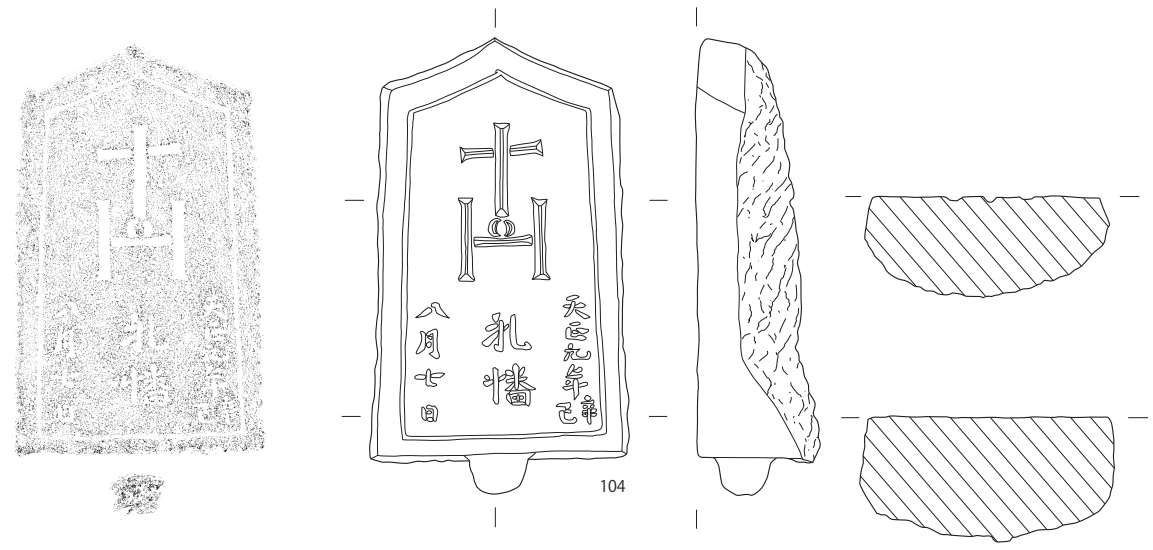
101

102

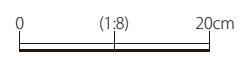
103



第22図 出土遺物(五輪塔地輪 TG1994-1)



104



第23図 出土遺物(TG2001-1)

3. 千光寺跡出土軒瓦の分類

この分類は、千光寺跡の1994-1次調査で出土した軒瓦を文様により簡易的に分類したものである。I群からIII群の分類と年代については、山崎信二氏のご教示を参考にした概略的なものである。

軒丸瓦A類：巴文の頭部は尖って細い。巴文の周囲に二重の圈線が巡り、その間の珠文は比較的密に配置されている。巴文の尻尾が内側の圈線に接合している。

軒丸瓦B類：巴文の頭部分は丸味を持つ。巴文の周囲に一重の圈線が巡り、巴文の尻尾が圈線に接合している。珠文は小さく比較的密に配置されている。瓦当面が他の軒丸瓦より比較的大きい。

軒丸瓦C類：巴文の頭部分は丸味を持つ。巴文の周囲に一重の圈線が巡り、巴文の尻尾が圈線に接合している。珠文は比較的大きい。




















軒丸瓦D類：巴文の頭部は尖って細い。巴文の周囲に一重の圈線が巡り、巴文の尻尾が圈線に接合している。珠文は比較的小さい。

軒丸瓦E類：巴文の頭部分はやや丸みをもつ。巴文の周囲に一重の圈線が巡り、巴文の尻尾が圈線に接合している。珠文は比較的小さい。瓦当面が他の軒丸瓦より比較的小さい。

軒丸瓦F類：巴文の頭部分は丸味を持つ。巴文の周囲に圈線は無い。珠文は比較的大きい。

軒平瓦1類：菊花唐草文。両端の唐草の先端が三葉状になっている。周囲に圈線が巡る。

軒平瓦2類：菊花唐草文。上部に圈線と思われる痕跡があるが明確ではない。

様式 年代	軒丸瓦	軒平瓦
I群 (14世紀)	A類  瓦110 D類  瓦12	1類  瓦47
II群 (15世紀)	E類  瓦15  瓦19  瓦2	3類  瓦51  瓦61
III群 (16世紀前半 ~中頃)	B類  瓦13 C類  瓦14 F類  瓦16 0 (1:8) 20cm	2類  瓦39・53 4類  瓦41 5類  瓦58 6類  瓦50  瓦45 7類  瓦36 8類  瓦35 9類  瓦56

第24図 千光寺跡出土軒瓦の分類と変遷

軒平瓦3類：菊花唐草文。他と比べて菊花も唐草も退化気味である。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦4類：菊花唐草文。5類と類似しているが、唐草両端の表現が異なる。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦5類：菊花唐草文。4類と類似しているが、唐草両端の表現が異なる。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦6類：菊水文。波状文が崩れて連続した横線状の波となっている。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦7類：中心の文様は不明。波状文。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦8類：菊水文。周囲に圏線が巡る。

軒平瓦9類：小片で明確な文様構成は不明であるが、他とは異なっている。周囲に圏線が巡る。

なお、胎土と焼成および出土比率から軒丸瓦E類と軒平瓦3類は組み合わせるものとする。この2種は出土比率が軒瓦中最も多かった。

4. 1994-1次調査 瓦

第25図-瓦1～第30図-瓦106は、1994-1次調査出土の瓦類である。瓦1～瓦10は遺構出土、瓦11～瓦22は包含層出土の軒丸瓦である。瓦34～38は遺構出土、瓦39～瓦61は包含層出土の軒平瓦である。瓦62～瓦65は鳥伏間瓦である。瓦66～瓦71は丸瓦である。瓦72～瓦83は平瓦である。このうち瓦72、瓦79、瓦81に「千光寺」あるいは「千」の刻印があり、瓦78もその刻印の一部がある。瓦84～瓦88は雁振瓦である。瓦89～瓦106は道具瓦である。軒平瓦のうち瓦39と瓦53は接合することが製図後に判明した。

各瓦には刻印があるものがあり、瓦23～瓦33で一例を示した。

5. 1999-1次調査 瓦

第31図-瓦107～瓦109は1999-1次調査出土の瓦類である。軒丸瓦(第31図-瓦107)、軒平瓦(第31図-瓦108・瓦109)を図化した。

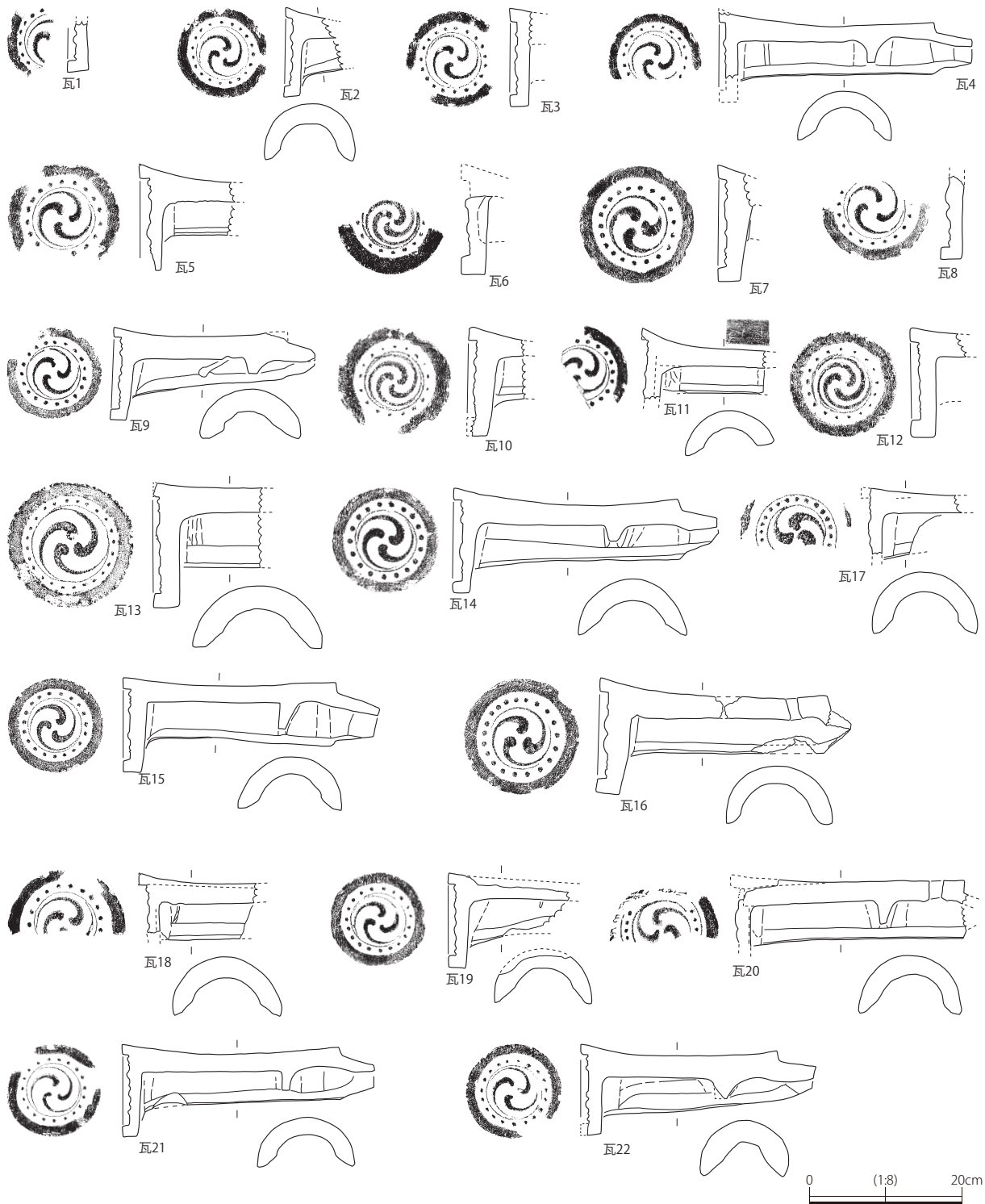
瓦107は軒丸瓦E類、瓦108は軒平瓦3類、瓦109は軒平瓦2類に分類したものである。

6. 2001-1次調査 瓦

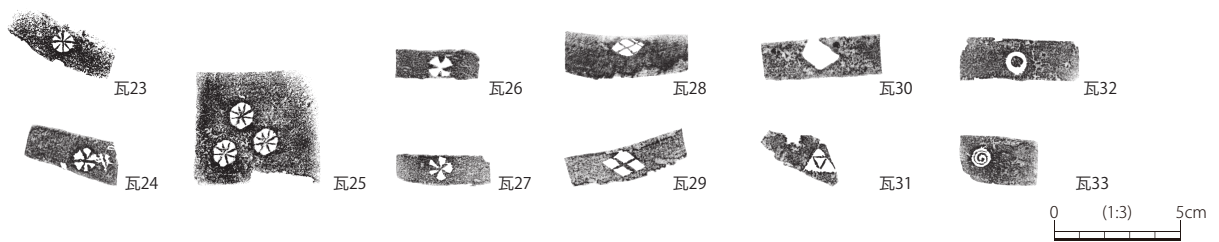
第31図-瓦110～瓦112は2001-1次調査出土の瓦類である。軒丸瓦(第31図-瓦110)、軒平瓦(第31図-瓦111・112)を図化した。

瓦110は軒丸瓦A類、瓦111は軒平瓦3類、瓦112は軒平瓦3類に分類したものである。

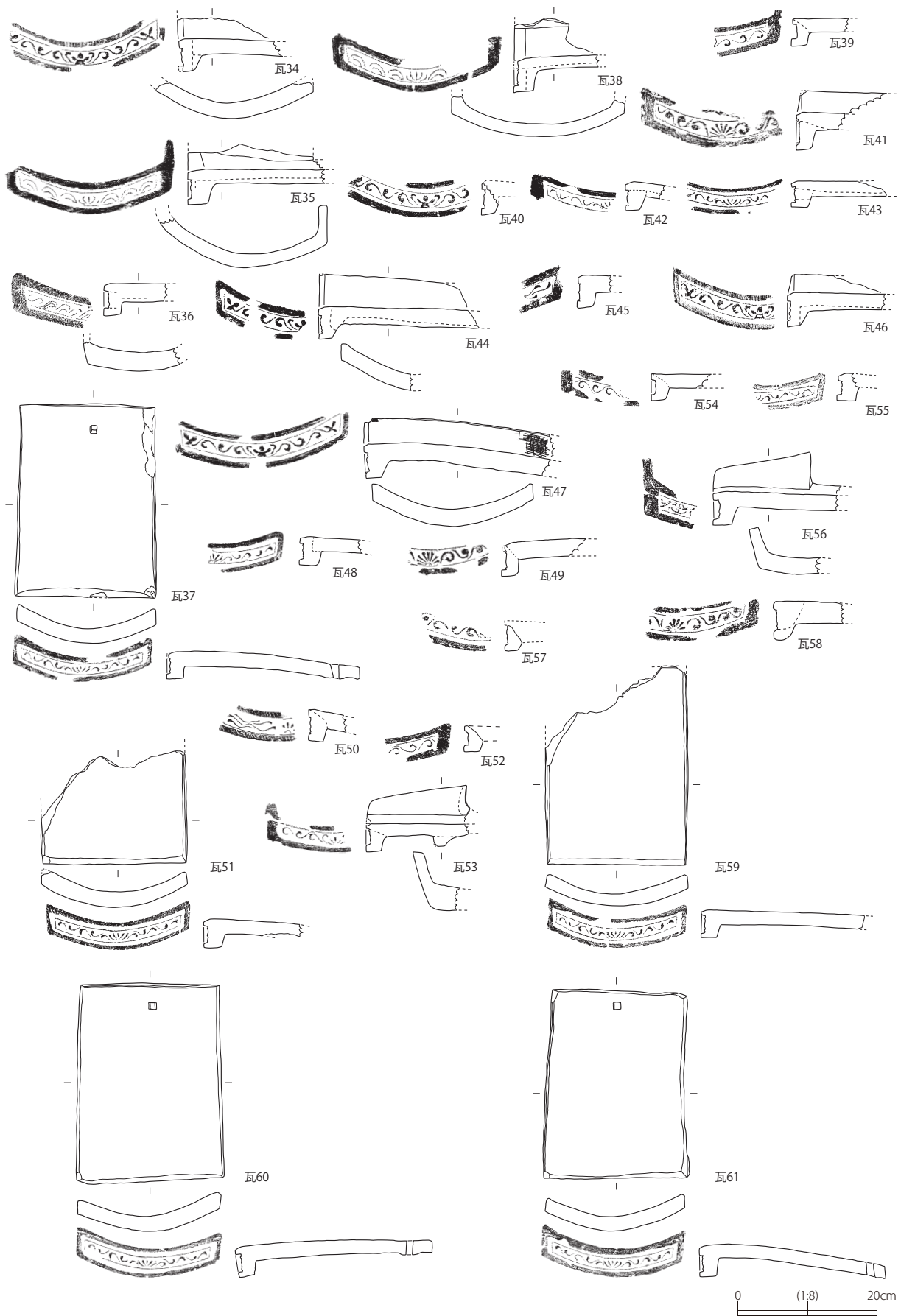
(村上・實盛・田中)



第25图 出土瓦(軒丸瓦 TG1994-1)



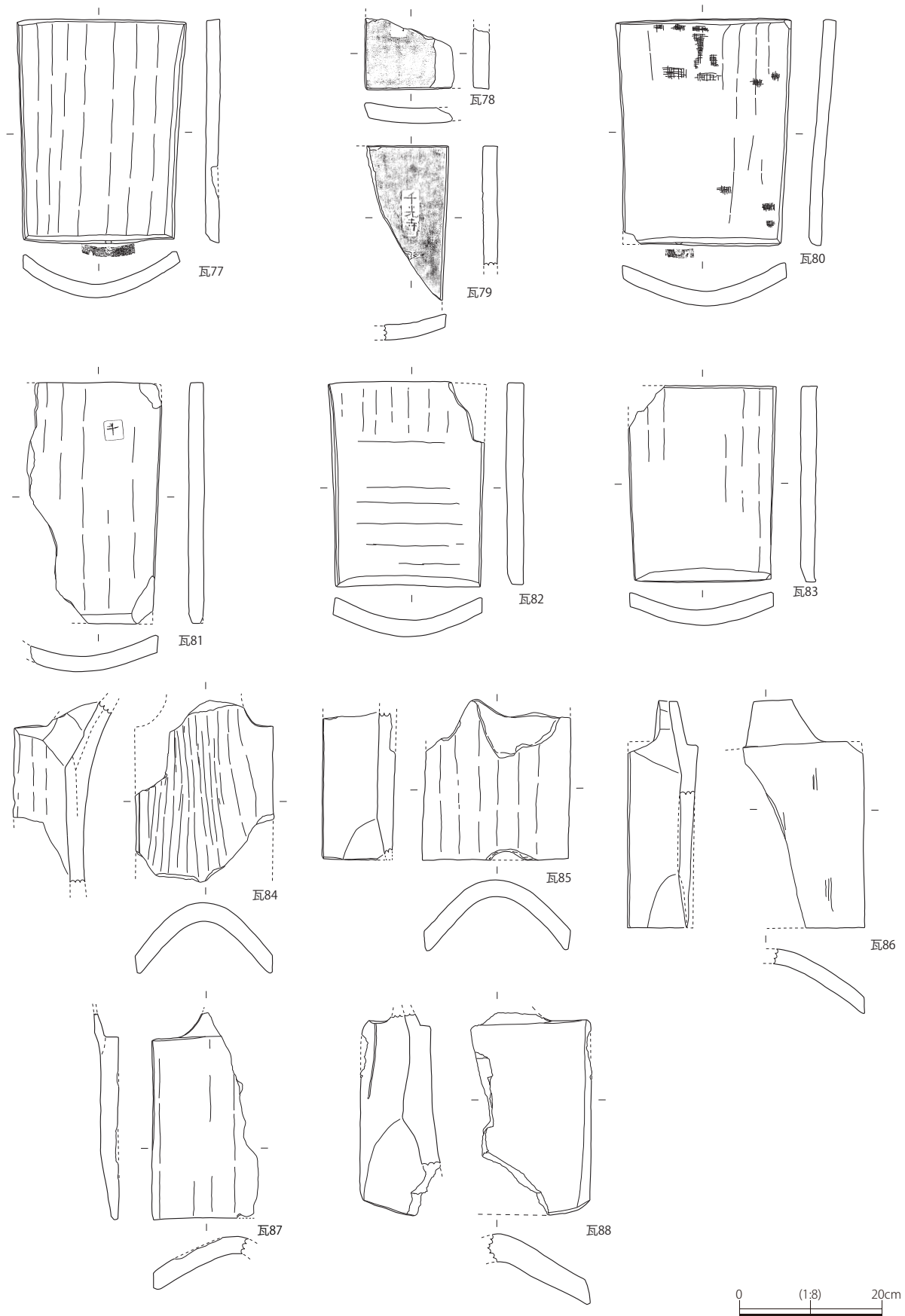
第26图 出土瓦(刻印 TG1994-1)



第27图 出土瓦(軒平瓦 TG1994-1)



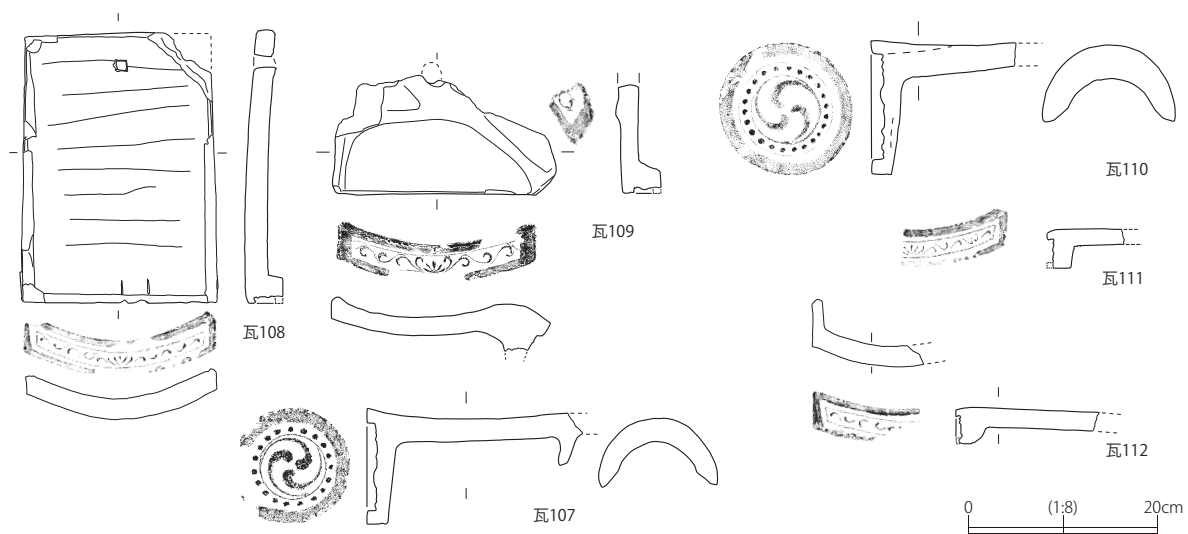
第28図 出土瓦(鳥伏間瓦・丸瓦・平瓦 TG1994-1)



第29图 出土瓦(平瓦·雁振瓦 TG1994-1)



第30图 出土瓦(道具瓦 TG1994-1)



第31图 出土瓦(TG1999-1·2001-1)

第4章 千光寺跡とキリシタン墓碑

第1節 千光寺跡と田原城主

1. 田原城跡と田原氏

田原城は、四條畷市上田原の八ノ坪に所在し、生駒山系から東へ派生する標高 178.6mの尾根上に所在する。本郭は 南北約 26m・東西約7mの削平地で、周囲との比高差は約 30m高くなっている。城の北東側に清滝街道が、北側に古堤街道が通じる河内と大和を結ぶ要衝の地に築かれており、飯盛城の東側である大和方面からの攻撃を防御する支城としての役割を奈良県生駒市の北田原城とともに担っていたと考えている(實盛 2013)。この田原城のある八ノ坪には城郭に関連する地名「城の下」「門口」「土居の内」「的場」「矢の石」などが残っている。城の本郭には、廃城後に磐船神社(交野市)から分祀された住吉神社が建立されていた。本郭の南西には深い堀切があり、本郭と二郭とを区切っている。この堀切は、北西に延びて深い堀切道となり、井戸郭に出る。井戸郭は窪地となり、二カ所の井戸と土墨にせき止められた貯水池の跡がみられる。西方には生駒山系から延びる尾根上に曲輪が築かれている。南部の谷間は現在宅地となっているが段地形が残っており、居館等の存在を思わせる。城跡の北と東側には北谷川、南側には天野川が巡っており、堀の役目を果たしていると考えている。また北西の尾根の両側には深さ7mのV字形の空堀を発掘調査で確認している。城跡の南西部にある「殿様屋敷」伝承地の調査では、掘立柱建物跡や石組井戸を確認し、城に付随する居館の存在を確認した。これまでの調査から築城年代は 14世紀中葉とみられ、その後 16世紀後半まで城として機能したとみられる(野島 1986)。

この田原城の城主は田原対馬守と伝えられ、口伝の他に天保年間の文献に「この地に永禄年間の当地守護田原対馬守の城跡があったと伝える」とあるのと、「文禄年間に田原城主の娘が岡山地区の領主に嫁いだ」とする文献が存在する(山口編 1972)。現在の禅宗月泉寺は、城主たちの菩提寺であった真言宗千光寺の後身である。田原城は、現在の場所に築かれる以前の鎌倉時代(13世紀代)には約1 km北東の正傳寺西側の小字「古城」の地(森福寺跡と同位置)にあったと伝えられており、田原氏もそこに居住していたと考えている。また、田原城跡の北方に所在する千光寺跡の墓地の発掘調査で確認した最も古い墓(3号墓)の年代とも一致する。しかし「古城」の地は現在も未調査のため詳細は不明である。

2. 千光寺跡について

千光寺跡は四條畷市大字上田原に所在し、平成6年度の調査により新たに発見した遺跡である。その調査地には、田原城主田原対馬守の墓と伝えられてきた五輪塔など数基が雑木林の中に存在しており、寺の存在を伺わせる「寺口」という小字名が残っていた。

調査の結果、寺跡とそれに付随する墓地を確認した。墓地では、3号墓(13世紀代)をはじめ、25基以上の五輪塔群と常滑焼大甕を埋納した総供養塔と考える6号墓(12世紀末～13世紀前葉)などを確認した。3号墓については、重厚な埋葬形態や、墓の東側一部が崩落した斜面下から本来3号墓の副葬品として埋納されていたと考えられる龍泉窯製青磁袴腰香炉(大阪府指定有形文化財)が出土していることから、田原城主の墓と考えている。

また寺跡においては、東西に伸びる長さ 15.5m・幅 1.2mの平行に築かれた2列の花崗岩の石列を確認した。この石列の土層断面を観察したところ、2個の石の間に粘土と砂利を混ぜた土を版築工法で積み上げている土壁の痕跡を確認したことから、土塀の基礎であることが判明した。

千光寺跡からは、天目茶碗などの陶磁器類や茶臼、青銅製懸仏、大量の瓦などが多くの遺物が出土しており、4点の平瓦には『千光寺』や『千』と刻印されていた。

また、『明治六年西二月 廃寺取調書』に千光寺についての記載があることがわかり(本書 62頁)、文献上からも千光寺の存在が明らかとなった。

以上、遺跡の内容や伝田原対馬守五輪塔が存在していたことから、千光寺跡は田原城主の菩提寺とそれに関連する墓地であると考えている。

3. 千光寺跡の構造について (第 32 図)

千光寺跡は、生駒山系から派生する尾根上に造成された墓地と寺跡である。南側の谷を挟んだ箇所に田原城跡が所在する。

千光寺の敷地の北側には寺、南側には墓地が所在する配置であった。敷地の南端には東西方向に東から西へ緩やかに上っていく参道があり、その南側は南へ向かって下る谷地形となっている。参道の北沿いには花崗岩の石列を基礎にした土塀が続いている。3次にわたる調査で延長28.2mを確認した。発掘調査では土塀の南側から大量の瓦が出土していることから、土塀には瓦が葺かれていたと考える。

東から緩やかに上る参道を西へ向かって歩いていくと土塀の石列が途切れる箇所に当たり、その場所が寺へ向かうための出入口である。この出入口の通路の下部には、花崗岩を並べた排水溝が作られており、排水溝の上には横長の花崗岩を蓋として敷並べて路面としていた。通路を北へ進むと東へ傾斜するやや深い溝(落込みA)に至る。この溝は東へ大きく広がった形状をしており、発掘調査時には溝の西端の北斜面から若干の湧水を確認したことから、大きく広がった箇所は溝から水が流れ込む池(落込みB)と考える。

溝(落込みA)の北側には西へ緩やかに上る尾根状の斜面があり、そこに南北方向の溝(溝3)がある。この斜面を上りきると後述する寺域の西側上段に至ることから、この溝(溝3)は寺域の境界を示すものとする。またこの斜面自体が墓地との境界でもあると考える。

溝(落込みA)を渡って北へ向かうと寺域に至る。発掘調査の対象範囲は寺域全体ではなく、北側と東側へ広がっている。寺域の西側は急な斜面地形となっており、その上段では不整形な溝を2か所で確認した。特に北西端の溝(溝4)では発掘調査時に若干の湧水がみられた。この溝の斜面下に位置する土坑(土坑100)には、瓦質土器大甕が設置されていたことから水溜施設の可能性を考える。

この寺跡からは多くの遺構を検出したが、明確な建物を復元することはできなかった。

参道沿いの土塀は出入口の西側付近で無くなる。出入口から西へ向かい花崗岩の自然石を並べた簡易な段を一段上がってさらに進むと、花崗岩の自然石をL字状に組んだ場所に至り、参道の終わりを示していた。ここを上ると墓地に至る。

なおこのL字状の石積みの一角には、その一部を利用した区画があり、五輪塔(35号墓)が設置されていた。この五輪塔の地輪には、寛永十年の年号が刻まれていることから、その時期以前に埋まったL字状の石積みの一部を利用して新たに墓地の区画を作り五輪塔が設置されたことが判明した。

墓地は大きく斜面上と平地部に分かれる。特に斜面上に築かれた3号墓は、下から見上げるような場所に位置していた。平地部には多くの五輪塔が設置されており、中央近くには2段の基壇を設けた墓があった(6号墓)。

参道を東へ下っていくと、千光寺が所在する尾根の先端部に至る。その部分については現在も雑木林として残っている。

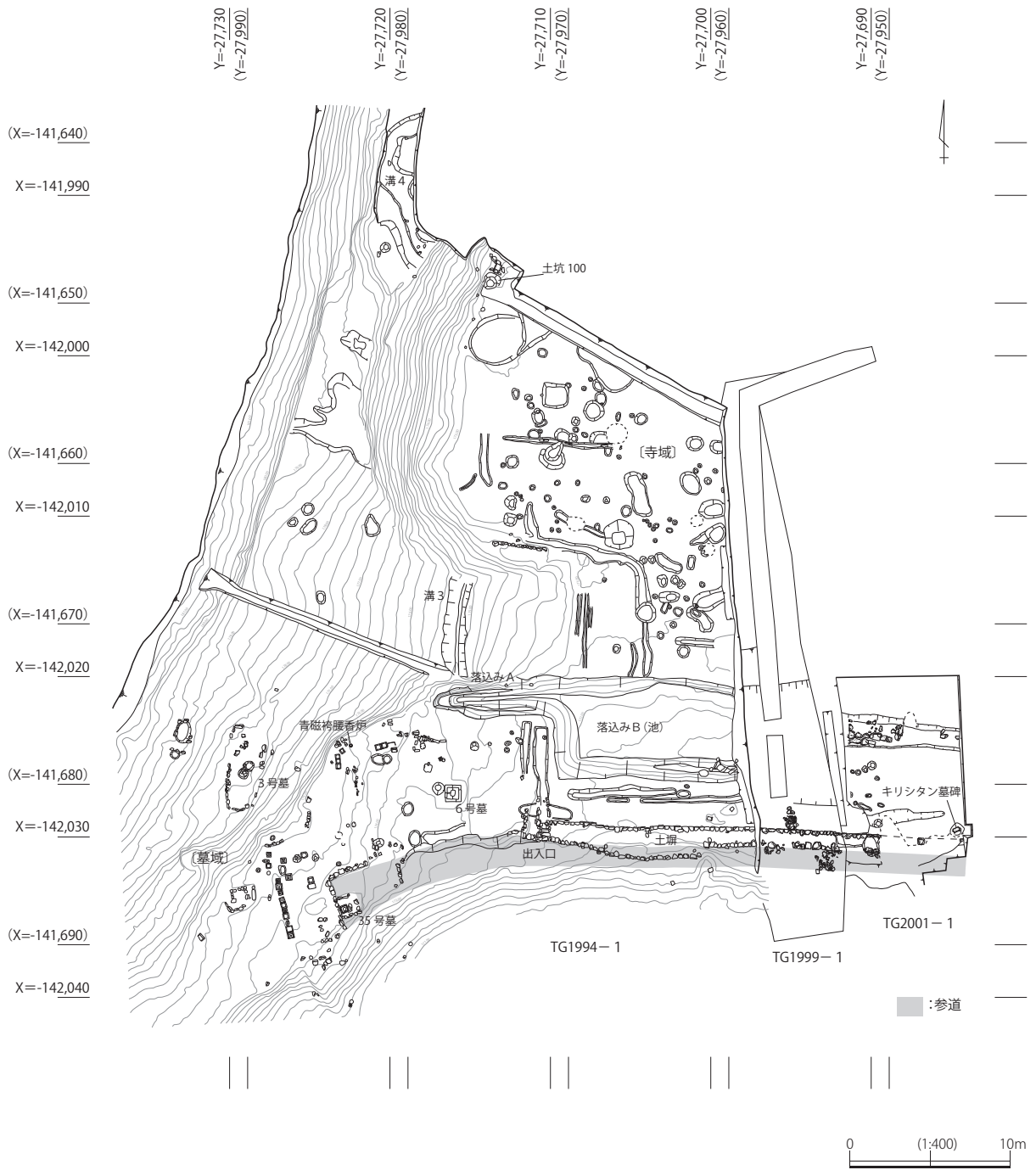
4. 遺跡の重要性について

(1) 国人領主層の墓制

中世の墓地については、国人領主層のものと考えられている大内城跡墳墓(財団法人京都府文化財調査研究センター1984)、惣墓である一の谷の中世墳墓群(13～17世紀、磐田市教育委員会1988など)、大王山遺跡(中世墓、奈良県立橿原考古学研究所編1977)、古市城(14～16世紀の城・墓、奈良市教育委員会1981)や岡本山古墓群など多くみられるが、国人領主層の墓地については資料が少なく不明な点が多い。そのなかで田原氏という国人領主に関連する墓地とそれに伴う寺跡が発見されたことは重要であるとする。

(2) 総供養塔について

墓地から出土した6号墓は、その形態から総供養塔と呼ばれているものとする。総供養塔は、畿内では墓地の中央にある場合が多く、これらはその五輪塔の形態から平安時代末～南北朝時代頃まで



第 32 図 千光寺跡調査地区合成図 ()は世界測地系

のものが多いとされている。基本的には個人の供養塔ではなく、墓地に結縁した人々のためのものである。年号銘をもつものも多く、市内逢阪の延元元年（1336）銘の五輪塔もこのような性格のものであると考える。このような墓の下部施設を発掘調査した事例は多くなく、その一つが長野県飯田市の文永寺に存在するものである（飯田市教育委員会 1987）。この総供養塔の五輪塔の下部には、納骨のための常滑焼大甕（12世紀代）が埋められており、また五輪塔を納める石室（覆屋）に弘安6年（1283）の銘文が刻まれていることから、造塔年代のわかる資料として重要文化財に指定されている。この覆屋つまり堂内に五輪塔を配置する構造が、後の納骨堂に受け継がれてゆくと考えられている。これと比較すると6号墓には五輪塔や覆屋は現存しないが、下部に設置された常滑焼大甕（12世紀末～13世紀）が総供養塔という納骨施設であることを確認できたことは成果の一つである。

（3）埋葬方法について

火葬骨を骨壺に納めて埋蔵するもの、石塔の下に直に火葬骨を埋葬するもの、石塔のみを建てたものの、土葬するものというように様々な埋葬方法を国人領主層の墓地においても確認したことは、中世の墓制研究において重要な遺跡であると考えられる。

3号墓のような石を組んだ墓は、『餓鬼草紙』にみられるように基本的には3段に造っていたが、次第に高さが低くなっていくとともに段も不明確になり、最終的には単なる石の区画になると考えられている。そして石の区画は、南北朝時代の頃から独立したのではなく接続することが多くなり、次に大きな区画を分割して小区画を形成するようになり、さらに小区画もなくなり大きな区画のみになると考えられている。そしてこの区画は家族単位のものと考えられている。

このことから、斜面を平坦に削平して石で区画した3号墓は、1号・2号土坑の副葬品や埋葬形態から田原城主の墓と推測し、両土坑は血縁関係にある墓と考える。

4. 遺跡を移築するにあたって

千光寺跡の発掘調査では、埋葬施設や多くの五輪塔、総供養塔などを確認し、その埋葬方法や出土遺物から田原城主に関連する墓地であると考えられる。また、墓地の北側では寺跡を発見し、「千光寺」と刻印された瓦が出土したことから、この地が文献にもある田原城主の菩提寺である真言宗千光寺跡であることが判明した。

以上、この遺跡が中世の国人領主層の研究をしていく上で重要な遺跡であると考え、現地での埋没保存などを協議したが、開発計画の変更が不可能となったため、旧住宅・都市整備公園の御理解・御協力で、特に重要と考えられる遺構については近隣に移築し、平成13年12月1日に「千光寺跡移築広場」として広く一般公開するに至った。

第2節 田原城主レイマンのキリシタン墓碑

1. キリシタン墓碑発見の経緯

平成13年度に阪奈サナトリウムが所有する千光寺跡の東側隣接地において、病院の駐車場建設の造成工事に伴う発掘調査で確認した千光寺の土堀の基礎石列の最東端の北側、つまり土堀の内側（寺域内）にあたる場所において、一辺約63cm・深さ約21cmの隅丸方形の土坑（その南半分は後世の削平を受けている）を検出し、その中から文字を刻んだ面を上に向けて置いたような状態でキリシタン墓碑が出土した。遺骨や副葬品などは出土しなかった。

2. キリシタン墓碑について

墓碑の形態は将棋の駒に似た五角形をしており、基底部の中央付近に突起があることから、台座に据えつけられていた立牌形であると考えられる。これはキリシタンの墓碑に特有の寝棺の上に伏せたように設置する伏碑ではなく、日本在来の石塔に系譜があるものであり、仏塔にキリシタンの意匠を表現した和洋折衷的な墓碑である。

墓碑の表面には、上半部の中央にイエズス会の紋章であり、イエス・キリストを表すと考えられている『IHS』の一部と考えられる『H』の文字とその横線の中央に意図不明の『()』、その上部に十

字架が刻まれており、下半部には3列の縦書きで右から順番に『天正九年 辛巳』・『礼幡』・『八月七日』と刻まれている。意図不明の『()』に関しては、キリシタン遺物で『H』の文字の横線中央部にゴルゴダの丘を示しているとされる半円形状の表現がある。このことから半円形の上部は離れているが、同じ表現をしたものと考えられる。

3. 『礼幡』について

松田毅一氏は『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』のなかで、日本布教長カブラルの1571年から1574年にかけての2度の五畿内巡察については史料の欠如から不明確な点が多いとしている。そのなかで、ルイス・フロイスの未刊書簡のうち重要なものとして次のものをあげている。

(1) 1574年9月8日付、堺発信、西国、豊後、肥前の同僚宛、フロイス書簡 (Jap. Sin. 71. f. 231 ~ 234V)

(2) 1575年5月4日付、堺発信、カブラル宛、フロイス書簡 (Jap. Sin. 71. f. 255 ~ 258V)

このうち(1)については、以下のようにその一部を紹介している。

「三ヶから一里離れた城の城主 Gonosuedono (ゴノスケ殿) は未信者ではあったが、イエズス会の大の友人であり、時々教理を聞いて、大分デウスのことが判っていた。—中略—臨終のときになり、彼と共にいた二人のキリシタンは、彼が受洗することを熱心に頼み、ロレンソの派遣を乞うた。ロレンソが都から十二里距った所へ着いた時、彼は既に死亡していた。然しその旅行は無駄ではなく、三ヶ殿の一元老 Gennro はキリシタンになった。彼は Tauora (田原) の城主で、その改宗は大いにキリシタンの喜びとなり、之が為にその家臣がキリシタンになることが期待されるに至った。—後略—」

(2) については、フロイス『日本史』松田毅一・川崎桃太訳 中央公論社の第46章の注釈の中で、原書簡は表裏の文字が二重になり解読不能な場所が多いと断った上で以下のようにその一部を紹介している。

「聖週と復活祭は三ヶ(三箇)で盛大に催され、甲賀、若江、田原、堺、および fin . . . (解読不能) のキリシタン三百名が集まった。—中略—復活祭の一週間後フロイスは三ヶを出、堺と烏帽子形のキリシタンを訪い、ついで都に至り、オルガンティーノとともに信長から親切に迎えられた。池田丹後守、三ヶマンショ、結城ジョアン、田原レイマン、その他河内のキリシタン武士も信長に挨拶に赴いた。—後略—」

以上、(1)の書簡には1574年に田原の城主がキリシタンに改宗したこと、(2)の書簡には1575年には田原にキリシタンが存在していたこと、また田原レイマンが織田信長に会っていることが記されている。

千光寺跡から出土した墓碑から判断できることは、十字架が刻まれていることからキリシタンの墓碑であり、その下半部中央に刻まれている『礼幡』の2文字は、洗礼名を表していることである。また2文字の訓読については、礼は「れい」・幡は「まん」と読めることから、『れいまん』であると考えられる。そしてこの人物が亡くなった年号『天正九年 辛巳』は、西暦の1581年にあたる。

以上の点からこの墓碑の人物に関しては、以下のことが推測できる。

第1に、この墓碑は、田原城主田原対馬守一族の菩提寺である千光寺境内の南東隅に掘られた土坑から出土していることから、墓碑に刻まれている『礼幡』なる人物は、田原氏の一族の者である可能性が非常に高い。第2に、墓碑に刻まれている『礼幡』については、『レイマン』と読むことができ、前述から『田原レイマン』である。第3に、『田原レイマン』なる人物は、1575年に三好長慶の配下であり、飯盛城の支城の城主である池田丹後守、三ヶマンショ、結城ジョアンといったキリシタンと行動を共にしていることから、同様の身分である『田原城主田原レイマン』である。第4に、『礼幡』が亡くなった1581年に近いことから、1574年に改宗した田原城主の何某は、『田原城主田原礼幡』である。

4. 河内のキリシタンについて

天文18年(1549)にフランシスコ・ザビエルによって日本に伝えられたキリスト教は、その後を引き継いだガスパル・ヴィレラが永禄2年(1559)に入京し広く布教されるようになる。その4年後の永禄6年(1563)に飯盛城主三好長慶が、ヴィレラやロレンソに城下での布教を許可してキリスト教

の保護を命じた。翌年の永禄7年（1564）にヴィレラは、結城左衛門尉（アンタン）の依頼によりロレンソを飯盛城に使わして2度にわたりヴィレラから70余人が洗礼を受ける。その主な人物は、三箇城主三箇伯耆守頼照（サンチョ）、若江・八尾城主池田丹後守教正（シメアン）、烏帽子形城主伊智地文大夫（パウロ）、三木判大夫（パウロ）、庄林コスメがあげられ、この改宗後間もない頃に結城弥平次（ジョルジ）が洗礼を受ける。また同年には砂の寺内（四條畷市砂）や三箇（大東市）に教会が建てられる。その後河内においては順調に布教が進み、天正5年（1577）には砂の教会では信者を収容できなくなり、結城弥平次によって岡山（四條畷市）に畿内で最も荘厳な教会が新たに建てられる。『グスマン東方伝道史』下巻によると、この頃田原にも教会が建てられている。天正9年（1581）には河内のキリシタンが最も繁栄した時期である。

このように繁栄した河内のキリシタンであったが、天正10年（1582）の本能寺の変で三箇サンチョが明智光秀側に与したため、三箇の聖堂は秀吉の攻撃によって焼かれ、天正11年（1583）には、岡山城主結城ジョアンが秀吉により他国へ移封される。このとき岡山の教会は、高山右近の尽力により取り潰しを免れて大坂城下に移築される。翌天正12年（1584）、結城ジョアンは徳川家康軍との小牧・長久手の戦いで討死する。この頃から河内キリシタンの勢力は衰退していくこととなる。

5. キリシタン墓碑出土の意義

今回のキリシタン墓碑については、前述のとおり田原城主の田原レイマンのものと考えられ、その墓碑に刻まれた天正9年（1581）はまさに河内キリシタンの最盛期であったことがわかる。おそらく田原レイマンが死去した際には千光寺の墓地内に埋葬し墓碑が立てられていたが、キリシタン禁教令が発布され弾圧が激しくなった頃に墓碑を土中に埋めたのではないかと推測する。

織田信長の入京後、飯盛城の廃城とともに田原城の役目も終わったことから、この田原レイマンが田原城最後の城主であると考えられる。

また従来、確認されているキリシタン墓碑のうち最古のものは、昭和8年に八尾市西郷墓地で発見された『IHS 天正十壬午年五月二十六日 満所 МАИТ I O』であったが、今回のキリシタン墓碑が『天正九年』銘であることから、現在国内で確認されているキリシタン墓碑の中で最古のものである。全国で天正期のキリシタン墓碑はこの2点のみである。

以上、このキリシタン墓碑については、発掘調査による考古資料とルイス・フロイスの書簡など文献史料に登場する人物（被葬者）とが一致する数少ない事例として大変貴重なものであり、日本キリシタン研究においても重要な歴史資料であるとの理由から、平成19年（2007）1月19日に大阪府指定有形文化財（歴史資料）に指定された。

（村上 始）

引用参考文献

- ・村上直次郎 訳 『異国叢書』「耶蘇會士日本通信」下巻 駿南社 昭和3年3月20日
- ・東京大学史料編纂所 『史料綜覧』巻11 安土時代之二 印刷局朝陽会 1944
- ・ルイス・デ・グスマン 『グスマン東方伝道史』下巻 新井トシ訳 養徳社 1945
- ・松田毅一 『近畿キリシタン史話』中央出版社 昭和24年6月5日
- ・松田毅一 『河内キリシタンの研究』八尾市立公民館内郷土史料刊行会 昭和32年6月1日
- ・キリシタン文化研究会編 『イエズス会本部所蔵日本人キリシタン書簡』「キリシタン研究 第6輯」昭和36年5月15日
- ・松田毅一 『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』風間書房 昭和42年1月15日
- ・村上直次郎 訳 『新異国叢書』「イエズス会日本年報」上 雄松堂出版 昭和44年5月20日
- ・村上直次郎 訳 『新異国叢書』「イエズス会日本年報」下 雄松堂出版 昭和44年11月30日
- ・竹村覚 『キリスト教遺物』「新版考古学講座」第8巻 特論<上> 雄山閣出版株式会社 昭和46年5月10日
- ・奈良県立橿原考古学研究所編 『奈良県宇陀郡榛原町大王山遺跡』榛原町教育委員会 1977年9月
- ・奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度 1981年3月
- ・松田毅一 『キリシタン時代を歩く』中央公論社 昭和56年7月25日
- ・四條畷市教育委員会編集 『四條畷市史』第一巻 昭和59年9月1日改訂
- ・四條畷市教育委員会編集 『四條畷市史』第二巻 昭和54年3月1日
- ・国史大辞典編集委員会 『国史大辞典』吉川弘文館 昭和54年3月1日

- ・財団法人京都府文化財調査研究センター 『大内城跡』京都府遺跡調査報告書3 1984年3月31日
- ・大阪城天守閣 『大阪の古城と武将』大阪城天守閣特別事業委員会 1984年10月10日
- ・堺市教育委員会 『堺市文化財調査報告書 第30集』1986年3月
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第1巻 同朋舎出版 1987年7月25日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第2巻 同朋舎出版 1987年9月25日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第3巻 同朋舎出版 1988年2月25日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第1巻 同朋舎 1997年11月20日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第2巻 同朋舎 1998年1月10日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第3巻 同朋舎 1998年4月10日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻 同朋舎 1998年5月18日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第5巻 同朋舎出版 1992年12月15日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 同朋舎出版 1994年3月31日
- ・松田毅一 監訳 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第7巻 同朋舎出版 1991年12月10日
- ・松田毅一・川崎桃太 訳 『フロイス日本史』3 中央公論社 昭和53年2月20日
- ・松田毅一・川崎桃太 訳 『フロイス日本史』4 中央公論社 昭和53年4月20日
- ・飯田市教育委員会 『文永寺石室・五輪塔修理工事』1987年3月31日
- ・磐田市教育委員会 『一の谷中世墳墓群』1988年9月
- ・長江正一 『三好長慶』吉川弘文館 平成元年5月1日
- ・津田秀夫 『図説 大阪府の歴史』河出書房新社 1990年7月10日
- ・五野井隆史 『日本キリスト教史』吉川弘文館 1990年9月1日
- ・八尾市立歴史民俗資料館 『動乱の河内』八尾市立歴史民俗資料館 平成5年10月3日
- ・丸川義広 『近世京都のキリシタン墓碑』杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究 1993年11月20日
- ・財団法人 大阪市文化財協会 『天満本願寺跡発掘調査報告書Ⅰ』1995年2月
- ・土岐市美濃陶磁歴史館 『特別展 堺衆のやきもの』土岐市美濃陶磁歴史館 平成8年2月24日
- ・久米雅雄 『「大坂城跡」出土の円形印章について—或る吉利支丹大名の遺産—』立命館大学考古学論集Ⅰ 立命館大学考古学論集刊行会 1997年12月24日
- ・吹田市立博物館 『高山右近とその時代』吹田市立博物館 平成10年4月29日
- ・丸川義広 『キリシタンと桃山文化』第109回京都市考古資料館文化財講座資料 平成10年5月23日
- ・久米雅雄 『「千提寺・下音羽の吉利支丹遺物」と崇拜の方式および信仰組織の復原』彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書(財)大阪文化財調査研究センター 1999年3月31日
- ・石井進、服部英雄 『原城発掘—西海の王土から殉教の舞台へ』(株)新人物往来社 2000年3月31日
- ・高槻市教育委員会 『高槻城キリシタン墓地』平成13年3月15日
- ・大貫隆 他 『岩波 キリスト教辞典』岩波書店 2002年6月10日
- ・千代田区 東京駅八重洲北口遺跡調査会 『東京都千代田区 東京駅八重洲北口遺跡』千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003年7月18日
- ・長崎県南有馬町教育委員会 南有馬町文化財調査報告書第3集『原城跡Ⅱ』2004年3月
- ・大石一久 『千々石ミゲルの墓石発見』(株)長崎文献社 2005年4月6日
- ・長崎県南有馬町教育委員会 南有馬町文化財調査報告書第3集『原城跡Ⅲ』2006年3月
- ・遠藤周作 芸術新潮編集部編 『遠藤周作と歩く「長崎巡礼」』2006年9月 (株)新潮社
- ・今谷明 『戦国 三好一族』洋泉社 2007年4月21日
- ・九州考古学会 『キリシタン大名の考古学』九州考古学会 夏季(大分)大会実行委員会 2007年7月21日
- ・長崎県考古学会 長崎県考古学会 2007年度大会『16・17世紀初頭におけるキリスト教の布教とキリシタン墓』2008年1月19日
- ・久米雅雄 『第七章 茨木のキリシタン遺物と歴史』「新修 茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸」2008年3月31日
- ・久米廣陵 『第七章4 京阪キリシタン墓碑の編年と歴史的環境の復元』「新修 茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸」2008年3月31日
- ・南島原市教育委員会企画 大石一久編集 南島原市世界遺産地域調査報告書『日本キリシタン墓碑総覧』(株)長崎文献社 平成24(2012)年3月30日



第 33 図 土塀移築作業の様子



第 34 図 平成 13 年 12 月 1 日 千光寺跡移築広場オープンイベント



第 35 図 千光寺跡移築広場（平成 13 年 12 月）

参考文献

- 青柳泰介 1999 「生駒市田原城跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1998 年度第 2 分冊、奈良県立橿原考古学研究所。
- 岩橋小彌太 1969 『上代食貨制度の研究』第 2 集、吉川弘文館。
- 大阪府教育委員会編 1989 『奈良街道』歴史の道調査報告第四集、大阪府教育委員会。
- 奥 和之編 1993 『森山遺跡発掘調査概要』I、大阪府教育委員会。
- 黒田 淳 1989 「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988 年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳 2013 『飯盛山城遺跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編 1992 『都城の土器集成』古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編 1993 『都城の土器集成』II、古代の土器研究会。
- 栄原永遠男 1972 「鑄銭司の変遷とその立地」『古代を考える』10 号、古代を考える会。
- 栄原永遠男 1993 『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2006 『こども歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔 2010 『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
- 四條畷市史編さん委員会編 2016 『四條畷市史』第 5 巻考古編、四條畷市。
- 實盛良彦 2013 「飯盛山城をめぐる周辺の城跡」『大阪春秋』149 号、新風書房。
- 瀬戸市史編纂委員会編 1981 『瀬戸市史』陶磁史篇二、瀬戸市。
- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013 『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店。
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- 中井 均 1981 「田原城」『日本城郭大系』第 12 巻、新人物往来社。
- 中村一紀 1972 「鑄銭司の所在地について」『書陵部紀要』24 号、宮内庁書陵部。
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
- 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査出土木簡概報』15、奈良国立文化財研究所。
- 仁藤敦史 2018 「官制からみた銭貨鑄造官司の変遷について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 210 集、国立歴史民俗博物館。
- 野島 稔・櫻井敬夫 1980 『田原遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1981 『田原城址・田原遺跡発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1986 『田原城址』VI、四條畷市教育委員会。
- 原田昌則・尾崎良史 2014 『考古資料からみる八尾の歴史』公益財団法人八尾市文化財調査研究会。
- 平尾兵吾 1931 『北河内郡史蹟史話』北河内郡教育会。
- 宮崎泰史・藤永正明編 2006 『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 村上 始 1999 『寺口遺跡発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001 『八ノ坪遺跡・田原城跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2012 「天正九年銘『礼幡墓碑』」『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2011 『清滝街道発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編 2013 『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2017 『上清滝遺跡・清滝街道発掘調査報告書』四條畷市教育委員会。
- 山口 博編 1972 『四條畷市史』第 1 巻、四條畷市役所。
- 山口 博 1979 『四條畷市史』第 2 巻、四條畷市役所。
- 山口 博 1990 『四條畷市史』第 4 巻、四條畷市役所。
- 山下秀樹・吉川聡 2017 「生駒長福寺本堂と木札の調査」『木簡研究』第 39 号、木簡学会。
- 吉川真司 2020 「古代交野郡再考」『枚方市史年報』枚方市教育委員会文化財課市史資料室。
- 李 聖子編 2020 『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査年次	種別・器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土もしくは材質	焼成・色調	年代・備考
1	18	巻頭 2-2	TG1994-1	国産陶器 水注	3号墓 1号土坑	口径5.8cm、 胴部径12.6cm、 器高16.6cm、 厚0.6cm	肩部を中心に薄緑色の釉薬	密	(焼成)良 (色調)釉:薄緑色	市指定有形文化財 古瀬戸前期 13世紀前半
2	18	巻頭 2-2	TG1994-1	国産陶器 水注	3号墓 2号土坑	口径5.0cm、 胴部径12.6cm、 器高17.3cm、 厚0.6cm	外面に薄緑色の釉薬 全体に粘土粒様のもの付着	密	(焼成)良 (色調)釉:薄緑色 外:淡黄色 断:灰白色	市指定有形文化財 古瀬戸前期 13世紀後半
3	18	巻頭 2-2	TG1994-1	輸入磁器 青白磁脚付小壺	3号墓	器高4.6cm、 最大幅6.4cm、 厚0.2~0.4cm	釉には黒色粒子が混じる	密	(焼成)良 (色調)釉:青白色 断:灰白色	市指定有形文化財 13世紀~14世紀中頃
4	18	12-1	TG1994-1	須恵質土器 鉢	3号墓 1号土坑	口径26.8cm、 底径7.4cm、 高11.4cm、 厚0.5~1.0cm	底部へラギリ未調整 内面下半使用痕	やや密 小石を含む	(焼成)良好 (色調)内外:灰色 口縁外:暗灰色	東播磨系 12世紀末~13世紀中葉
5	18	12-2	TG1994-1	須恵質土器 鉢	3号墓 1号土坑	口径28.9cm、 器高9.9cm、 厚0.7~1.4cm	底部回転糸切 内面下半使用痕	やや密 小石を含む	(焼成)良好 (色調)内外:灰色 口縁外:暗灰色	市指定有形文化財 東播磨系 12世紀末~13世紀中葉
6	18	12-2	TG1994-1	須恵質土器 壺	3号墓 2号土坑	口径26.8cm、 残存高22.1cm、 厚0.6~1.1cm	外面胴部タタキ 内面胴部タタキのちナデ	密	(焼成)不良 (色調)明褐色	東播磨系 12世紀末~13世紀中葉 底部保存状態悪く復元不能
7	18	12-2	TG1994-1	須恵器 壺	3号墓 1号土坑	口径26.5cm、 器高37.8cm、 厚0.6~1.0cm	外面口縁部ヨコナデ、頸部 タタキ、胴部鏝杉状タタキ 内面口縁部~頸部ヨコナ デ、胴部タタキのちナデ	密	(焼成)良好 (色調)暗灰色	市指定有形文化財 東播磨系 12世紀末~13世紀中葉 底部に穿孔
8	18	12-1	TG1994-1	国産陶器 鉄釉小碗	9号墓	口径7.1cm、 底径2.9cm、 高5.1cm、 厚0.2~0.9cm	内面および外面上半に鉄 釉 外面下半と高台は露胎	密	(焼成)良 (色調)外:黒色 断:灰色	肥前陶器 1630年~17世紀後半
9	18	12-1	TG1994-1	一石五輪塔 空風輪	13号墓	幅7.9cm、 残存高11.1cm	敲打成形	(石材)花崗岩	灰白色	—
10	18	12-1	TG1994-1	土師質土器 蓋付火鉢	7号墓	(蓋)直径16.2cm、 厚1.0cm (身)口径16.4cm、 最大径22.8cm、 器高14.6cm、 厚0.9cm	蓋上部に線刻有 体部外面ミガキ 体部内面ナデ 内面上部に炭化物付着 高台接合部ナデ	金雲母を 多く含む	(焼成)良 (色調)明褐色	16世紀後半~17世紀代
11	18	12-1	TG1994-1	国産陶器 壺	10号墓	口径13.3cm、 最大径34.4cm、 残存高20.0cm、 厚0.9cm	頸部と肩部に2条ずつの 沈線文	長石を 多量に含む	(焼成)良好 (色調)外:明褐色 内:断:灰白色	信楽 12の口縁部~胴部 16世紀代
12	18	12-1	TG1994-1	国産陶器 壺	10号墓	残存高5.0cm、 厚0.8cm	—	長石を 多量に含む	(焼成)良好 (色調)外:明褐色 内:断:灰白色	信楽 11の底部 16世紀代
13	18	12-2	TG1994-1	国産陶器 大甕	6号墓	口径50.3cm、 器高62.3cm、 厚1.0~1.4cm	—	—	—	市指定有形文化財 常滑 12世紀末~13世紀前葉
14	19	12-1	TG1994-1	瓦質土器 大甕	土坑100	口径71.0cm、 器高79.1cm、 厚0.5~1.1cm	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ナデ	やや粗 金雲母、 赤色・白色粒子、 長石を多く含む	(焼成)良 (色調)内外:暗灰 褐色、断:黄褐色	—
15	19	13-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁香炉	土坑100 掘形	口径12.9cm、 残存高1.6cm、 厚0.6cm	外面口縁下に沈線一条	密	(焼成)良好 (色調)釉:明緑色 断:灰白色	龍泉窯系 14世紀代
16	19	13-1	TG1994-1	国産陶器 碗	土坑100 甕(14)内	底径3.2cm、 残存高4.0cm、 厚0.3~0.7cm	削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)釉:にぶい緑 色	肥前陶器 胎土目 1580~1610年
17	19	13-1	TG1994-1	須恵器 壺	落込B	底径7.0cm、 残存高5.0cm、 厚1.0cm	外面回転ナデ	密	(焼成)良好 (色調)灰色	古代
18	19	13-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁盤	落込B 下層	底径16.2cm、 残存高3.3cm、 厚1.1cm	体部内面に沈線 高台タタキ部は釉ハギ後鉄 分塗布	密	(焼成)良 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯系 漆接ぎ力 14世紀代
19	19	13-1	TG1994-1	国産陶器 皿	土坑101	底径5.8cm、 残存高2.3cm、 厚1.1cm	削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)釉:黄灰色 露胎部:淡黄褐色	肥前陶器 砂目 1610~1630年
20	19	13-1	TG1994-1	国産陶器 皿	土坑101	底径7.0cm、 残存高4.0cm、 厚0.4~1.6cm	削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)釉:淡緑灰色 露胎部:明褐色	肥前陶器 胎土目 1580~1610年
21	19	-	TG1994-1	土師質土器 壺	土坑101	口径21.4cm、 残存高3.4cm、 厚0.4~0.9cm	外面ナデ、内面ヨコナデ 口縁部煤付着	密 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)赤褐色	16世紀中~後葉
22	19	13-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁碗	溝4	底径5.6cm、 残存高2.4cm、 厚1.4cm	見込みに花文刻印	密	(焼成)良好 (色調)釉:明緑灰色 断:明赤灰色	14世紀末~15世紀代
23	19	13-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁盤	溝4	口径24.2cm、 底径12.0cm、 高6.3cm、 厚1.0cm	内面蓮弁文 釉厚0.1cm	緻密	(焼成)良 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯系 14~15世紀代
24	19	13-1	TG1994-1	国産陶器 灰釉皿	溝4	口径43.2cm、 残存高8.2cm、 厚0.8cm	釉薬に剥離あり	密	(焼成)良好 (色調)釉:黄緑色 断:灰白色	瀬戸 14~15世紀代
25	19	13-1	TG1994-1	瓦質土器 播鉢	溝101	口径31.0cm、 残存高6.0cm、 厚0.8cm	口縁部ヨコナデ 外面指圧調整後ヨコナデ 内面ヨコナデ	やや粗 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)内:灰色 外:白色	播目7条/単位
26	19	13-1	TG1994-1	瓦質土器 鉢	落込B 下層	口径27.4cm、 底径10.4cm、 高9.3cm、 厚0.8cm	外面横方向板ナデ、 口縁部ヨコナデ、 内面ナデ	粗 砂粒を含む	(焼成)やや良好 (色調)灰褐色	—
27	19	13-1	TG1994-1	瓦質 土管	溝4	長30.3cm(残存)、 幅13.1cm、 厚2.0cm	(凹面)コピキム、 布目痕 (凸面)ナデ、指紋	やや粗 小石、砂粒 を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	—
28	19	13-1	TG1994-1	瓦質 四足歌壇	落込B	20.0cm×12.2cm 高4.4cm(残存)	表面:獣像貼付後ナデの ち周囲に菊花スタンプ文 裏面:やや粗いヘラナデ	やや粗 小石・砂粒 を含む	(焼成)不良 (色調)橙色	菊花文 拍犬の台座
29	19	13-2	TG1994-1	打製石器 石匙	包含層 墓地西側斜面	5.3×3.1cm 厚0.8cm	打製	(石材) サヌカイト	灰色	縄文時代
30	19	13-2	TG1994-1	石製硯	溝4	長11.5cm、 幅5.6cm、 厚1.9cm	周縁に墨痕	—	暗灰色	—
31	19	13-2	TG1994-1	石製硯	包含層 墓地東側斜面	長14.8cm、 幅8.1cm、 厚2.5cm	—	(石材) 高島石	暗灰色	(表面線刻)三月十日ヨリ ミツノハリヨリツカヨリ口
32	19	13-2	TG1994-1	砥石	溝3	5.8cm×3.9cm(残存) 厚1.5cm(残存)	擦痕あり	—	黄灰色	—
33	19	巻頭 2-3	TG1994-1	青銅製 懸仏	溝3	高7.2cm、 幅6.1cm、 厚0.4cm	鑄造	青銅製	緑灰色	六本腕 結跏趺坐像 蓮華座 明王もしくは菩薩 平安時代後期
34	19	13-2	TG1994-1	石製茶臼	落込B 下層	16.4cm×14.0cm(残存) 高8.1cm(残存)	—	(石材) 砂岩製 (和泉付近)	灰色	—

遺物番号	挿入番号	図版番号	調査年次	種別・器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土もしくは材質	焼成・色調	年代・備考
35	19	13-2	TG1994-1	石製茶臼	包含層 トレンチ4	12.5cm×4.9cm(残存) 厚3.0cm(残存)	—	(石材) 砂岩製 (和泉付近)	黄灰白色	—
36	19	巻頭 2-3	TG1994-1	銅銭 寛永通宝	9号墓	径2.3cm、 厚0.2cm	鑄造	青銅製	緑灰色	2枚錆着 新寛永(1668~)
37	19	巻頭 2-3	TG1994-1	銅銭 寛永通宝	9号墓	径2.4cm、 厚0.4cm	鑄造	青銅製	緑灰色	3枚錆着 古寛永(1636~1668)
38	19	巻頭 2-3	TG1994-1	銅銭 寛永通宝	9号墓	径2.4cm、 厚0.1cm	鑄造	青銅製	緑灰色	新寛永(1668~)
39	19	巻頭 2-3	TG1994-1	銅銭 元祐通宝	包含層 土塀南側斜面	径2.4cm、 厚0.1cm	鑄造	青銅製	緑灰色	北宋銭 1086年初鑄
40	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	落込A 上層 瓦溜り	口径7.0cm、 高1.0cm、 厚0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
41	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 トレンチ5 墓地	口径6.6cm、 高1.1cm、 厚0.35cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 内面見込ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
42	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地東側斜面	口径6.7cm、 高1.1cm、 厚0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
43	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径6.8cm、 高1.1cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ 内面見込ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
44	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径7.5cm、 高1.4cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ 内面見込ナデ	密	(焼成)良 (色調)褐色	
45	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺跡西側斜面	口径7.8cm、 高1.7cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ 内面見込ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
46	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺跡西側斜面	口径7.8cm、 高1.5cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
47	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径8.2cm、 高1.9cm、 厚0.35cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
48	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径9.2cm、 高1.7cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
49	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺東端トレンチ	口径7.4cm、 高1.1cm、 厚0.25cm	底部外面ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)褐色	
50	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺跡西側斜面	口径8.9cm、 高1.4cm、 厚0.3cm	内面口縁部ヨコナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
51	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺跡西側斜面	口径8.6cm、 高1.3cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
52	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径8.8cm、 高1.4cm、 厚0.25cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
53	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 墓道部西端南北セ クシヨシ西側	口径9.2cm、 高1.55cm、 厚0.3cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
54	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地東側斜面	口径8.4cm、 高1.9cm、 厚0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
55	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 寺跡	口径11.0cm、 高2.3cm、 厚0.2~0.5cm	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底部 ユビオサエ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	口縁部煤付着 灯明皿
56	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 土塀斜面	口径7.6cm、 高1.4cm、 厚0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
57	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 35号墓西側	口径7.6cm、 高1.4cm、 厚0.5cm	内面口縁部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底部 ユビオサエ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
58	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 墓地	口径7.5cm、 高1.8cm、 厚0.5cm	内面ヨコナデ 外面ナデのち口縁部ヨコナ デ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
59	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	落込A	口径8.3cm、 高1.9cm、 厚0.4cm	内外面ともナデのち口 縁部ヨコナデ	密	(焼成)良 (色調)暗褐色	内外面とも煤付着 灯明皿
60	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地	口径9.8cm、 高2.0cm、 厚0.5cm	内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、底部 ユビオサエのちナデ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)褐色	
61	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	35号墓 下層・西側石垣内	口径10.3cm、 高2.1cm、 厚0.6cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)褐色	
62	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地中央	口径10.4cm、 高2.1cm、 厚0.5cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
63	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地	口径10.6cm、 高2.2cm、 厚0.6cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
64	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 墓地東側斜面	口径10.3cm、 高2.4cm、 厚0.3~0.7cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
65	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 旧墓地中央~西	口径11.3cm、 高2.45cm、 厚0.65cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	
66	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 35号墓西側	口径12.0cm、 高2.6cm、 厚0.4cm	内面ナデのち口縁部 ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ	密 砂粒を含む	(焼成)良 (色調)明褐色	
67	20	14-1	TG1994-1	土師質土器 皿	包含層 26号墓西側	口径11.3cm、 高1.7cm、 厚0.4cm	口縁部内外面ヨコナデ 底部外面ユビオサエ 底部内面ナデ	密	(焼成)良 (色調)明褐色	内外面とも煤付着 灯明皿
68	20	14-2	TG1994-1	土師質土器 羽釜	包含層 調査地区最南端	口径15.1cm、 最大径18.2cm、 残存高6.4cm、 厚0.6cm	口縁部外面ナデ 口縁部内面ヨコナデ 内面指頭圧痕	緻密 黒色砂粒 を含む	(焼成)良好 (色調)明褐色	16世紀代
69	20	-	TG1994-1	土師質土器 羽釜	包含層 寺跡西側斜面	口径15.8cm、 残存高5.4cm、 厚0.3~0.5cm	内外面とも丁寧なナデ 内面一部と外面口縁部の 一部に煤付着	密 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)明褐色	16世紀末~17世紀初頭
70	20	14-2	TG1994-1	土師質土器 羽釜	包含層 土塀南側斜面	口径15.0cm、 残存高6.9cm、 厚0.4cm	内外面とも指圧調整後 ナデ	緻密 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)明褐色	
71	20	15-1	TG1994-1	土師質土器 羽釜	包含層 寺跡西側斜面	口径21.0cm、 残存高13.1cm、 厚0.5cm	外面口縁部ヨコナデ、胴部 ナデ 内面指圧調整	やや密 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)明褐色	16世紀中~後葉
72	20	15-1	TG1994-1	土師質土器 羽釜	包含層 寺跡北東隅	最大径23.8cm、 残存高11.1cm、 厚0.3cm	内外面ともナデ 外面胴部煤付着 内面底部一部コゲツキ	密	(焼成)良好 (色調)明褐色	16世紀中~後葉

遺物番号	挿入番号	図版番号	調査年次	種別・器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土もしくは材質	焼成・色調	年代・備考
73	20	14-2	TG1994-1	瓦質土器 風炉	包含層 寺跡 トレンチ4	5.8cm×5.4cm(残存) 厚2.6cm		密	(焼成)良好 (色調)明褐色	15世紀前半
74	20	14-2	TG1994-1	瓦質土器 風炉	包含層 土塀南側斜面	18.6cm×8.5cm(残存) 厚1.6cm	内面ヨコナデ	密	(焼成)良好 (色調)暗灰色	15世紀前半
75	20	14-2	TG1994-1	瓦質土器 鉢	包含層 寺跡 北側トレンチ	口径23.0cm、 残存高9.2cm、 厚1.0cm	ナデ	密	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
76	20	14-2	TG1994-1	瓦質土器 墓地	包含層 墓地	口径16.8cm、 底径16.0cm、 高18.3cm、 厚1.0cm	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ナデ、内面ロクロ 目一指頭圧痕 底部輪状ナデ	雲母を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
77	20	14-2	TG1994-1	須恵器 坏	包含層 墓地西側斜面	口径13.0cm、 底径10.0cm、 高4.3cm、 厚0.4cm	内外面回転ナデ 削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)灰色	8世紀後半
78	20	15-2	TG1994-1	瓦質土器 火燈臺	包含層 落込A上層	頸部径3.1cm、 残存径12.4cm、 残存高6.9cm、 厚1.0cm	内外面ナデ	密 金雲母を含む	(焼成)良好 (色調)赤褐色	孔周辺内面に煤付着 16世紀前半カ
79	20	15-2	TG1994-1	瓦質土器 灯籠	包含層 溝3西側斜面	最大径24.2cm、 残存高18.3cm、 厚0.6cm	内外面ナデ 鐫部ヨコナデ	密	(焼成)良好 (色調)暗灰色	—
80	21	15-2	TG1994-1	国産陶器 播鉢	包含層 落込A上層	口径27.4cm、 底径11.8cm、 高13.7cm、 厚0.9cm	内外面ロクロナデ	密	(焼成)良好 (色調)紫灰色	備前 16世紀前半 播目10条/単位
81	21	15-2	TG1994-1	国産陶器 播鉢	包含層 墓地 トレンチ5	口径31.6cm、 底径16.8cm、 高13.5cm、 厚1.3cm	口縁部接合ナデつけ後ヨ コナデ 内外面ロクロナデ	密	(焼成)良好 (色調)赤褐色	17世紀中頃～18世紀代 播目12条/単位
82	21	15-2	TG1994-1	瓦質 四足歌壇	包含層 土塀南側斜面	15.5cm×12.0cm(残存) 高3.9cm(残存)	表面:ナデのち周囲に線 刻、その内側に菊花スタン プ文を施したのち歌壇を取 付	やや粗 小石・砂粒 を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	菊花文 拍犬の台座
83	21	16-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁碗	包含層 3号墓付近	口径19.2cm、 残存高5.2cm、 厚0.5cm	内外面とも貫入 釉厚0.05cm	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:緑灰色 断:灰白色	13～14世紀代
84	21	16-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁鍍文酒会壺蓋	包含層 土塀南側斜面	最大径24.2cm、 残存高5.9cm、 厚1.2cm	鐫部下部無釉	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯製 13～14世紀代
85	21	巻頭 2-2	TG1994-1	輸入磁器 青磁袴腰香炉	包含層 墓地(図9-85)	口径13.7cm、 最大径14.4cm、 器高11.0cm、 厚0.7cm	釉は厚く微細気泡あり 脚端部無釉、施釉との境 赤褐色	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯製 13世紀末～14世紀代
86	21	巻頭 2-4	TG1994-1	輸入磁器 白磁皿	包含層 土塀石列北側	口径11.6cm、 底径6.7cm、 高3.5cm、 厚0.4～0.8cm	釉厚0.1cm 高台付近にもみから付着カ	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:白色 断:白色	福建産カ 16世紀後半～17世紀初頭
87	21	16-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁端反碗	包含層 土塀石列西端 石の下部	口径16.8cm、 残存高3.6cm、 厚0.4cm	—	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯系 14世紀後半～15世紀中葉
88	21	16-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁端反碗	包含層 土塀南側斜面	口径20.5cm、 残存高4.2cm、 厚0.45cm	内外面とも貫入	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:淡緑色 断:灰白色	龍泉窯系 14世紀後半～15世紀中葉
89	21	16-1	TG1994-1	輸入磁器 青磁盤	包含層 寺跡	口径24.4cm、 残存高2.7cm、 厚0.7cm	外面体部に文様 釉厚0.1cm	緻密	(焼成)良好 (色調)釉:暗緑色 断:灰白色	龍泉窯系 14～15世紀代
90	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 梅瓶	包含層 寺跡	頸部径4.2cm、 残存高4.0cm、 厚1.0cm	釉の一部乳青白色 釉の一部剥離	密	(焼成)良好 (色調)釉:緑灰色 断:灰黄色	瀬戸 14世紀前半
91	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 鉄釉天目碗	包含層 墓道部	口径11.6cm、 高5.0cm、 厚0.6cm		密	(焼成)良好 (色調)釉:茶色 露胎部:赤褐色 断:浅黄褐色	瀬戸・美濃系 16世紀初頭～前半
92	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 灰釉丸皿	包含層 寺跡	口径10.9cm、 底径6.0cm、 高2.0cm、 厚0.8cm	外面ヘラケズリ 内面見込み露胎	やや粗	(焼成)良 (色調)釉:淡黄色 断:灰色	瀬戸・美濃系 黄色釉 16世紀後半～17世紀初頭
93	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 灰釉碗	包含層 寺跡	口径10.6cm、 底径5.0cm、 高7.0cm、 厚0.4cm	高台部露胎	密	(焼成)良 (色調)釉:薄緑色 断:灰色	瀬戸・美濃系 17世紀
94	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 皿	包含層 寺跡	底径3.9cm、 残存高2.1cm、 厚0.4～1.0cm	削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)釉:にぶい緑 色	肥前陶器 胎土目 1580～1610年
95	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 皿	包含層 寺跡	底径5.1cm、 残存高1.5cm、 厚1.5cm	削り出し高台	密 小石含む	(焼成)良好 (色調)釉:灰白色 断:浅黄褐色	肥前陶器 砂目 1600～1630年
96	21	16-1	TG1994-1	国産陶器	包含層 寺跡	底径5.0cm、 残存高2.6cm、 厚1.0cm	削り出し高台	密	(焼成)良好 (色調)釉:にぶい緑 色	肥前陶器 1590～1630年
97	21	16-1	TG1994-1	国産磁器 青磁	包含層 寺跡 北側トレンチ	口径5.3cm、 残存高3.2cm、 厚0.9cm	高台置付部釉ケズリ取り	密	(焼成)良好 (色調)釉:明緑色 断:白色	肥前磁器 1630年代
98	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 天目碗	包含層 寺跡	口径11.9cm、 残存高4.3cm、 厚0.3～0.6cm		密	(焼成)良好 (色調)釉:黒色 露胎部:赤褐色	肥前陶器 1590～1630年
99	21	16-1	TG1994-1	国産陶器 碗	包含層 寺跡 北側トレンチ	口径11.1cm、 残存高5.6cm、 厚0.6cm		密	(焼成)良好 (色調)釉:黒色 露胎部:浅黄褐色	肥前陶器 1590～1630年
100	21	16-1	TG1994-1	国産磁器 染付碗	包含層 寺跡	口径9.6cm、 底径4.0cm、 高5.3cm、 厚0.4～1.0cm	草花文 高台置付部釉ケズリ取り	密	(焼成)良好 (色調)灰色	肥前磁器 18世紀前半
101	22	巻頭 2-5	TG1994-1	五輪塔 地輪	23号墓 (図7-101)	長22.5cm、 幅22.8cm 高16.0cm			(色調)灰白色	(銘)永正十三年子 妙祐禪定尼 四月廿三日
102	22	-	TG1994-1	五輪塔 地輪	35号墓 (図10-102)	長32.8cm、 幅31.8cm 高16.2cm				(銘)寛永十年八月十八日 地光雲蓋(石)禪定門 施主 田原源右衛門忠(守) (現月泉寺墓地保存)
103	22	-	TG1994-1	五輪塔 地輪	22号墓 (図7-103)	長25.0cm、 幅24.0cm 高16.0cm				(銘)妙音 (現月泉寺墓地保存)
104	23	巻頭 2-1	TG2001-1	キリシタン墓碑	土坑 (図17-104)	長43.5cm、 幅26cm、 上部厚8cm、 基底部厚13cm、 突起長4.5cm、 重24.7kg		(石材) 片麻状柘榴石 黒雲母花崗岩		大阪府指定(歴史資料) (銘)天正九年辛巳 礼禱 八月七日

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査年次	種別器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土	焼成・色調	備考
瓦1	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込B	瓦当厚1.5cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) やや良(軟質) (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦2	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込B	長7.8cm(残存)、幅11.9cm、 厚2.7cm、瓦当径11.7cm、 瓦当厚1.1cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦3	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込B	瓦当径12.9cm、瓦当厚1.6cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) やや良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦4	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込B	長33.1cm、幅12.3cm、 厚2.1cm、瓦当厚1.6cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦5	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	溝101	長12.3cm(残存)、幅13.6cm、 厚3.1cm、瓦当厚1.5cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸C類 III群 16世紀前半～中頃
瓦6	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	溝3	長4.0cm(残存)、 瓦当厚2.1cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) やや良好(軟質) (色調) 暗灰色	軒丸D類 I群 14世紀
瓦7	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	溝3	長4.6cm(残存)、 瓦当径15.3cm、瓦当厚2.5cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸F類 III群 16世紀前半～中頃
瓦8	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	土坑100 掘形	瓦当厚1.5cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸C類 III群 16世紀前半～中頃
瓦9	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	土坑100 壁(14)内	長26.7cm、幅13.2cm、 厚2.8cm、瓦当径12cm、 瓦当厚1.5cm	(凹面) 布目痕、抜き紐痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦10	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込A 下層	長7.5cm(残存)、 瓦当径14.0cm、瓦当厚2.0cm	(凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸D類 I群 14世紀
瓦11	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	落込A	長16.3cm(残存)、幅11.6cm、 厚2.3cm、瓦当厚2.0cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸E類 II群 15世紀 凸面に焼成前線刻 「ササルカ」
瓦12	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 土塙南側斜面	長7.4cm(残存)、厚3.1cm、 瓦当径14.2cm、瓦当厚2.0cm	(凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) やや不良(軟質) (色調) 暗灰色	軒丸D類 I群 14世紀
瓦13	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 土塙南側斜面	長14.2cm(残存)、幅16.9cm、 厚3cm、瓦当径16.4cm(復元)、 瓦当厚2.5cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸B類 III群 16世紀前半～中頃
瓦14	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 土塙南側斜面	長34.9cm、幅14.2cm、 厚2.8cm、瓦当径13.8cm、 瓦当厚1.4cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 砂粒	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸C類 III群 16世紀前半～中頃
瓦15	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 土塙南側斜面	長33.8cm、幅13.6cm、 厚2.1cm、瓦当径12.4cm、 瓦当厚2.1cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦16	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長33.3cm、幅13.8cm、 厚2.6cm、瓦当径14.9cm、 瓦当厚2.5cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸F類 III群 16世紀前半～中頃
瓦17	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長12.4cm(残存)、幅13.8cm、 厚2.5cm、瓦当厚1.3cm	(凹面) 布目痕、コビキA (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸A類 I群 14世紀
瓦18	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長15.5cm(残存)、幅14.3cm、 厚2.7cm、瓦当厚1.3cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 軟質 (色調) 明褐色	軒丸C類 III群 16世紀前半～中頃
瓦19	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長15.9cm(残存)、幅12.7cm、 厚2.6cm、瓦当径12.3cm、 瓦当厚1.6cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦20	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長30.4cm(残存)、幅13.5cm、 厚2.5cm、瓦当厚1.6cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒丸A類 I群 14世紀
瓦21	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 落込A上層瓦溜り	長32.9cm、幅12.7cm、 厚2.3cm、瓦当径12cm、 瓦当厚1.6cm	(凹面) コビキA、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦22	25	17-1	TG1994-1	軒丸瓦	包含層 落込AB間断面内	長30.8cm、幅11.6cm、 厚3.2cm、瓦当径12.0cm、 瓦当厚1.7cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦23	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長19.1cm(残存)、幅15.7cm、 厚1.8cm	(凹面) 布目痕、コビキA (凸面) ヘラナデ、タタキ痕	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	菊花文 丸瓦
瓦24	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	落込B 下層	長4.7cm(残存)、 幅4.4cm(残存)、厚1.9cm		やや粗 小石を含む	(焼成) 不良 (色調) 明褐色	菊花文 平瓦
瓦25	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	落込B	長11.1cm(残存)、 幅9.3cm(残存)、厚2.1cm	(凹面) ナデ、布目痕 (凸面) ヘラナデ	密	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	菊花文×3 平瓦
瓦26	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長11.7cm(残存)、 幅12.2cm(残存)、厚1.8cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	花文 平瓦
瓦27	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長7.5cm(残存)、 幅6.4cm(残存)、厚1.7cm		やや粗	(焼成) 不良 (色調) 灰褐色	花文 平瓦
瓦28	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長16.2cm(残存)、幅15.4cm、 厚2.9cm	(凹面) 布目痕 (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	四つ菱文(小) 丸瓦
瓦29	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	落込B	長9.0cm(残存)、 幅7.5cm(残存)、厚1.8cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	四つ菱文(大) 平瓦
瓦30	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 土塙石列南側斜面	長14.5cm(残存)、 幅15.7cm(残存)、厚2.0cm	(側面) ナデ (凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	菱文 平瓦
瓦31	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 基壇部南側斜面	長5.5cm(残存)、 幅4.0cm(残存)、厚1.8cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良 (色調) 黒色	三つ鱗文 平瓦
瓦32	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 土塙石列南側斜面	長15.0cm(残存)、 幅9.6cm(残存)、厚2.1cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	丸文 平瓦
瓦33	26	16-2	TG1994-1	刻印瓦	包含層 旧墓地西側斜面	長6.0cm(残存)、 幅5.5cm(残存)、厚2.7cm		粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良 (色調) 黒色	渦巻文 平瓦
瓦34	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	落込B	長15.2cm(残存)、 幅22.5cm(残存)、厚2.4cm、 瓦当高4.3cm、瓦当厚2.0cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色 (やや黄色味)	軒平1類 I群 14世紀
瓦35	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	落込B	長19.7cm(残存)、 幅24.0cm(残存)、厚2.0cm、 瓦当高4.6cm、瓦当厚2.6cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒平8類 III群 16世紀前半～中頃
瓦36	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	土塙出入口北 溝	長8.9cm(残存)、 幅13.7cm(残存)、厚2.7cm、 瓦当高4.3cm、瓦当厚1.7cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平7類 III群 16世紀前半～中頃
瓦37	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	溝101	長27.9cm、幅20.2cm、 厚2.2cm、瓦当厚1.9cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦38	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	瓦積壇	長12.3cm(残存)、幅25.0cm、 厚1.8cm、瓦当厚2.3cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平8類 III群 16世紀前半～中頃
瓦39	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長8.0cm(残存)、厚1.9cm、 瓦当高3.9cm、瓦当厚1.6cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒平2類 III群 16世紀前半～中頃 瓦53と接合
瓦40	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長2.5cm(残存)、 瓦当高4.4cm、瓦当厚1.7cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 暗灰色	軒平1類 I群 14世紀
瓦41	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長7.0cm(残存)、厚2.6cm、 瓦当高5.0cm、瓦当厚2.0cm	(凹面) ナデ、布目痕 (凸面) ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平5類 III群 16世紀前半～中頃
瓦42	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長5.9cm(残存)、厚2.0cm、 瓦当高3.7cm、瓦当厚2.5cm	(凹面) ナデ、一部布目痕 (凸面) ヘラナデ	密 小石を含む	(焼成) 良好(軟質) (色調) 瓦当部: 暗灰色 平瓦部: 灰黄色	軒平3類 II群 15世紀
瓦43	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長13.7cm(残存)、厚2.2cm、 瓦当高3.2cm、瓦当厚2.2cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 砂粒多	(焼成) 良好 (色調) 灰青色	軒平3類 II群 15世紀
瓦44	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 7号墓下層瓦溜り	長23cm(残存)、 幅10.2cm(残存)、厚2.7cm、 瓦当高4.3cm、瓦当厚1.8cm	(凹面) ナデ (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平1類 I群 14世紀
瓦45	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 落込A上層瓦溜り	長4.8cm(残存)、厚2.5cm、 瓦当高4.4cm、瓦当厚2.2cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好(やや軟質) (色調) 凹面: 灰黄色 凸面: 灰色	軒平6類 III群 16世紀前半～中頃
瓦46	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包含層 落込A上層瓦溜り	長14cm(残存)、厚2.6cm、 瓦当高4.9cm、瓦当厚2.1cm	(凹面) ナデ、布目痕 (凸面) ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成) 良好 (色調) 灰色	軒平1類 I群 14世紀

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査年次	種別器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土	焼成・色調	備考
瓦47	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長26.8cm(残存)、幅23.1cm、 厚2.5cm、瓦当高4.6cm、 瓦当厚2.1cm	(凹面)ナデ、一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平1類 I群 14世紀
瓦48	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 寺跡南側東端 南北トレンチ	長8.1cm(残存)、厚1.9cm、 瓦当高3.7cm、瓦当厚2.3cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦49	27	17-2	TG1994-1	軒平隅瓦	包舎層 寺跡南側東端 南北トレンチ	長12.5cm(残存)、厚2.5cm、 瓦当厚1.5cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	軒平5類 III群 16世紀前半～中頃
瓦50	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 寺跡北東端	長5.5cm(残存)、厚2.4cm、 瓦当高4.3cm、瓦当厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)凹面:白色 凸面:灰色	軒平6類 III群 16世紀前半～中頃
瓦51	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 寺跡南端	長16.3cm(残存)、幅21.1cm、 厚2.4cm、瓦当高3.7cm、 瓦当厚2.2cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦52	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長2.7cm(残存)、 瓦当高3.7cm、 瓦当厚1.9cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	軒平2類 III群 16世紀前半～中頃
瓦53	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 石列南側下段	長14.7cm(残存)、幅1.8cm、 瓦当高4.0cm(復元)、 瓦当厚1.7cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	軒平2類 III群 16世紀前半～中頃 瓦39と接合
瓦54	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 墓道部北側斜面	長8.6cm(残存)、厚2.0cm、 瓦当高3.8cm、瓦当厚1.8cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	軒平2類 III群 16世紀前半～中頃
瓦55	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長3.1cm(残存)、 瓦当高3.5cm、瓦当厚2.2cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦56	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長18.4cm(残存)、厚2.3cm、 瓦当高4.5cm、瓦当厚2.0cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平9類 III群 16世紀前半～中頃
瓦57	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長2.5cm(残存)、瓦当厚2.0cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)暗灰色	軒平1類 I群 14世紀
瓦58	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長10.0cm(残存)、厚3.2cm、 瓦当高4.8cm、瓦当厚2.3cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	小石、砂粒を含む	(焼成)不良 (色調)灰色、灰白色	軒平5類 III群 16世紀前半～中頃
瓦59	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 墓道部北側斜面	長28.6cm、幅20.4cm、 厚1.9cm、瓦当高3.7cm、 瓦当厚1.9cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦60	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長28.7cm、幅19.7～21.0cm、 厚2.1cm、瓦当高4.0cm、 瓦当厚1.8cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦61	27	17-2	TG1994-1	軒平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長26.9cm、幅19.8cm、 厚1.9cm、瓦当高4.1cm、 瓦当厚2.0cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒平3類 II群 15世紀
瓦62	28	18-1	TG1994-1	鳥伏間瓦	包舎層 旧墓地東側斜面	長15.5cm(残存)、幅11.9cm、 厚1.7cm、瓦当高10.7cm(残存)、 瓦当厚1.4cm	(凹面)布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)不良 (色調)暗灰、黄灰色	軒丸G類
瓦63	28	18-1	TG1994-1	鳥伏間瓦	包舎層 X=-142.025 Y=-27.700	長10.4cm(残存)、厚2.0cm、 瓦当高13.7cm、瓦当厚1.4cm	(凹面)コビキA、布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦64	28	18-1	TG1994-1	鳥伏間瓦	落込B	長10.4cm(残存)、幅13.0cm、 厚3.3cm、 瓦当高12.9cm(残存)、 瓦当厚1.2cm	(凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや良好(軟質) (色調)暗灰色	軒丸E類 II群 15世紀
瓦65	28	18-1	TG1994-1	鳥伏間瓦	溝3	長7.9cm(残存)、 瓦当高18.2cm、瓦当厚2.0cm		やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)不良 (色調)暗灰、黄色	軒丸D類 I群 14世紀
瓦66	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	包舎層 旧墓地東側斜面	長29.6cm、幅13.1cm、 厚2.1～2.8cm	(凹面)抜き紐痕、布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦67	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	落込B 下層	長30.5cm、幅13.1cm、 厚2.1～2.5cm	(凹面)布目痕 (凸面)ヘラナデ	密 小石を含む	(焼成)良好 (色調)灰、灰黄色	
瓦68	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	包舎層 墓道部北側斜面	長30.5cm、幅13.0cm、 厚1.5cm	(凹面)布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦69	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	包舎層 7号墓下層瓦溜り	長32.3cm、幅13.9～15.0cm、 厚3.3cm	(凹面)抜き紐痕、 布目痕、ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良(硬い) (色調)黄橙、灰色	
瓦70	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	包舎層 7号墓下層瓦溜り	長33.0cm、幅13.7cm、 厚1.9cm	(凹面)コビキA、布目痕 (凸面)ヘラナデ、タタキ痕	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	(刻印)菊花文
瓦71	28	18-2	TG1994-1	丸瓦	包舎層 土塙南側斜面	長32.1cm、幅14.0cm、 厚2.6～3.1cm	(凹面)布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦72	28	19-1	TG1994-1	平瓦	落込B 上層	長12.3cm(残存)、 幅12.4cm(残存)、厚2.4cm	(凹面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)不良(軟質) (色調)暗灰色	市指定有形文化財 (凹面に刻印)千光口
瓦73	28	19-2	TG1994-1	平瓦	落込B 中～下層	長28.1cm、幅20.4～21.1cm、 厚2.2cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦74	28	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長31.4cm、幅22.7cm、 厚2.2cm	(凹面)ナデ、コビキA (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦75	28	19-2	TG1994-1	平瓦	落込B	長32.2cm、幅23.0cm、 厚2.0cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦76	28	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長31.5cm、幅22.2～24.0cm、 厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	(刻印)菊花文
瓦77	29	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長31.3cm、幅21.0～23.5cm、 厚1.9cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	(刻印)菊花文
瓦78	29	19-1	TG1994-1	平瓦	包舎層 旧墓地東側斜面	長10.0cm(残存)、 幅12.5cm(残存)、厚2.2cm	(凹面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)不良(軟質) (色調)暗灰色	(刻印)団
瓦79	29	19-1	TG1994-1	平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長21.5cm(残存)、 幅11.4cm(残存)、厚2.0cm	(凹面)ナデ	やや粗 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	市指定有形文化財 (凹面に刻印)千光寺
瓦80	29	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 寺跡西側斜面	長31.6cm、幅22.2～24.5cm、 厚2.0cm	(凹面)ナデ、布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦81	29	19-1	TG1994-1	平瓦	包舎層 7号墓下層瓦溜り	長33.9cm、 幅18.6cm(残存)、厚2.1cm	(凹面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)不良(軟質) (色調)黒、灰色	市指定有形文化財 (凹面に刻印)千
瓦82	29	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 墓道部北側斜面	長28.7cm、幅21.1cm、 厚2.4cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦83	29	19-2	TG1994-1	平瓦	包舎層 土塙南側斜面	長27.5cm、幅20.3cm、 厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦84	29	20-1	TG1994-1	鳥伏間瓦	落込B 上層	長25.7cm(残存)、幅19.2cm、 厚2.7cm	(凹面)ナデ、一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦85	29	20-1	TG1994-1	雁振瓦	包舎層 墓道部北側斜面	長22.5cm(残存)、幅20.3cm、 厚2.4cm	(凹面)ヘラナデ、 一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 やや大きめの小 石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦86	29	20-1	TG1994-1	雁振瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長32.0cm、幅16.7cm(残存)、 厚2.1cm	(凹面)ナデ、一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦87	29	20-1	TG1994-1	雁振瓦	落込B	長28.8cm(残存)、 幅14.7cm(残存)、厚2.3cm	(凹面)ナデ、一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦88	29	20-1	TG1994-1	雁振瓦	落込B	長28.2cm(残存)、 幅16.7cm(残存)、厚3.9cm	(凹面)ナデ、一部布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦89	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	包舎層 落込A上層瓦溜り	長16.0cm(残存)、 幅12.7cm(残存)、厚3.0～5.0cm	(表面)ナデ (裏面)ナデ (側面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)灰、黄灰色	
瓦90	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦(宝珠 文)	落込B	長8.7cm(残存)、 幅7.5cm(残存)、厚6.2cm	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	
瓦91	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	落込B	長12.9cm(残存)、 幅12.0cm(残存)、 厚2.7～4.4cm	(表面)ナデ (裏面)ナデ (側面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査年次	種別器種	出土遺構・層位	法量	調整	胎土	焼成・色調	備考
瓦92	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	落込B	長6.7cm(残存)、 幅4.5cm(残存)、 厚4.6cm(残存)	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)灰色	
瓦93	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	落込B	長8.3cm(残存)、 幅6.1cm(残存)、厚3.7cm	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰白色	
瓦94	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鱧	包含層 土塀南側斜面	長8.5cm(残存)、 幅8.4cm(残存) 厚1.6~2.2cm	(裏面)ヘラ描き文	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦95	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鱧	包含層 土塀南側斜面	長5.8cm、幅16.4cm(残存)、 厚1.0~3.0cm	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦96	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鱧	包含層 土塀南側斜面	長5.9cm(残存)、 幅7.1cm(残存)、厚1.0~1.5cm	(表面)ナデ	やや密 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦97	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	包含層 旧墓地東側斜面	長10.6cm(残存)、 幅8.6cm(残存)、厚2.8cm	(表面)ナデ、波状文	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)暗灰色	
瓦98	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦(雲形)	包含層 土塀南側斜面	長9.3cm、幅12.6cm(残存)、 厚2.9~4.4cm	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦99	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 宝珠文鬼板 瓦	包含層 土塀南側斜面	長8.5cm(残存)、 幅13.7cm(残存)、 厚2.4~4.8cm	(表面)ナデ (裏面)ナデ	密 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色	釘穴
瓦100	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 鬼瓦	包含層 土塀南側斜面	長12.5cm(残存)、 幅6.6cm(残存)、 厚3.5~5.4cm(残存)	(表面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや軟質 (色調)灰、黒色	
瓦101	30	20-1	TG1994-1	道具瓦	包含層 土塀南側斜面	長8.4cm、幅9.1cm、 厚2.2cm	(凹面)ナデ (凸面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦102	30	20-1	TG1994-1	道具瓦	包含層 墓道部北側斜面	長9.5cm、幅13.3cm、 厚1.8~2.5cm	(凹面)布目痕 (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好(軟質?) (色調)灰色	
瓦103	30	20-1	TG1994-1	道具瓦	包含層 土塀南側斜面	長12.4cm(残存)、幅13.3cm、 厚2.0cm	(凸面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)暗灰色	
瓦104	30	20-1	TG1994-1	道具瓦 隅瓦	包含層 土塀南側下段	長12.0cm(残存)、 幅12.6cm(残存)、 厚1.5~3.2cm	(凸面)ナデ (凹面)ナデ	粗 小石、砂粒を含む	(焼成)やや不良 (色調)暗灰色	
瓦105	30	20-1	TG1994-1	道具瓦	包含層 土塀南側斜面	長12.5cm(残存)、 幅11.8cm(残存)、厚2.5cm	(凸面)ヘラナデ (凹面)ナデ	やや細 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	
瓦106	30	20-1	TG1994-1	道具瓦	包含層 落込A上層瓦溜り	長4.2cm(残存)、幅12.2cm、 厚1.4~2.1cm	(表面)蓮弁を意識 した線刻 (裏面)ナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)暗灰色	蓮弁文カ
瓦107	31	20-2	TG1999-1	軒丸瓦	土塀	長22.8cm(残存)、幅12.6cm、 厚2.1cm、瓦当径12.2cm、 瓦当厚1.4cm	(凹面)布目痕、コピキA (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色(N6/0)	軒丸E類 II群 15世紀
瓦108	31	20-2	TG1999-1	軒平瓦	土塀	長28.5cm、幅20.8cm、 厚2.4cm、瓦当高3.1cm、 瓦当厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラケズリ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰白色(10Y7/1)	軒平3類 II群 15世紀
瓦109	31	20-2	TG1999-1	軒平隅瓦	土塀	長12.5cm(残存)、幅22.9cm、 厚2.4cm、瓦当高3.8cm、 瓦当厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色(N4/0)	軒平2類 III群 16世紀前半~中頃
瓦110	31	20-2	TG2001-1	軒丸瓦	土塀南側崩落土	長15.3cm(残存)、幅14.0cm、 厚2.0cm、瓦当径14.0cm、 瓦当厚1.1cm	(凹面)布目痕、コピキA (凸面)ヘラナデ	やや粗 小石、砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色(N5/0)	軒丸A類 I群 14世紀
瓦111	31	20-2	TG2001-1	軒平瓦	土塀南側崩落土	長8.1cm(残存)、 幅10.0cm(残存)、厚1.7cm、 瓦当高3.7cm、瓦当厚1.9cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラナデ	やや粗 砂粒を多く含む	(焼成)良好(瓦当)、 やや不良(瓦部) (色調)灰、浅黄橙色 (N4/0、7.5YR8/6)	軒平3類 II群 15世紀
瓦112	31	20-2	TG2001-1	軒平瓦	土塀南側崩落土	長15.1cm(残存)、 幅11.8(残存)cm、厚2.1cm、 瓦当高3.5cm、瓦当厚2.1cm	(凹面)ナデ (凸面)ヘラケズリ	粗 砂粒を含む	(焼成)良好 (色調)灰色(N5/0)	軒平3類 II群 15世紀

但本堂庫裏修復八村方々相勤

右之通相違無御座候

西一月

右村戸長

堀内仲平 印

堺県令税所篤殿

「 河内国第三区上田原村

真言宗山城国八幡元杉本坊末

無住無旦 千光寺

留守居尼 一牛

一本尊觀世音 壹躰

外諸仏 貳躰

一仏具 焼物花瓶 木之蠟燭立

一境内 百三坪 御年貢地

一庫裏 梁三間・桁五間 屋根瓦葺

一付属米金 無御座候

但本堂惣而修復之義ハ留守居一牛方々相勤候

右之通相違無御座候、已上

西一月

右留守居

対馬一牛 印

戸長

堀内仲平 印

堺県令税所篤殿

「 御布達

河州区長・戸長江

今般廃寺申達候寺院坊舎堂庵之内江当今郷学校并出張所相設在之分、此俣学校永続見当之向ハ入札ニ不及、村中之預りと可相心得候、雖然仏躰仏具者同法類最寄近寺江相納、什物之義ハ布令通入札、高直ニ而売払可取斗候、永続難致破損等之向ハ何れニ而も引直、夫々達ニ基き所分可致事

但建家寄付人判然之向ハ当人江示談、相当之価を以買入候共当人方学校用寄付候共聞届候事

右之趣区々村々江触知するもの也

西二月 堺県庁

付記

本文書は千光寺跡発掘の際、市民から文書の存在が知らされたもので、市教育委員会ではその際に写しを作成し原文書は市民へ返却した。今回翻刻に際し再度文書の借用を企図したが連絡者への依頼は事情により叶わず、再調査したものの原文書所蔵者情報は現時点で不明である。しかしながらその内容は今回の千光寺跡発掘調査を報告する上で欠かせないものであり、ここに全文を掲載する。なお翻刻は市教育委員会保管の写しを用いて、山中浩之氏（四條畷市文化財保護審議会委員）がおこなった。

「 河内国第三区下田原村

古義真言宗小本寺法元寺末

無住無旦 正福寺

一本尊大日如来

一小仏 不動明王

一同 地藏菩薩

一仏具 花瓶香爐蠟燭立 焼物

一本堂 梁三間・桁六間 屋根藁葺

一境内 五拾六坪 年貢地

一庫裏付属之物 無御座候

一付属米金 無御座候

右之通相違無御座候、已上

西一月 右法元寺住持

法本恵順 印

右村戸長

時地藤平 印

堺県令税所篤殿

一仏具 真鍮花瓶焼物蠟燭立

一本堂 梁三間・桁三間 屋根藁葺

一境内 八拾八坪 御年貢地

一庫裏 梁三間半・桁五間 屋根藁葺

一付属米金 無御座候

但本堂庫裏修復之義八上田原下田原兩村々勤居候

右之通相違無御座候、已上

西一月 上田原村戸長

堀内仲平 印

下田原村戸長

畦地藤平 印

堺県令税所篤殿

「

河内国第三区上田原村

真言宗京御室菩提院末

無住無旦 森福寺

一本尊薬師如来 壹躰

外 小仏 壹躰

一仏具 鉄之花瓶

一本堂 三間四方 屋根藁葺

一境内 百式拾坪 御年貢地

一庫裏 梁三間半・桁五間 屋根藁葺

一付属米金 無御座候

「 河内国第三区上田原村

真言宗京御室菩提院末

無住無旦 神宮寺

一本尊薬師如来 壹躰

外 諸仏 六体

付編 『廃寺取調書』(明治六年) 翻刻

右村戸長
田中長三郎 印

(表紙)
明治六年酉二月

堺県令税所篤殿

廃寺取調書

河内第三区

会議所

右除地上地二付取計方地方掛り江四月二日相伺候処、追而入
札沙汰可致段被仰聞候事

河内国第三区堀溝村

河内国第三区中野村本郷

融通念仏宗大念寺末

浄土宗西山派正法寺末

無住無担 紫覆寺

無住無旦 寂照院

一本尊拾壹面觀音 但厨子入二絵像壹幅

一本尊藥師如来 壹鉢

一仏具 真鍮三具足 前机盛物臺

一仏具 無無御座候

一境内 東西四間・南北三間 除地

一本堂 梁壹間半・桁壹間半 屋根瓦葺

一地蔵堂 壹宇 但境内二有之候

一境内 四拾五坪 御年貢地

右堂中二石地蔵、石大師、石行者等二御座候

一庫裏付属之物 無御座候

一庫裏付属 一切無御座候

一付属米金 無御座候

但右本堂惣而修復之義ハ正法寺且中々相勤居申候

一付属米金 無御座候

右紫覆寺本堂之義者往古洪水二相崩、其後得再建」不仕、本尊觀世音

右之通相違無御座候、已上

ハ当時大念寺二安置仕候、則只今」跡境内二地蔵之小堂在之而已二御

右正法寺住持

座候、是茂大念寺江」合仏仕度奉存候、尤是迄右地蔵堂修覆、村方より」

井上實道 印

仕居候、乍恐此段御断奉申上候、以上

右村戸長

癸酉一月十二日

右大念寺住職

岡島佐平 印

関本照阿 印

堺県令税所篤殿

写真図版 1



1. 旧月泉寺墓地（平成4年10月2日撮影）



2. 寺口遺跡・千光寺跡 調査前全景（西から・平成6年）

写真図版 2



1. TG1994-1 調査地区全景 (左が北)



2. TG1994-1 寺域・墓域全景 (南西から)

写真図版 3



1. TG1994-1 墓域全景 (西から)



2. TG1994-1 墓域全景 (東から)

写真図版 4



1. TG1994-1 墓域近景 (南西から)



2. TG1994-1 1・2・3号墓全景 (西から)

写真図版 5



1. TG1994-1 3号墓 1・2号土坑検出状況 (東から)



2. TG1994-1 3号墓 1・2号土坑調査状況 (南東から)

写真図版 6



1. TG1994-1 6号墓 検出状況 (南から)



2. TG1994-1 6号墓 常滑大甕出土状況 (東から)

写真図版 7



1. TG1994-1 8号墓 人骨出土状況 (北から)



2. TG1994-1 12~27・37号墓 五輪塔群 (東から)

写真図版 8



1. TG1994-1 青磁袴腰香炉出土状況（北から）



2. TG1994-1 寺域全景（西から）

写真図版 9



1. TG1994-1 土塀全景（南西から）



2. TG1994-1 土塀排水施設（北から）

写真図版 10



1. TG1994-1 土塀版築状況 (西から)



2. TG1999-1 調査地区全景 (左が北)

写真図版 11



1. TG2001-1 調査地区全景（北から）



2. TG2001-1 土塀・墓碑
検出状況（東から）



3. TG2001-1 キリシタン墓碑
出土状況（東から）

写真図版 12

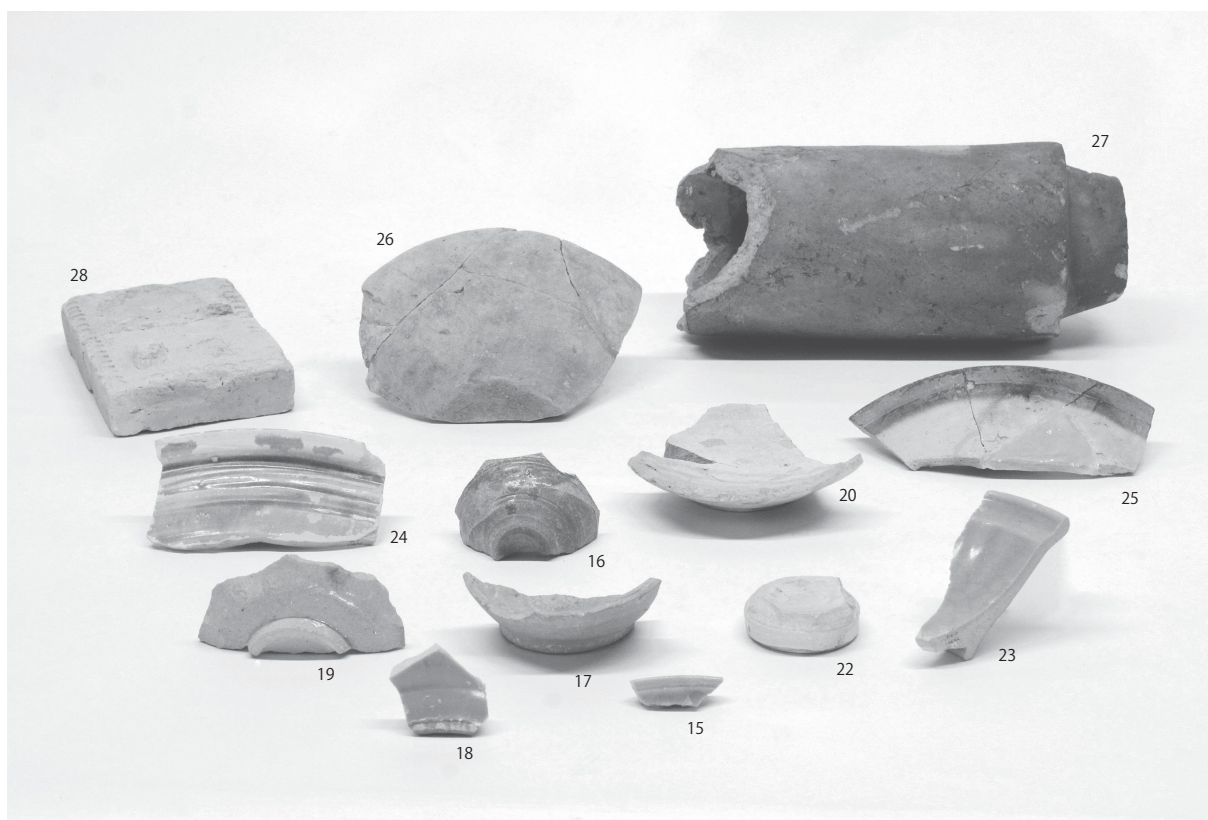


1. TG1994-1 出土遺物 (遺構①)

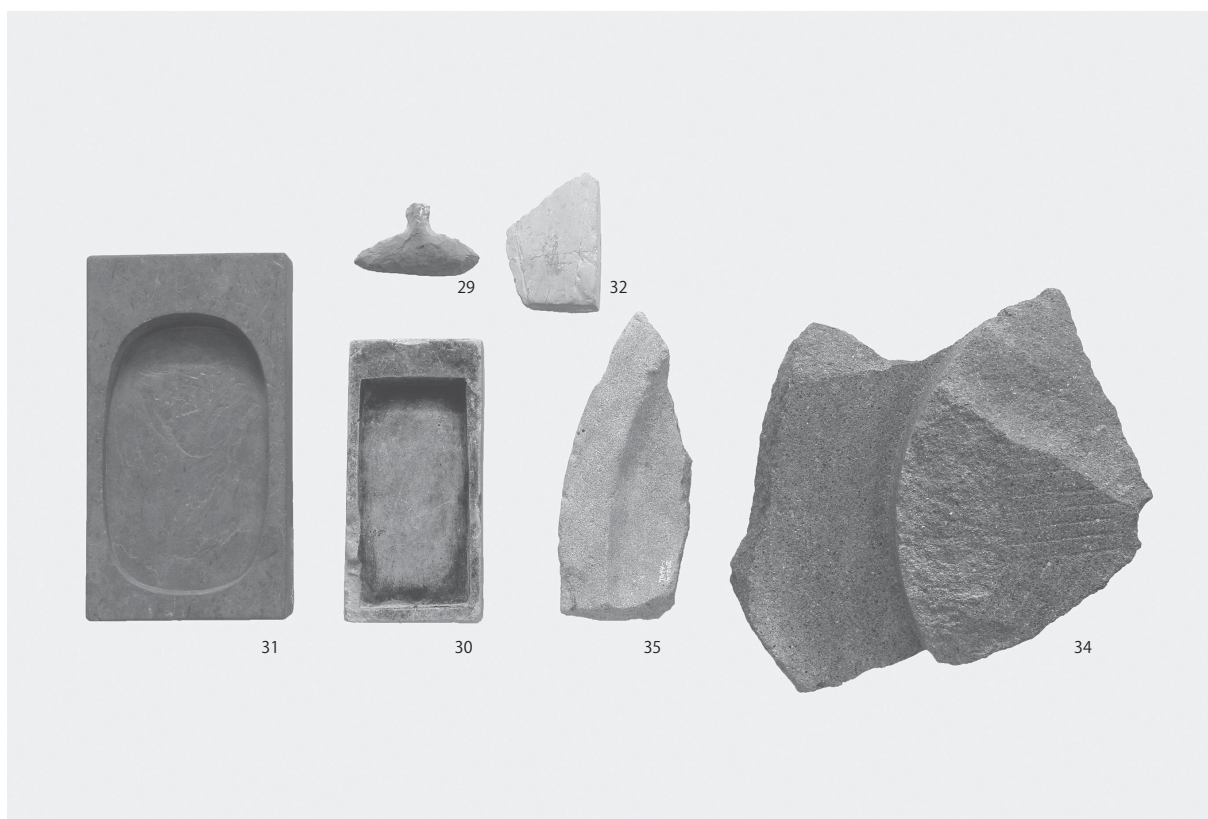


2. TG1994-1 出土遺物 (遺構②)

写真図版 13

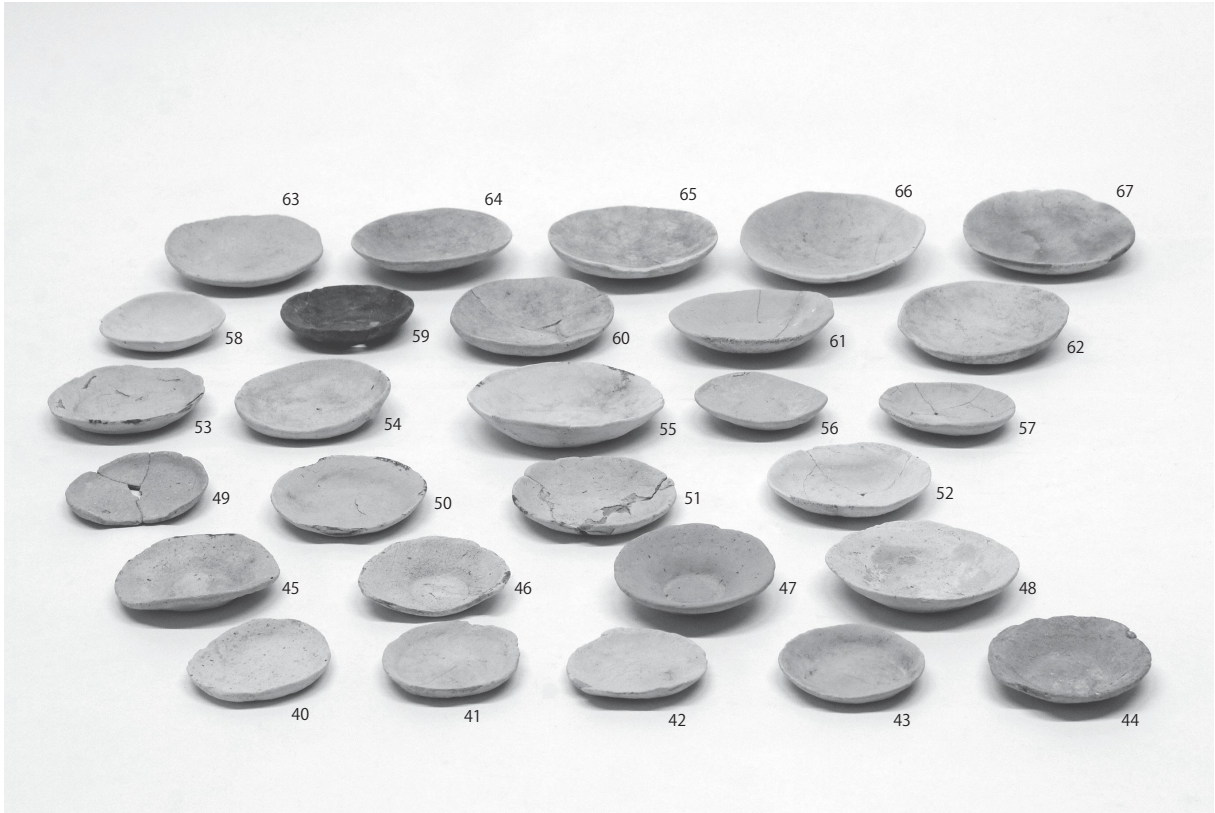


1. TG1994-1 出土遺物 (遺構③)



2. TG1994-1 出土遺物 (石製品)

写真図版 14



1. TG1994-1 出土遺物 (包含層①)



2. TG1994-1 出土遺物 (包含層②)

写真図版 15



1. TG1994-1 出土遺物 (包含層③)

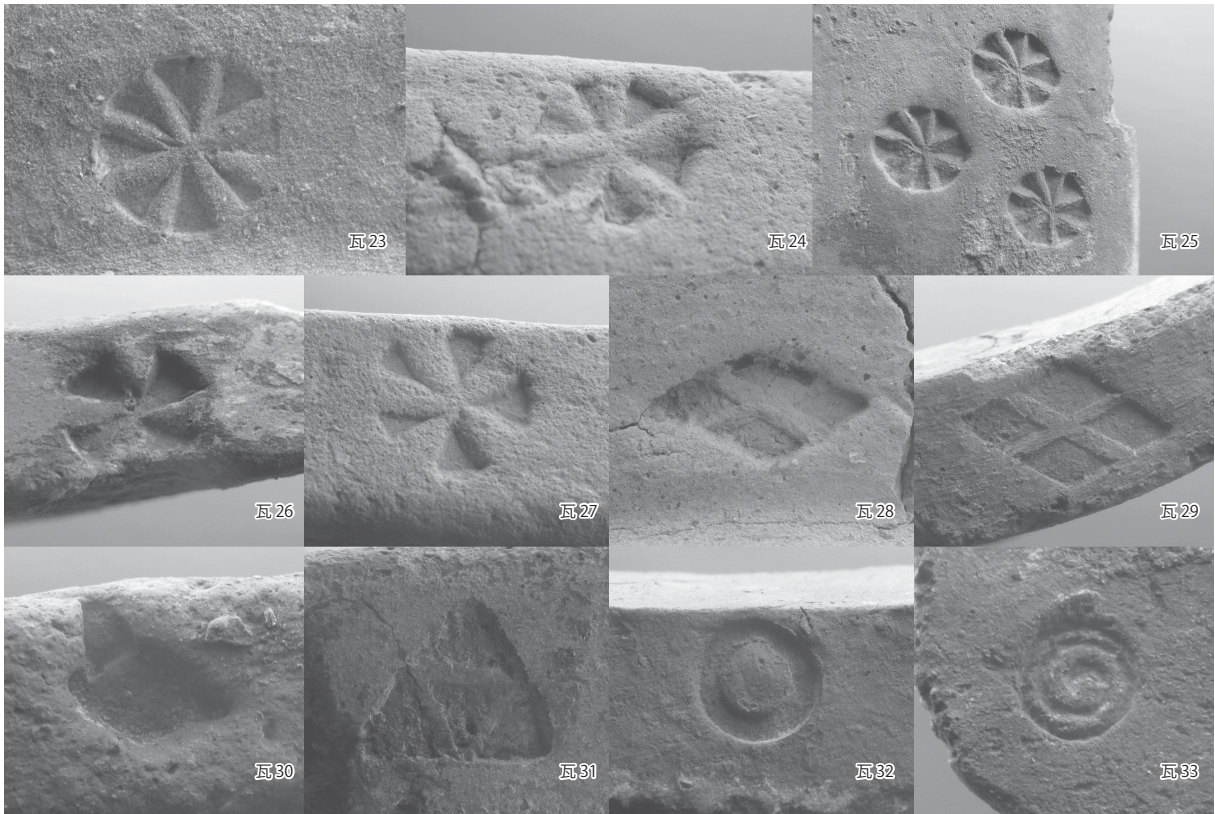


2. TG1994-1 出土遺物 (包含層④)

写真図版 16



1. TG1994-1 出土遺物 (包含層⑤)

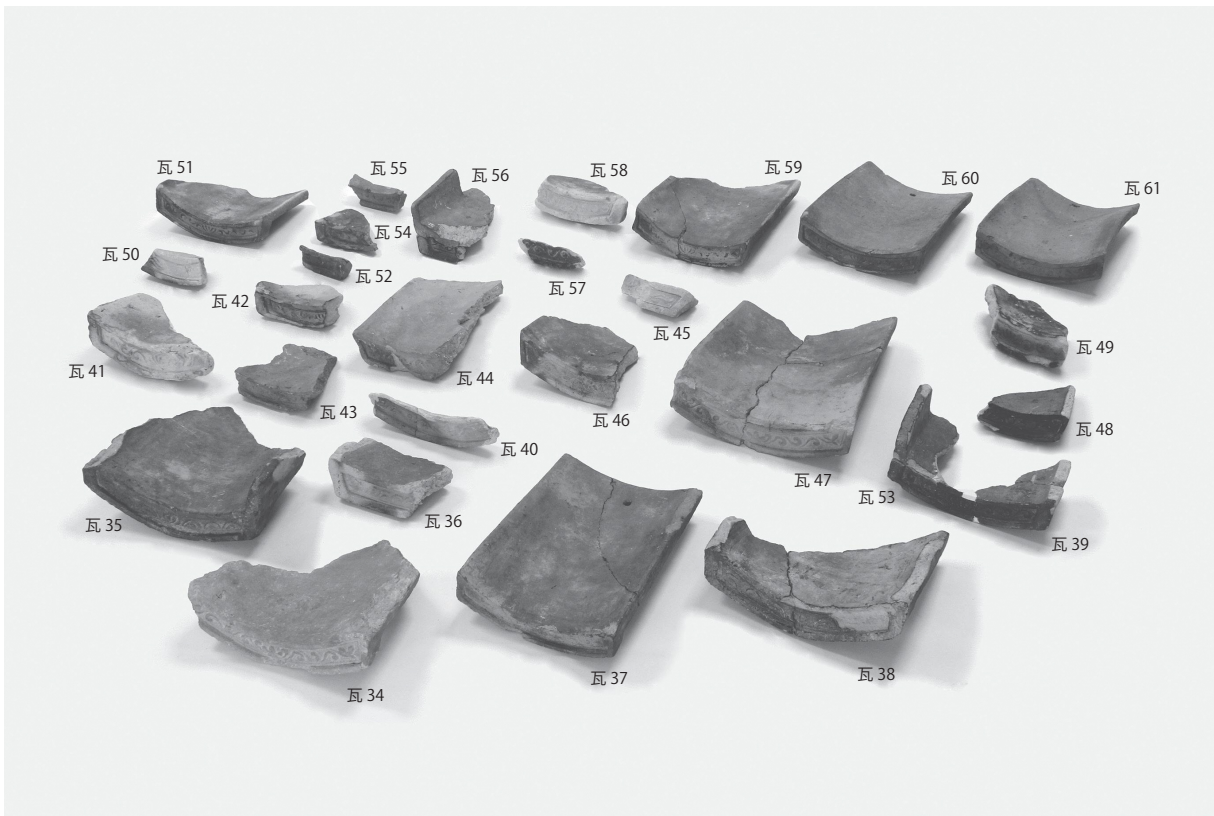


2. TG1994-1 出土瓦 (刻印)

写真図版 17



1. TG1994-1 出土瓦 (軒丸瓦)

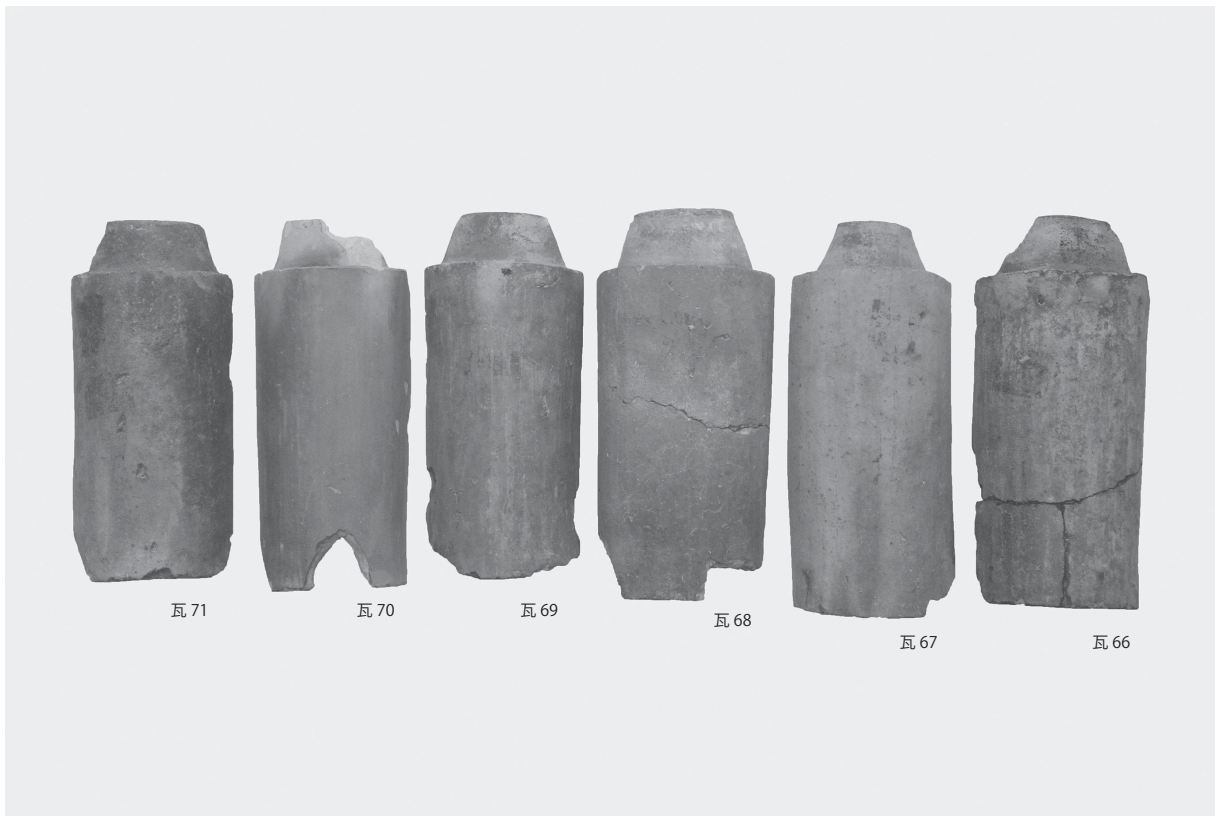


2. TG1994-1 出土瓦 (軒平瓦)

写真図版 18



1. TG1994-1 出土瓦 (鳥伏間瓦)

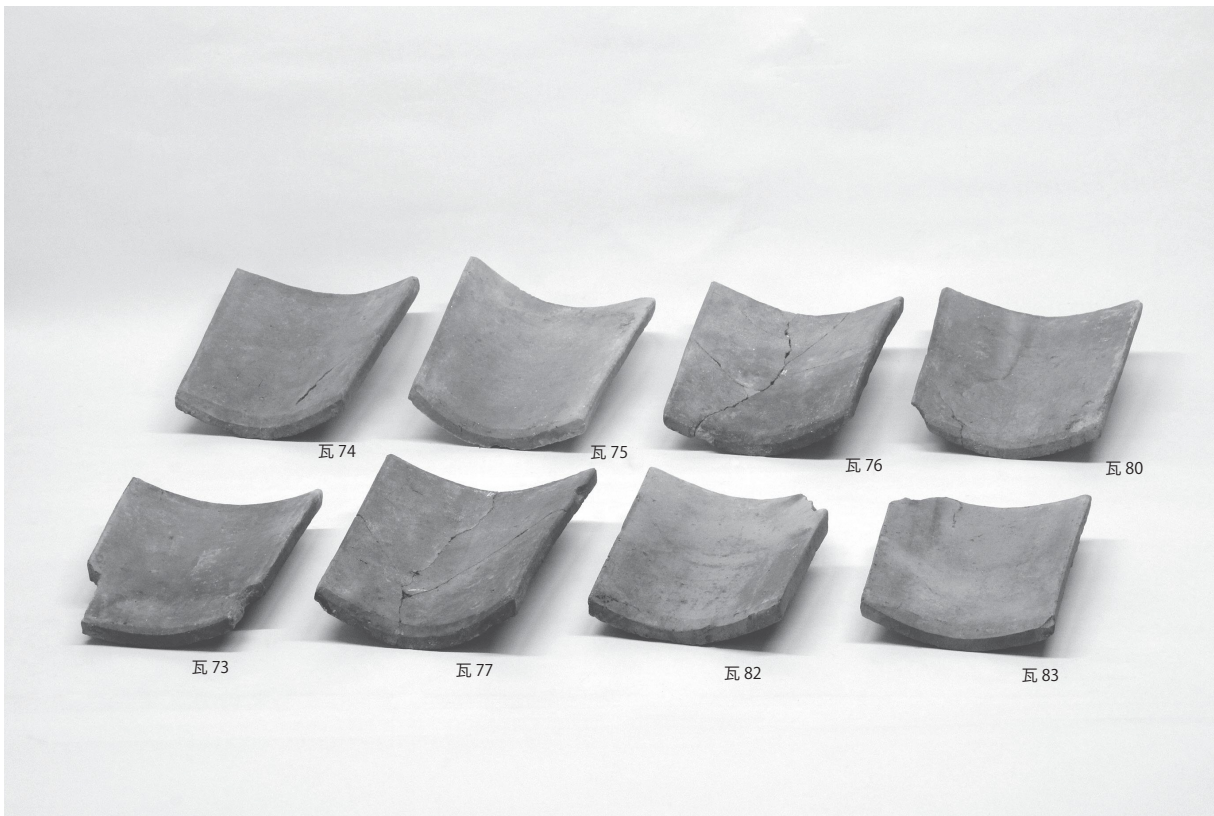


2. TG1994-1 出土瓦 (丸瓦)

写真図版 19



1. TG1994-1 出土瓦（「千光寺」刻印瓦）



2. TG1994-1 出土瓦（平瓦）

写真図版 20



1. TG1994-1 出土瓦 (雁振瓦・道具瓦)



2. TG1999-1・2001-1 出土瓦

報告書抄録

ふりがな	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第10号
副書名	寺口遺跡・千光寺跡
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第62集
編著者名	村上 始・實盛良彦・田中香里（編）・山中浩之
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2023(令和5)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
てらぐちいせき・ せんこうじあと 寺口遺跡・千光 寺跡 (TG1994-1・ 1999-1・2001-1)	しじょうなわてし おおあざかみたわら 四條畷市 大字上田原	272299	34° 43' 21"	135° 41' 41"	平成6年4月1 日～8月10日 平成11年11月 15日～18日 平成14年2月12 日～20日	4250 m ² 185 m ² 225 m ²	宅地造成、 道路建設、 駐車場造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺口遺跡・千光寺 跡(TG1994-1・ 1999-1・2001-1)	社寺跡 、墓地	中世、 近世	寺跡、墓 地、池、土 塀跡、土 坑、Pit、 溝	土師器、須恵器、瓦 器、陶磁器、瓦、懸 仏、金属製品、石器、 石製品、キリシタン 墓碑	国人領主層の墓地・寺跡 を検出。 完形の青磁袴腰香炉、日 本最古のキリシタン墓 碑出土。

四條畷市文化財調査報告 第 62 集

四條畷市文化財調査年報

第 10 号

寺口遺跡・千光寺跡

令和 5 年（2023）3 月 31 日発行

編 集 四條畷市教育委員会

発 行 四條畷市教育委員会

大阪府四條畷市中野本町 1 番 1 号

印 刷 株式会社 共英印刷所

